館あり、植物園と天文臺とは理科大學に附屬し、中央氣象臺は全國氣象觀測の中央測候所たり。

四、商業上の都會

東京市は東洋の大都會にして、商業工藝上の一大中心地をなし、百貨輻輳して、關東八州は勿論遠く奥羽の物産、需用品も茲に集散し、關西の大阪に匹敵す、日本銀行、勸業銀行、興業銀行、第一、第百、第三、第十五、三井、三菱、安田等の大銀行あり、東京商業會議所及び、日本郵船會社、日本鐵道會社、三井物産會社等の大會社ありて、富豪の多きこと本邦第一なり。京橋銀座通日本橋筋、神田小川町通は往來絡繹、商店櫛比して最も繁昌する所とす、取引賣買の主位を占むるものは、米穀、酒、醬油、茶、煙草、油、石油、砂糖、鰹節、牛肉、和洋座繰綿糸、紡績綿糸晒木綿、晒金巾、生糸等にして、魚類、青物の取引亦頗る盛なり。

製造工業にては紡績、製紙、陶磁器、青銅器及銅器、燐寸等の製造頗る大仕掛にして、造船には石川島造船所あり、機械製造には芝浦製作所、本所平岡工場等盛なり。

圖書の出版、新聞雜誌の發行亦全國第一に位し、書籍の出版は毎年二萬部に及び、新聞雜誌の發行數は全國發行總數の三分の一に上る。

五、交通上の都會

東京市は全國交通機關の中心都會をなし、交通上の幹線こゝを發してこゝに集まる、眞に四通八達の要地なり、官設東海道線は新橋を發して、關西、中國、九州に向ひ、日本鐵道會社奥州線は上野を起點として青森に向ひ、高崎線は奥羽線と共に上野を發し、大宮にて分岐して高崎に向ひ、更に直江津を經て新潟に至る、常磐線は上野を發し、田端より奥羽線に分れて土浦水戸を經て仙臺に向ふ。

日本鐵道山の手線は品川、赤羽間を連絡して、東海道線と奥州線とを接續す。

甲武鐵道は飯田町を起點とし、八王子に通じ、更に中央線にまり甲府を經て信濃に入らんとす、

飯田町よりは市内神田萬世橋に延長をはかる。

總武鐵道は本所を起點とし千葉、銚子に至る。

東武鐵道は吾妻橋を起點とし、千住、久喜、川俣に向ふ。

市内には電車鐵道あり。

東京郵便電信局全國郵便電信の中心機關をなし、電信電話線縱横に走りて蜘糸の如し。

六、遊覽上の都會

東京市は遊覽上より見るも、一ケの中心都會たるを失はず。

上野公園　都下第一の勝地なり、老樹鬱蒼、風景眺望に富み古蹟多く、四時の遊客絶ゆる時なし。

芝公園　茂林相連なりて綠陰、影清に三伏の炎暑も涼味簡に迫る、徳川氏累代の廟所あり、金

碧燦爛として綠葉と相映じ、宛然一幅の繪畫をなす。

淺草公園 淺草觀音の境內にして、興行物多く、俗氣紛々として雜沓を極むる所、やがてこの公園の繁華なるところなり。

日比谷公園 明治卅六年六月に開園せるもの、趣向新奇にして泉石の美を競ふ。

九段坂 靖國神社の境內にして櫻樹多し。

その他市內外の各勝地として團子坂の菊、瀧の川紅葉、墨堤の櫻、龜井戶の梅、藤、御殿山の櫻等屈指に遑あらず。

東京市が建設せられたる事情

東京市のかゝる大都をなせし所以のものは何ぞや。

凡の都會に起る種々の原因あるべしと雖ども、その主要なるものを擧ぐれば。

一、地方生活の必要より起るもの、日用品を供給し、物產を集散する都府範圍の中心市場をなすもの。

二、交通線路の起點、終點、結節點、船舶の發着所、水路、鐵路の終局地、その交叉地、水陸の連絡地は自ら貨物、乘客の集まる所となり、從つて都會を生す。

三、政治、軍備、宗教、學術の中心地をなすによりて起るもの。

四、工業、商業發達し、或は特殊の物產ある地。

五、著名なる神社、佛閣の所在地、或は名勝、舊蹟、溫泉場、海水浴場等。

東京市は此等數原因を具有するものなり、即ち關東平野の中央に位し、貨物集散の中心市街をなし、前面には海を控へて、百貨を吞吐する橫濱港に近く、背面には廣き平野ありて、需用供給の範圍大に、且つ東京灣の弧形をなせるより防禦の上よりも極めて堅固にして、近世進歩せる海軍にても砲撃するに由なく、中央政府、諸會社、學校の處在地、交通線路の中心點として、かゝる大發達は將來尤も[illegible]なり。

東京市の既往

◎東京市はもと江戸と云ふ秩父河越の一族、江戸氏の居地なり、武藏七黨系圖に秩父太郎重弘が五男を江戸太郎重綱と云ふ、この重綱の時始めて江戸の地に居り、後、多摩郡木田見村に移る、長祿元年扇谷上杉氏の家宰、太田道灌こゝに築く、當時は海濱の一漁村にして、道灌がその狀を述べたる歌。

八王子 我庵は松原つゞき海近く、富士の高嶺を軒端にぞ見る

天正十八年德川家康の入府するに及び頓に隆盛に赴き以て今日に至る。

東京府の將來

我國威の益々隆盛に赴き、太平洋が世界歷史の中心となるの時期、眼前に逼りたれば、東京市の將來の發達驚くべきものあるべし。

鐵道

鐵道 甲武線は飯田町を發し、甲州街道に沿ふて西に走る、國分寺驛より、支線川越鐵道分岐して川越町に至る、本線は更に西に進み、立川驛より更に青梅鐵道を分岐して青梅町に至り、更に日向和田に至る、多摩川は立川の西にて甲武線を橫切りて南流す。

多摩川は西多摩郡、雲取山の奧雁坂峠の東南に發し、峽谷を流るゝこと十五里、青梅町に至り漸く山を離れ、東南に進み、武藏野の南邊を貫く、十七里、習鼻に至り、東京灣に注ぐ、下流六鄕川の名あり、水鮎を產す、水清冽にして、古昔朝廷に上る手作りの布をこの川にて晒せしものと見え調布の玉川と云ふ日本六玉川の一なり、[illegible]

玉川上水の起源

東京市民の飲料水は、この川の上流西多摩郡羽村より導き、淀橋に貯水場を設け以て市内に給水す、玉川上水これなり。

武藏　調布玉川　近江　野路玉川　山城　井手玉川
攝津　三島玉川　陸奥　野田玉川　紀伊　高野玉川

上水記云、承應元壬辰年(將軍家綱)までは、江戸御城内、及び御城下、上水道無之、下々にては所々の水溜、溜池などの水を汲み、桶にて仕掛取用て不自由なりしが、上水道を町奉行、神尾備前守の御尋に由り庄右衛門、清右衛門、諸方相求むる所に羽村より江戸まで、道法十三里の水盛を考へ御用水に成るべき旨繪圖書付を以て評定所の申出るにより、御老中阿部豐後守以下道筋六日の逗留にて見分相濟て、江戸へ歸參、同年十一月廿五日評定所にて、上水道掘普請取掛之儀兩人へ申渡、翌巳年四月四日より掘初、同年十一月十五日までに四谷大木戸まで掘り渡す云々。

因に云ふ庄右衛門、清右衛門の水道を設計するや毎夜線香或は燈灯を地上に列れ遙に之を望み、その火影の低き所を求めて道筋を選みしと云ふ。その功成るや御普請役を命ぜられ、玉川の姓を賜はる兩人共江戸の人なり。

八王子町は甲武線の終局地これより中央線によりて山梨縣に入る、人口二萬三千、東京を去る十一里、蠶絲、紡績の業頗る盛に、桐生、足利と共に關東織物の三大中心地をなし、產額の巨大なる技術の精巧なる、事業の盛なる、京都西陣を除きて他にはその比を見ず、生糸織物の市は、毎月四、八の日を以て開き、年々少くとも五六百萬圓以上の取引を爲す、織物は絹物主にして博多帶地、縞八丈、風通織、一樂織、斜子等多くその他紬物、絹綿交織、木綿物をも出し、輸出物としては羽二重の產多し。

この織物業の基礎は遠く享保年間にありしが、爾來盛衰常ならず、今は染色織物學校を設けて改良進歩をはかる。

伊豆七島

伊豆七島　伊豆東南海中に位する、大島より南方四十餘里の間、太平洋中に散列する火山性列島を云ふ、大島、利島、新島、神津島、三宅島、御藏島、八丈島之なり、而して多くの小島之に屬す、地勢自ら別なれども統治の便を以て東京府に屬し、島司を置きて之を治む、されど風俗習慣の如き内地と異なるもの尠なからず。

大島

大島は伊豆下田港を去る十三里、面積四方里、中央に三原火山あり、四時噴煙絶えず、人口六千男子は勞働せず、家事、耕作、伐木、一切女子の業なり、物產は林產を第一とし、水產之に次ぎ農業は甚だ微なり、保元の亂後源爲朝の流されしはこの島なり。

利島

利島は大島の南方二里、周回二里半、人口三百十五人、七島中最小のもの。

新島

新島七島中第三に位す、周回七里人口三千八百。

神津島

神津島周回五里三十三町人口二千、天上山あり。

三宅島

三宅島周回六里二十七町、人口三千七百、牧場あり、良牛を產す。

御藏島

御藏島、三宅島の南四里半の所にあり、黃楊を產す、黒潮海流その南を流る。

八丈島

八丈島周回四十里半瓢形をなす、人口一萬に近く、紡織の業盛に黃八丈を產す、牧畜亦行はれ三

未頃の伊豆列島中[illegible]八丈島[illegible]

小笠原島は今を去る三百有餘年前、文祿二年小笠原貞賴の發見せしところにして、八丈島の南、百二十里にあり。[illegible]父島、母島の三列島より成る。人口は五千[illegible]外國歸化人百十人あり。甘蔗、香蕉(バナナ)、鳳梨(アナナス)、檸檬(レモン)等を產す。甘蔗より製する砂糖は本島の主要產物にして、產額十四萬圓に上る。[illegible]牧畜、養鷄、林投樹(タコノキ)の葉を以て造れる細工物亦有名なり。

[illegible]小笠原島との交通は東京府の命令航路[illegible]日本郵船會社の小笠原島線あり[illegible]噸數七百噸以上汽船一艘を用ひ、每月一回橫濱を發船す。

[illegible]往航一月より十一月まで及十二月中は八丈島、小笠原島、父島、母島沖港を經て同島北村へ六月より十一月までは八丈島、小笠原島父島、母島沖港へ航海し、復航は每航小笠原島父島八丈島に寄港して橫濱に寄航す。但五月及七月は[illegible]に六月及八月は[illegible]島及[illegible]島に往復とも寄港し又六月は[illegible]島及[illegible]北硫黃島に航海す。[illegible]

父島聟島線　四噸以上の小蒸汽船一艘を用ひ、父島二見港より聟島南濱へ每月一回發船し、往復とも媒島發港に寄港す。[illegible]

父島弟島線　三噸以上の小蒸汽船一艘を用ひ、父島二見港より弟島黑濱へ每月一回發船す。

[illegible]以上二線路受命者淺沼丈之助。[illegible]

[illegible]父島母島線　四噸以上の小蒸汽船一艘を用ひ、父島二見港より母島沖港へ每月二回發船す。但每月一回復航のとき母島北港に寄港す。受命者佐藤福吉。

伊豆七島[illegible]

母島姪島線　三噸以上の小蒸汽船一艘を用ひ、母島沖港より姪島西港へ每月一回發船し往復とも姉島北濱妹島北濱に寄港す。受命者前田善兵衛[illegible]

研究上の注意

一、準備　東京市街地圖、東京名勝寫眞、八王子織物、香蕉、鳳梨、林投樹葉の細工物。

二、東京市は何故にかゝる大都をなせしかを推究すべし。[illegible]

三、平野と都會、川と都會、大都會には大なる田舍の必要なる所以を充分理解すべし。[illegible]

四、小笠原島の物產は、熱帶地方產物の說明となるべきを以て、特に留意して實物觀察を怠るなかれ。

五、島民の風俗純樸にして、天眞なるところ、その團結心の厚きところ、言語、慣習の古風なるところ、伊豆七島の例によりて類推すべし。

神奈川縣

[illegible]

沿革　[illegible]相模[illegible]源賴朝、幕府を鎌倉に開き、兵馬の權を掌握せし本據の地たり。その執權北條氏は世世本州の守に任じて、國命を執ること十代。足利尊氏の反するに及びて、又府を鎌倉に定め京師に抗す。後、關東管領を此に置きしより、足利基氏の子孫世々之を領せり。北條早雲起るに及びて、此をも併呑し小田原に住すること五世、豐臣氏に亡ぼされしかば遂に德川の領となる。小田原及荻の山中の三藩あり、浦賀に奉行あり。[illegible]武藏の部は東京府の條を見よ。

位置　地勢　河流　沿海

位置　當東京府の南に隣り、西山梨縣、靜岡縣に接し、東は東京灣に臨む、三浦半島は長く東南に突出して房總半島と共に東京灣を抱く、三浦半島は亦東京灣と相模灘とを分ち、神奈川縣の南は、この波浪高き相模灣に洗はる、縣廳を橫濱に置き、武藏の南方十市三郡（橫濱市、久良岐（クラキ）、橘樹（タチバナ）、都筑（ツヅキ））及び相模全國（三浦、鎌倉、高座（タカクラ）、中、足柄上、足柄下、津久井（アシガラカミ、シモ、ツクイ）、愛甲（アイコー））の八郡を管す。

地勢　西靜岡、山梨兩縣との境上は、箱根、足柄の連山走れるを以て土地高峻なれども、東及び南の地は關東平野の一部にして、地勢平坦、地味肥沃なり、地勢かくの如くなるを以て馬入川酒匂川皆西北に發し東南流して相模灣に入る。

河流　酒匂川（サカワ）は富士山の東麓、駿河、駿東郡に發し、源を鮎澤（アユサワ）川と云ふ、足柄山を南より東に繞り、相模に入り、小田原町の北東三十町の所にて海に入る、長十二里。馬入川は又相模川と云ふ、上流は桂川と呼び、甲斐國都留郡にある富士裾野の湖沼より發す。郡内の峽間を東に流れて相模に入り、南流して海に入る、全長卅二里都留郡上野原より以下稍舟揖の便あり。

沿海　東京灣の神奈川縣に面する一帶は水深く且灣形南北に長くして深く内地に灣入し、風波を禦ぐに便多く、且つその不規則なる亂形をなせる所より、軍事上の要害もはければ、東京灣は世界に對する本邦の門戶にして、我國幾多港灣中最も重要なるものなり、而して東京灣邊の重要なる港は、主として神奈川縣にあり。

相模灣は相模の南方に橫はれる一大灣にして、伊豆半島はその西を擁し、三浦半島はその東を抱し、深さ頗る大にして、百々の海深線は海岸に近接す、唯惜むらくは海岸出入に乏しき凸凹面にして、風波を避くるに處なく、砂土空しく連なりて、碇泊地を得るに由なし。

鐵道　東海道線　東京新橋を發して南し、多摩川を越えて神奈川に入る、河畔に川崎あり、ここより電車鐵道ありて、平間寺の大師に通ず。鶴見驛の南方には薩摩藩士が英人を斬りし生麥あり、鶴見の西は神奈川にして、これより橫濱を過ぎ、大船に至る、ここより橫須賀線は分岐して、鎌倉を過ぎ、橫須賀に至る。本線は更に西して馬入川を渡り、大磯、國府津を經て、海岸を離れて、酒匂川の谷を溯りて西北に向ひ、足柄山を繞りて靜岡縣に入る。

都會　橫濱市　は東京の南八里、汽車一時間にして達するを得、人口三十二萬、外國居留民五千我國第一の貿易港にして、我國第四位の大都會なり、本牧十二天鼻、南を扼して風波を遮り一帶の丘陵背後を圍む、本牧十二天鼻と鶴見川口とを連ぬる直線以内を橫濱港と稱し、幅四里、深二里半、港内深くして八伊乃至十二伊なり、港内水深く、海岸附近にして已に二尋四尋に達し次第に五尋より九尋に及す底質は大抵泥なり、朔望高潮五時三十分大潮昇二十七呎四分の一、小潮昇四呎四分の一に及ぶ、二條の防波堤長く南北より延び、更に港を作り、長六町に達する棧橋その中に突出して二萬噸以上の大船と雖ども、之に橫付するを得、その岸頭に稅關役所あり、本港

の沿岸は即ち横濱市の市街にして、商館桐密に櫛比せり。主要産物は手巾、七寶燒、陶磁器、家具、硝子器、洋傘、漆器、諸機械、扇子、團扇、麥酒、醬油、海苔、製茶等にして、殆ど其の東北は本邦第一の繭産地に接し、且つ東北は本邦第一の繭産地に接し、且つ毛の養蠶機業地を控へ、西は靜岡の茶業地に接し、且つ平洋を隔てゝ、支那南洋、アメリカと相對し遮ぐるものなく、水半はこの港にて占む、蓋し港に要する性質たる海深くして入江をなし、風波の恐なく大船巨舶を擊ぎ得ると、並に背面に大なる平野を控へて、物産の呑吐、集散の中心をなすとの兩資格を具備するによるなり。外國輸出品の主要なるものは生糸、綠茶、陶磁器、漆器、七寶燒、羽二重、甲斐絹、家具、金銀、銅鐵器、象牙彫刻器、絹手巾等にして輸入の主要なる者は鐵類、砂糖、米、大豆、麥粉、綿糸、洋毛、洋織物、石油、石炭、雜貨類なり、內國輸出品、酒、洋酒、麥酒、染料、繩、菓物、洋反物、洋糸、麥、外國米、輸入品は米、砂糖、鹽、茶、肥料魚油、生糸、材木、海産物等なり。交通線には、日本郵船會社、大阪商船會社及び外國滊船會社の船舶常に入に出入し、汽笛の聲は日夜絕えず、陸には鐵車の東奔西走するあり、その繁盛名狀すべからず。全世界百萬噸以上出入船ある港四十三ヶ、横濱はその二十八位。

今日世界列國の形勢、太平洋上の權力の消長は商業的勢力の消長と相關し、商業的勢力にして擴張せざる以上は、海上權の擴張を得べからず、隨て政治權力を擴張し得べからざるは攻で列國共に非常の熱心を以て太平洋の航路を競爭す。九々の滊船會社の航路が太平洋の此方より、太平洋を橫斷して、米國に至る、これ等の諸船舶の多くは横濱港に寄港す。

横濱と世界各國との航路

（一）、カナダ太平洋鐵道會社、香港バンクーバー。六千噸以上の商船、英國政府の補助金を受く。

（二）、北太平洋汽船會社、米國のタコマ、ポートランドより我日本諸港を經て香港、米人經營三千噸以上の商船。

（三）、太平洋郵船會社、香港—サンフランシスコ、米人經營。

（四）、カリフォルニア及び東洋汽船會社、サンヂーゴ港—香港、三千噸內外の船舶、米人經營。

（五）、支那相互汽船會社、上海—我國諸港—米國ビクトリア、タコマ、シアトル、英人經營。

（六）、ポートランド及び亞細亞汽船會社、米國ポートランド—香港、米人經營。

（七）、西洋及び東洋汽船會社、香港—桑港、英人經營、

（八）、日本郵船會社　本社、横濱。横濱—米國のビクトリア、シアトル。

（九）、東洋汽船會社　本社、横濱。船舶日本に屬すれども四洋及び東洋滊船會社と聯合し、その經理を同じうすその他歐洲より東洋に至る諸船舶も概ねこゝに寄港す。

（一）、英國ピーオー會社　ロンドン—上海。

（二）、北獨逸ロイド會社　ハンブルヒ　ブレメン—上海。

（三）、佛國西郵船會社　マルセイユ—横濱。

（四）、太平洋郵船會社　リバプール—横濱。

（五）、支那相互汽船會社　倫敦—上海。

（六）、日本郵船會社　横濱—倫敦—アンベルス、

その他伊太利汽船會社、墺地利ロイド會社等の汽船の寄港するあり、横濱の繁華想見すべきなり。

港の種類

凡そ港は水上交通路の集まる所なれば、その所在により海港と河港とに分つ、太河口にあるものは兩種の性質を兼ね、最も便利なるものとす、港は亦職務により、輸出港、輸入港、中次港の三種に分つを得べし、横濱港は輸出入港にして、未だ再輸出港たらざるも、將來中次港となるべき日遠からざるを以て、將來中次港としなす勘なければ中次港たるの實なしと雖ども、太平洋の中央ステーションとなるべき日遠からざるを以て、將來中次港と

て大發達をなすべきなり。

市の産物としては漆器、陶器等あり、漆器は橫濱漆器と稱し、主として輸出向なり、産額は、中郡、足柄下郡の産を合せて二十萬圓に過ぎず、陶器は、太田燒又眞葛燒と云ふ、京都の眞葛香齋の子、宮川香山、橫濱商人鈴木某の誘により、明治四年、久良岐郡太田村の下不二山下に陶窯を開き薩摩燒を摸して、專ら外國人に販賣す、濃厚の釉料を以て巧に紋樣を表はし、外人の趣好に適す、産額十五萬圓內外なり。

橫濱市の繁華は如斯盛なるも、今日を僅に四十年の昔に溯れば、全く寥寂の漁村に過ぎざりしのみ、安政六年神奈川港を開き外國互市場となせしより、漸次繁盛に赴き、以て今日の盛況に及ぶ、鐵道時進行中なる埋立事業、及び計劃中なる築港事業の成就するあらば市の偉觀刮目して俟つべきものあらん。

鎌倉町　人口八千、東、西、北の三方面は松樹林立せる、小山を以て圍まれ、その間纔かに極樂寺、朝比奈、小袋坂、藤澤、逗子に至る、街路等の切通を以て、四隣の町村に通ず、南の一方は、海水滊入す、之を由比濱といふ、海水浴に宜しく、亦古來經濟に名あり。鎌倉は戰術武器の幼稚なりし古代に於ては、要害堅固なれば源氏、北條氏、足利氏に至る迄で、二百年間、繁華を極め政治上の中心地たりしもの偶然に非ず。源賴義の勸請せりと云ふ鶴岡八幡宮、大塔宮を祀れる官幣中社鎌倉宮、荏柄天神等あり、建長、圓覺、壽福、淨智、淨妙は鎌倉五山にして淨土宗の光明寺、日蓮宗の妙本寺表はる、大佛は高德院にあり、高三丈五尺の寄銅の廬舍那佛、建長四年の鑄

造にして堂宇は破壞して露佛となる。

江之島

江の島　由比濱の西は七里濱にして、義經平氏を滅して鎌倉に歸らんとせる時、兄頼朝の怒に觸れ、一書を草して寃を訴へし地なる腰越に出づ、その西北は片瀬にして、片瀬の前面海上にある周回半里程なる一小島、これ即ち江之島にして、斷崖絕壁四面を圍み、怒濤の吼ゆる聲、日夜絕えず、富士、箱根、天城の諸山を望み眺望絕佳その類少なし。

横須賀軍港

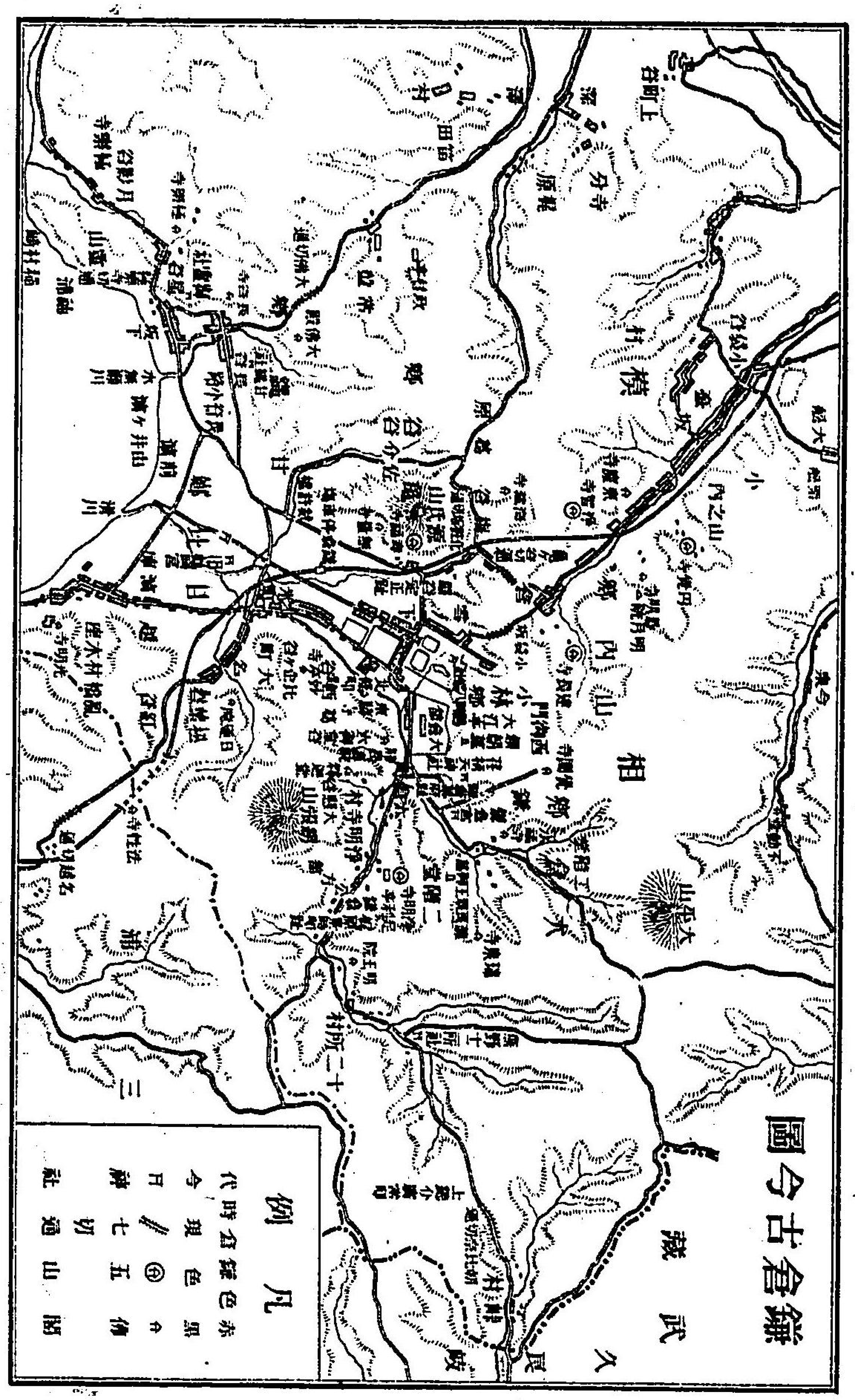
横須賀軍港　相模國三浦郡の東北、東京灣內更に小灣をなし、勝力岬と箱岬と港口を扼して北に開き、口徑僅に四町餘なるも、內に入りて漸く廣濶し、連山周圍を繞るが故に、暴風怒濤の時と雖ども、安全に船舶を碇泊せしむるを得、第一海軍區の鎮守府所在地なり。

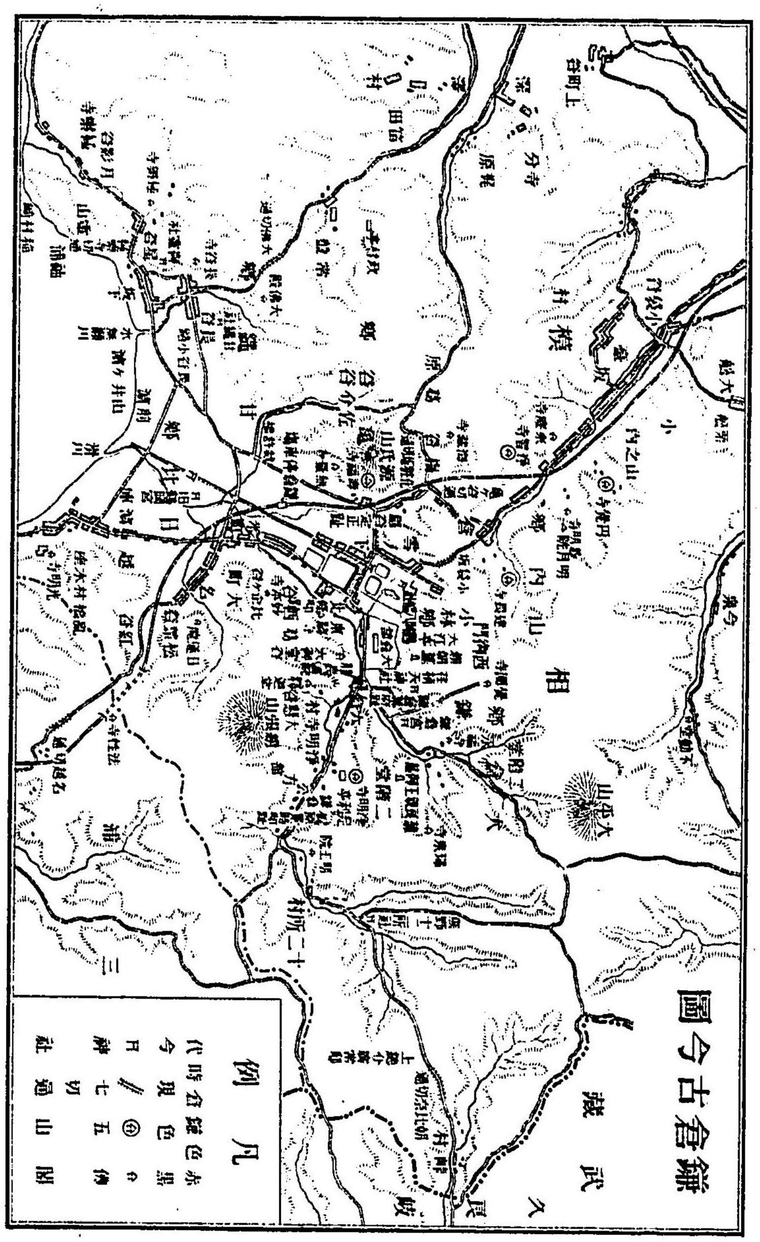
管轄は北海道の海岸海面より陸奧の海岸海面を經て本州東岸及南岸を傳へ紀伊南牟婁、東牟婁郡界に至る、海岸海面及小笠原島の海岸海面なり。

鎮守府の外、造船所、船渠、海兵團、海軍機關學校、海軍水雷術練習所、海軍病院あり、人口二萬。

近世まで尋常の漁村なりしが、元治元年徳川幕府は佛國公使レオン、ロセスに計り、地をこゝにトして造船廠を設くるに決し、外國奉行柴田日向守を佛國に遣はし、技師を雇聘して、慶應二年三月起工、維新後全經營を加へ、以て今日の盛況を見るに至る。

横須賀の東南海中に猿島あり、東南三浦半島の東端に觀音崎突出し、斜に上總の西岸より長く斗出せる富津洲と相對し、其間僅かに四海里、兩々相逼て東京灣の咽喉をなす、浦賀水道これにして、古人の所謂走水なり。こゝには砲臺ありて、防禦嚴重なり。





江之島

横須賀軍港

造にして堂宇は破壊して露佛となる。

江の島　由比濱の西は七里濱にして、鼓を過ぐれば義經平氏を滅して鎌倉に歸らんとせる兄頼朝の怒に觸れ一奮を草して冤を訴へし地なる腰越に出づ、その西北は片瀬にして、片瀬の前面海上にある周回半里程なる一小島、これ即ち江之島にして、斷崖絶壁四面を圍み、怒濤の吼ゆる聲、日夜絶えず、富士、箱根、天城の諸山を望み眺望絶佳その類少なし。

横須賀軍港　相模國三浦郡の東北、東京灣内更に小灣をなし、勝力岬と箱岬と港口を扼して、北に開き、口徑僅に四町餘なるも、内に入りて漸く廣濶し、逗山周圍を繞るが故に、暴風怒濤の時と雖ども、安全に船舶を碇泊せしむるを得べし、第一海軍區の鎮守府所在地なり。

管轄は北海道の海岸濱面より陸奥の海岸海面を經て本州東岸及南岸を傳へ紀伊南半島、東半島郡界に至る、海岸海面及小笠原島の海岸海面なり。

鎮守府の外、造船所、船渠、海兵團、海軍機關學校、海軍水雷術練習所、海軍病院あり、人口二萬近世まで尋常の漁村なりしが、元治元年徳川幕府は佛國公使レオン、ロセスに計り、地を二にトして造船廠を設くるに決し外國教行柴田日向守を佛國に遣はし、技師を雇聘して、慶應二年三月起工、維新後益經營を加へ以て今日の盛況を見るに至る。

横須賀の東南海中に猿島あり、東南三浦半島の東端に觀音崎突出し、斜に上總の西岸に對し長く斗出せる、富津洲と相對し、其間纔かに四海里、兩々相逼て東京灣の咽喉をなす、浦賀水道これにして、古人の所謂走水なり、こゝには砲臺ありて、防衛嚴重なり。

浦賀

浦賀町　は横須賀港を南に距ること三里、人口一萬三千、港灣宛も袋を括りたる如く、人家はその沿岸に櫛比せり、幕府時代には東京灣唯一の良港なりしも、港口の狹隘と風浪の狂惡とにより、横濱、横須賀に繁盛を奪はるゝに至るも、我開國史上著名の地點なり、嘉永六年米國水師提督ペルリが軍艦商船を率ゐて來航し、始めて浦賀の西南久里濱に上陸したるや、明治卅四年朝野の士、資を醵してペルリ提督紀念碑を設立せり。

小田原

相模灣の海岸は風光明媚、海水浴に適するを以て、國府津より西一里半、等の各邑相連なり、貴紳の別莊尠からず、中にも大磯最も著はる。

小田原町　鐵道は國府津より西北に向ひ、足柄山を越えて駿河に入る、國府津より西一里半、小田原町あり電車鐵道はこの間を通じて、更に箱根湯本に至る、小田原町は地勢頗る鎌倉に似、西は箱根の連山を負ひ、北は足柄諸峯を繞らし、東面一帶相模灣に臨む、早川、町の南を流れ海に朝す、眞に天然の要害地たり。

北條早雲（氏綱―氏康―氏政―氏直）

明應四年伊勢長氏、大森藤賴を破つてこゝを取り、伊豆相模全國を領し、姓を北條と改して長く居城となす、爾來五代九十六年間、東國の雄藩たりしも、天正十八年豐臣秀吉に滅さるゝや、この年家康の封を八州に受くるに及び、その臣大久保忠世を封ず、爾來王孫世傳して維新に至る。

寛永十九年稻葉正勝に與へ、貞享三年大久保忠朝を封ず、爾來王孫世傳して維新に至る。

城址は町の北にあり、西牙營の一區は宮内省御用邸となり、天守臺には大久保氏を祀れる大久保神社あり、二宮尊德翁を祀れる報德神社あり、翁はこの地附近の出なりとぞ、小田原の衰頽せる理由亦鎌倉に同じ、鎌倉より盛なるは箱根山中の需用品をこゝより給するとと一方には都府範圍の稍廣きによる、人口一萬七千。

箱根山中の都邑

箱根山中の都邑　箱根山中都會多し、古昔箱根の嶮ひし所以のものは、東西の旅客此の隘路に集まり、宿驛旅客の繁昌、駕夫、馬丁の群りしに基づくなり、加ふるに關所あり、道路の險なるあり、行人の停滯するところ、やがてその地の繁華を加へしなるべし、箱根を見るに昔人と異なり、全山、火山の噴出岩なれば、水蝕に侵され易く、谿谷あり、奇岩あり、太平洋に近ければ雨量多く、樹木繁茂し、降れる雨水は粗鬆なる岩石を通じて、玉の如き谿流を出す、この山、この水、氣候の清涼を來し、加ふるに温泉の湧出するあり、夏時の避暑、秋季の紅葉、年々行客の數を增す、特に地、東京に近く、都人士一日の閑を盜んで俗塵を拭ひ清むる便あれば、今は純然たる遊覽上の勝地となりしなり。

地學上の箱根山

箱根山は富士帶火山脈に屬し、壯大なる舊噴火口壁たりしも、外輪山の内部に、第二次の噴火口たりし中央火口丘なる神山、駒ヶ岳、上双子、下双子の四山峙つあり、外輪山は直徑、南北三里、東西二里半、我邦火山中屈指の阿蘇山に次ぎて大なるものして、以前は富士山に劣らざる高山なりしも、その中央火口の邊に龜裂を生じ、陷沒してかゝる大火口を生ぜしなるべし、外輪山と中央火口丘との間は即ち火口原にして、仙石原、宮城野、池尻及び蘆湖あり、蘆湖は長二里、横十町乃至二十丁、風光明媚、湖邊中ほどには離宮あり、この湖は火口原湖と稱するものにて、火口原の一部に水の溜溜せしものなり、大涌谷、小涌谷の噴汽孔、盛に硫黄瓦斯を噴出せるは、今も猶火山活動の餘勢を存するを見る。蘆の山道何ならずと歌はる、箱根山道は、小田原より火山の外側を上り、須雲川に沿ふて蘆湖畔の箱根宿の東端にある番關所を經、再び外輪山を越えて伊豆の三島に出で

箱根火山の圖

研究上の注意

二九〇

昇降八里、險道第一の險所なり、德川氏の世小田原藩營繕して旅道に備へしもの、江戸城防禦要塞第一線たりしなり、今は鐵路足柄を經てこの山路は行旅の入馬稀に驛家全く荒廢す。

箱根地方溫泉の饒多なる、古來箱根七湯の名、人口に膾炙す、湯本（塔澤）塔の澤（塔澤）宮之下（塔澤）宮ケ島（堂純泉）底倉（塔澤）木賀（塔澤）蘆之湯（硫黄泉）を始めとし、仙石、小涌谷、姥子、湯の花澤、強羅等の溫泉あり。

溫泉の性質と溫度の關係。酸性及び硫黄泉は火山中餘熱最も強き所に湧き、その溫度も高く鹽類泉は溫度低く

研究上の注意

一、鎌倉、小田原の衰へ、橫濱、橫須賀の盛となる理由を獲得すべし。

二、港に要する性質と、大都會に要する資格を、橫濱、浦賀の例により、鎌倉、小田原の例によりて理解すべし。

三、交通線路の發達は距離を短縮し、遊覽的の都會は漸次に中央都府を離るゝに至り、舊來の勝地は人爲を施して客を招くに至る、箱根の如きその傾向あることを知れ。

千葉縣

沿革　安房、上總の時豪族、安西、神保、鹿庭、東條の四氏分領す、後足利管領の領となりしが後關東八將の一たる里見氏起り、房總二州を併せて、勢盛なりしも、遂に相模の北條氏に敗らる。德川氏に至り勝山、館山二藩あり。

上總、王朝の盛時には、特に親王の任國となり、介、常に州治をなし、高望王の孫世々土着して豪族たり、その晉平廣常、源頼朝に從ひ、尚此地を領せしに、後、足利、千葉の良相繼で州事を掌れり、室町時代に至り、關東管領の直隷たりしが、里見氏起るに及びて、本州を取る、鴻臺の戰、里見氏敗れて北條氏に歸す、德川氏に及び、久留里、佐貫、鶴牧、大多喜、飯野、一の宮、請西の七藩あり。

下總、天慶中平將門反を謀り、猿島郡に僞宮を造りて八州を亂し、誅に服す、後其族の平氏千葉

位置　地勢　沿岸

城に居りて國務を治め、千葉氏と稱して結城氏と全州を分領す、足利の時關東管領の衰へしに當り結城氏等足利氏を擁して古河に據る、後里見、北條二氏前後攻略して屢沿革ありしが、德川氏に及びて佐倉、古河、關宿、結城、生實（オユミ）、小見川、高岡、多古の八藩に分封す。

位置 千葉縣は即ち房總半島の地にして武藏、相模と東京灣を抱き、北は利根川の本流を以て茨城縣に界し、西はその支流江戸川を以て埼玉縣及び東京府に接し、東及南は渺茫たる太平洋に面す、されば千葉縣は宛然一の島地と云ふことを得べし。區域は安房（安房郡）上總（君津、夷隅、市原、長生、山武）及び下總の利根川以南の六郡（千葉、東葛飾（カツシカ）、印旛、香取、匝瑳（ソーサ）、海上）…なる。[illegible]

地勢 北部は關東平野の一部にして土地平坦に其の最も高き所と雖も海拔百米の外に出でず、下總は實に本邦中山嶽最も尠き地なり、然れども漸次南するに從ひ、土地次第に高く、上總安房の國境に至れば房總山脉東西に走り、その支脉これと直交して南北に走り、丘陵重疊して平地尠なし。鋸山は房總の國境に聳え海拔三百三十米、形鋸齒狀をなして峻嶮なり、清澄山は安房の東海岸に立ち海拔三百六十八米にして樹木繁茂す。[illegible]

沿岸 太平洋海岸の出入に乏しき二ケの弓形をなし、東端犬吠崎の岩礁遠く海中に突出し、その岩壁の頂上には旋轉白色の一等燈臺を設け、高百七十尺、十九海里四方を照す、實に航海者の

九十九里の義其の長き數とも云ひ其の大實の制六十町一里なれば九十九里なりとも云ふ

重要目標なり、犬吠崎より南、大東崎に至る弓形の沙濱は即ち九十九里濱にして、海底は遠淺に海岸は砂丘發達して堤防の如く、延長十四里に及ぶ、關東平野の地は土地の漸昇と河流の土砂堆積とよりなるものにして、犬吠崎には古代の堅岩露出し、利根の巨流は多大の土砂を運搬し來れりしもの、その背面に沈澱し、その左右の海岸弓形の凹內面を示す、而して砂丘の成る風波爲に土砂を堆積せるものなり、大東崎より海岸は西南に彎入し、亦も弓形をなして安房の南端野島崎に及ぶ、海岸は峭壁多く、間々砂濱を交へ、沿岸亦岩礁に富み、大に九十九里濱とその趣を異にす、この邊房州沖と云ひ波濤の荒きを以て聞ゆ。

翻て東京灣邊を顧みれば、北部は海岸平滑低坦にして出入尠なく、富津洲は木更津の南に突出して、觀音崎と相對し、砲臺相望み、東京灣の重鎭をなす、富津洲以南は海濱の出入複雜にして、砂原斷崖相交はる。[illegible]

河流　利根川

河流 **利根川** は關東第一の大河にして、長七十二里、その地坂東にありて我國河流中長兄の地位を占むる義を以て坂東太郎と稱す、源を上野、越後、岩代三國の境にある平嶽の邊に發し南流して吾妻、神流（カンナ）川を合せ、上野、武藏の境を經、鑛毒にて名高き渡良瀨川を會し、下總常陸の間を東南に流れ、鬼怒（キヌ）川を入れ、銚子に至り、海に朝す、分流江戸川は關宿より本流と分れて南流し、下總、武藏の國境となり東京灣に注ぐ。この川の流域は古來一定せず、今の隅田川が利根

利根川の舟運

の本流たりしことあり、後には江戸川の本流たりしことあり、今日の如く銚子に注ぐに至りしは享保以後のことなりと云ふ、兩毛群山の水を集め、蜿蜒として廣き平野を流るゝを以て、水量大に水勢寬なり、支流頗る多く、田二十八萬九千丁歩、畑二十四萬八千丁歩を灌漑す、これを日本全國の耕地に割合するに百分の一〇、六八に達す、實に十分の一以上なり、驚くべきに非ずや。」

河流の最も良好なるもの

吐口は二十五丁の幅に及び、舟運の便甚だ多く、汽船の往來絶えず、本流は銚子口より關宿に至り、江戸川筋は市川より溯りて深井に至り、更に二里の運河により隅田川に通ず。

凡そ河流の貴きは、その水量の大なるにあり、その水勢の寬なるにあり、流域の大なるにあり、水量大ならんには支流多きを要し、或は流程長きを要す、水勢寬ならんには、河床の平坦、河道の平野を要す、流域の大ならんには屈曲蜿蜒を貴ぶ、水量大、水勢寬以て船舶の運輸交通に便すべく、流域の大、以て廣大なる地面に灌漑するを得べけん、水勢寬なれば洪水襲來の憂なし、利根川は之等諸要素を兼備するを以て農產は饒多に、市邑は發達し、多くの都府はこの川筋に結べる果實の如く、交通運輸、これが爲に進捗し、川としての任務を盡して餘すなし、況んや關東平野は土地の隆起と、利根川等河流の沈澱物の堆積によりてなるをや、利根川は關東平野の母なり、またその父なり。

本縣の河流は利根川の外皆細流にして、特に揭ぐるに足らず、縣の北境に近く印旛沼あり、周回十六里、その西北に手賀沼あり、印旛沼の下總に及ぼせる影響の大なるは、その附近に四萬四千の人口を養ひ、沿岸每一里の人口三千七百に及び、その附近に四萬四千の人口を養ひ、沿岸每一里の人口三千七百に及び、湖の北方、河となりて、利根川に注ぐ所に安食町あり、以て湖の人生に及ぼす影響の大なるを知るべきなり、これ等の湖沼は古昔河道の一部に存せしものなりしならんも、霖雨あれば利根川の水印旛沼に逆流して、水害を釀すこと尠からざれば、近年その水を東京灣に通せじめんとの計劃ありと云ふ、土功にして成就せば、水害を除き得るは勿論、莫大なる良田を得べきなり。

產物　農產工產　米の產額關東第一に位し、平年作百四十七萬石に及び全國第五位に當り、大豆亦關東第一なり、產額二十八萬九千石に上る。平野多く灌漑便なるによる、これを以て味淋醬油、清酒の產額亦頗多く品質佳良なり、醬油產額全國第一位にして野田及び銚子之が最たり。利根川の水質醬油釀造に適し、（野田の南方海岸行德は良鹽を產するによる）產額二十二萬七千石四百餘萬圓に上る、野田醬油色濃く永く貯へて徹を生ぜざるを以て、缶詰又は鑵詰として東京を中心とし、四方に輸出す、世に著名なる龜甲萬の醬油もこの地の產なり、近年米國にも輸出すと云ふ。

酒	一〇四、〇〇〇石	
醬油ノ產額（三十五年度）		
全國	一、七六七、四二三石	
一、千葉	二四五、八九〇石	
二、兵庫	一一九、〇〇〇石	
三、香川	一〇〇、〇〇〇石	

水産

江戸川畔の流山には味淋を産す、品質良好にして夙に宮内省の御用を蒙り、美味を以て鳴る、總産額八千余石、四十萬余圓に及ぶ、その販路、全國に普く、近來外國に輸出するもの多しと云ふ。

水産　千葉縣の水産の富、北海道を除き内國第一に居る、有名なる九十九里濱は漁業最も盛にして、寒暖二流の衝突點に位し、兩水に棲む魚族群る、鯡を第一とし、七百七萬貫の産あり、大部分は搾粕乾鰯とし食膳に上るもの四十分の一に過ぎず、他日氷凍凍法を利用せば莫大の利益あるべし、水産總額三百五十六萬圓中、鰯の産額百十七萬圓に及ぶ、鰯様鯛殿の諺ある偶然にあらず。その他鰹、鮪、石花菜多く産す。

鐵道

總武線　東京本所を發し、市川にて江戸川を渡り、海岸に沿ふて、中山、船橋等を經て千葉に至り、更に北行して佐倉、成東、八日市場を經て、銚子港に達す。

房總線　千葉より上總の東海岸大原に達す、途中大網驛より一支線を出し、東金に通ず。

成田線　成田驛を中心として、三方に走れるものなり、一は南して佐倉に至り、總武線に會し、一は北行して佐原に至り、一は西行して我孫子驛に通じ、以て常磐線に合す。

常磐線　は東京上野に發し、松戸の西にて江戸川を越え、本縣に入り手賀沼の西を繞り、我孫子を經て、利根川を渡り茨城縣に入る。

都會

千葉　下總の中部、東京灣の東北隅に位す、千葉縣廳所在地なり、人口二萬六千、も

都會千葉

木更津

佐倉

銚子

佐原

と平忠常の裔千葉氏の居城たりき、縣廳及び諸種の地方官衙あり、千葉醫學專門學校あり、房總線と總武線の接續點にして、加ふるに横濱への便船もあれば、商舘、旅舘相接し、頗る繁盛の一都會なり。

木更津　上總西海岸中、最も繁盛なる都會なり、人口八千、毎日二回、東京との間に汽船の往復ありて、百貨集散の繁げき國内之に過ぐる地なし。

佐倉　印幡沼の南にあり、湖水の築きたる沖積層平地を占む、人口九千、歩兵第二聯隊の衛戍地にして、湖水の産物と平野の産物との集まるところ、商業頗盛なり、近村佐倉炭、藺蒻、粟、蕨、黄蘗を産す、佐倉炭は品質の良好なるを以て聞え、總武線により東京に出づ、産額四十三萬圓、佐倉東北、公津村に宗吾神社あり、義民等木内宗吾の靈を祀る。

銚子　下總の東端、利根川の河口に位し、總武線の終局地なり、岩礁多く、大船の出入に便ならざるも、東海岸の一要港たるを失はず、人口二萬六千、富商大賈多く、醤油、銚子縮及海産物（鰹節、鹽藁漬）の特産物あり、銚子縮は木綿縮緬にして、夏期の單衣に用ひらる、産額百七萬圓に上る。

佐原　下總の東方利根川の南岸に位す、成田鐵道の終局地にして、利根川の要津なり、清酒及び醤油の醸造甚だ盛にして、百貨の流通繁し、清酒の醸造は七千石に上る、我國唯一の地理學者伊能

忠敬先生この地の出なり。

香取神社　佐原の東、一里の地香取村にあり、**建國の功神、經津主神**を祀る、**神武天皇十九年の創建**と稱し、官幣大社に列せられ、遠近の參拜者常に跡を絶たず。

研究上の注意

準備　銚子縮、犬吠岬の寫眞、龜甲萬醬油、流山味淋等。

二、川の資格、性質及び効用を利根川の例により充分獲得すべし。

川の所在は平坦なり、地味肥沃なり、交通の便あり、航運に便利なり、灌漑に便利なり、水力利用に便あり、諸般の生業を助く、その他雜多の便宜あり。

三、**九十九里濱の漁業の利多き所以**を理解せよ。

埼玉縣

沿革　武藏の一部なれば、既に東京府の條に述べたり、今之を再せず、前者を參看すべし、秩父神宮石器時代の遺物を藏むる多く、その他、本縣各處に百穴、右の他石器時代の遺跡多ければ、古、早く住民の多かりしを知るべし、川越の戰役は關東の北條氏に歸せし重要の戰にして、和銅年間に銅を產せしは秩父郡原谷村大字黑谷とす。

位置　東京府の北に連り、北には利根川ありて、群馬縣との境をなす、東東は千葉縣と江戸川を携ふ。その北部僅少の部分利根川によりて茨城縣に界し、武藏の北部九郡（北足立、入間、比企、秩父、兒玉、大里、北埼玉、北葛飾）を管す。

地勢　西は所謂關東山脈の一、秩父山塊によりて、長野縣、山梨縣に連なる、境界は高山連嶺重疊し、甲武信嶽、二千四百五十三米、十文字嶺、三國山等あり、されば秩父地方は概して山地なれども、その他は關東平野の一部にして、土地平かに地味肥えたり。

河流　荒川は秩父山塊の西方甲信の境を發し、摺鉢狀の谷をなせる、秩父盆地を流れ、東南流して平野に出で、入間川を併せ、東京市に入りて隅田川となり、東京灣に注ぐ、長五寸五里、その上流は水清らかに、下流は舟楫の便あり。

產物　養蠶業は北西部に盛に、桑園二萬町歩、收繭高十九萬石、價格五百萬圓に達す、從つて製糸機械の業盛に秩父川越地方は、その中心をなす。秩父絹は無地の平絹にして、裏布に用ふ、近時秩父銘仙の名高し、染料を草根木皮にとり、地機を用ひて之を製するを以て品質極めて堅緻なり。

川越斜子は絹織物にして羽織用として賞用せらる、

參全國產額千九百萬石

農產物は關東平野の一部なるを以て少しとなさず、特に麥は全國第一に位し、百十二萬石、米の產額九十萬石に達す、川越甘藷は、八代將軍吉宗の時、青木文藏の移植せしもの、產額四千二百萬貫に及び全國第一なり。

鐵道

鐵道　直に東京府の北に連なると以て、東京市より北方に交通する衝路に當り、鐵道大に發達す。

日本鐵道奥州線　東京上野を發して本縣に入り、浦和、大宮、久喜を過ぎ、奥州に向ひ、高崎線は大宮驛より上野の高崎に至り信越線に合す。

東武鐵道　東京吾妻橋を發し、北千住驛にて常磐線と交叉し、久喜驛より奥州線に交叉して、川俣に達す。

上武鐵道　高崎線の熊谷（クマガヤ）より西して、寄居（ヨリヰ）に通ず。

川越鐵道　甲武線の國分寺驛より川越に通ず。

青梅鐵道　青梅鐵道甲武線の立川驛より分岐し、多摩川畔に沿ひて溯り、青梅線の產地たる青梅町を經て日向和田に達す。

都邑

都邑　埼玉縣は東京市の田舍なり、東京市の都府範圍內なり、大木の下に木の生せざると同じく大都會の發生すべくもあらず、人材も豪商も產物も、皆東京に集まり、東京より分配を受く、從つて商業繁盛なる都會を生ぜん樣なし。

埼玉縣に大都會生ぜざる理由

浦和　埼玉縣廳所在地なり、人口六千七百、縣廳ある爲に起れる町なり、もし浦和町より縣廳を去らば、村落と選む所なし、行政の中心地が都會を作る好適例なり。

大宮　日本鐵道の高崎線と奥州線との分岐點にして、會社の車輛機械工場あり、爲に繁華を來す、人口六千六百、町に氷川神社及び氷川公園あり、官幣大社にして、境內風景に富み、都人士の來り遊ぶもの多し、境保己一は大宮町の北方兒玉郡保木村に生る。

川越　は本縣第一の都會なり、人口一萬九千、武藏平野の要地にして、產物も多く、東京市を去ること十里に及び、織物業盛にして、商業賑ふ、昔、山內房顯の據れる處にして、後、太田持資城きて居る、關東の歷史上重要なる城地なり。

熊谷　高崎線に沿ひたる繁華なる市街にして、四通八達の要衝に當り、雨毛、信濃に近きを以て、蠶、繭、織物、米穀の貿易盛なり、人口一萬二千、その西方にある土堤は櫻樹栽立を以て花時の觀客多し。

研究上の注意

研究上の注意

一、準備　秩父絹、川越斜子。

二、浦和の大都會をなさざるは、全く東京市の都府範圍內にありて、需用供給皆東京を中心とす

るによる所以を知りて、都府範圍の觀念を明瞭にすべし。

三、無谷、川越に至れば、特殊の產物もあり、且つ東京市に遠きより、各單獨の都府範圍を有し地方日用品の分配をなすより、商業の活潑となれる理を悟るべし。

群馬縣

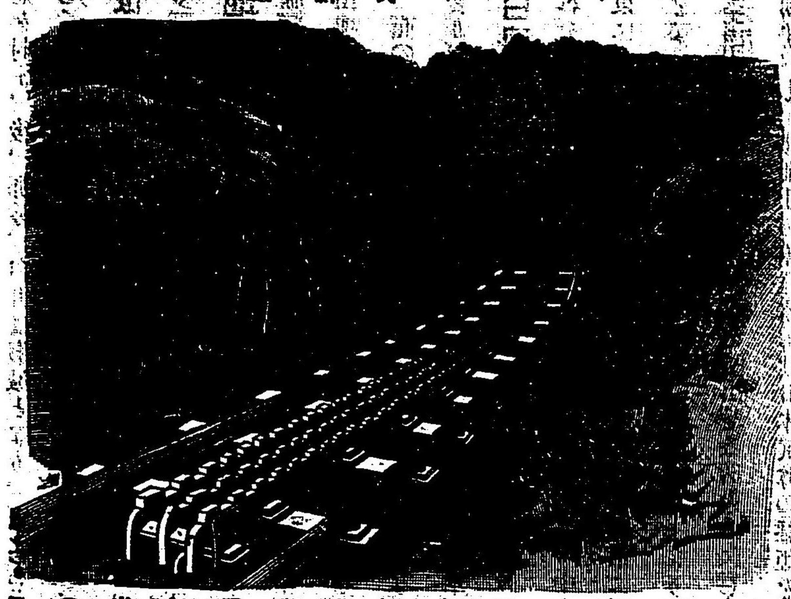
沿革　上古は上野、下野二國を總て毛野（カミツケノ）と云ふ、仁德天皇の朝之を上下二國に分割す。天長三年九月、上野を以て親王の任國となし、特に大守と稱す。鎌倉幕府の時、安達盛長子孫繼相繼ぎて守護に補す、元弘の末、新田義貞勤王、建武中興義貞守護となる、足利尊氏反し、其將上杉憲房を守護となし、白井城に鎭し、子孫世襲、鎌倉管領の執事となる。後ち鎌倉山內に移り、家臣長尾氏を守護代とす。管領足利成氏の執事上杉憲忠を殺すや憲政の弟房顯本國を以て之に畀き、將軍義政に請ひ、關東管領と稱し、子顯定に至て平井城（緑野郡）に移る、天文二十年、北條氏康平井城を陷れ、憲政越後に走る。明年上杉謙信平井城を拔き、次で廐橋に沼田を取る。永祿六年武田信玄、箕輪、安中を略し、天正六年越虎死後、廐橋、沼田亦武田氏に歸す。十年信長、武田氏を滅し、瀧川一益を管領となし、廐橋に居らしむ。信長弑せられて一益西上し、北條氏政全國を取る、十八年北條氏亡び、德川氏關東を領し、廐橋、館林、高崎、沼田、白井、那波、小幡に諸將を封ず、後、那波、白井は廢城となり、更に吉井、安中、伊勢崎、七日市に封を受くる者あり。凡て九藩、王政維新皆改めて縣とし、數度廢合以て今日に至る。

位置　群馬縣は埼玉縣の西北にあり上野全國、三市十一郡、（前橋市、高崎市及び勢多、群馬、多野、北甘樂（カンラ）、碓氷（ウスヒ）、吾妻、利根、山田、新田、邑樂（オーラ）、佐波）よりなる。東は足尾山塊、北より東北に亘りて、栃木縣との境上に蟠まり、北は越後山脈の三國山脈新潟縣との境界をなし、西は白根、淺間、荒船等の火山、長野縣との境上に相並びて、其南は秩父山塊の北端を以て埼玉縣及び長野縣との國境をなす。斯の如く群馬縣は三面山を負ひ、唯東南の一面のみ開けて平地をなし、關東平野の一部をなすや必せり、利根川は實にこの國に發源し、烏川、碓氷川（カンナ）、神流川等の支流を入る。

地勢　東は足尾山塊、北より東北に亘りて、栃木縣との境上に蟠まり、北は越後山脈の三國山脈新潟縣との境界をなし、西は白根、淺間、荒船等の火山、長野縣との境上に相並びて、其南は秩父山塊の北端を以て埼玉縣及び長野縣との國境をなす。斯の如く群馬縣は三面山を負ひ、唯東南の一面のみ開けて平地をなし、關東平野の一部をなすや必せり、利根川は實にこの國に發源し、烏川、碓氷川、神流川等の支流を入る。

白根山　は上州草津より信州澁に至る境上にあり、高さ二千百四十二米（約七千尺）にして、これを草津白根と呼ぶ、頂上三個の噴火孔あり、中央にあるを湯釜と稱し、西にあるを涸釜と稱し東にあるを氷釜と云ふ、此等の噴火孔よりは常に瓦斯を噴出し、熱泥を高く沸騰す、時に大爆裂をなすことあり、麓に溫泉多く、草津も其一なり、硫黃泉にして、熱湯を噴出す。

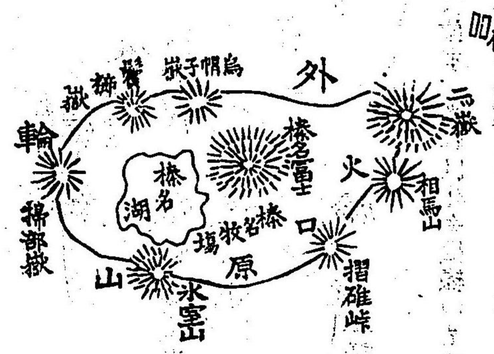
淺間山　は今猶盛に硫黃を噴出せる活火山にして、頂上に大噴火孔あり、猶長野縣の條下に說明すべし、淺間山の南碓氷峠は日本武尊の橋姫を追懷し給ひし地にして、今は二十六の隧道を穿



妙義山

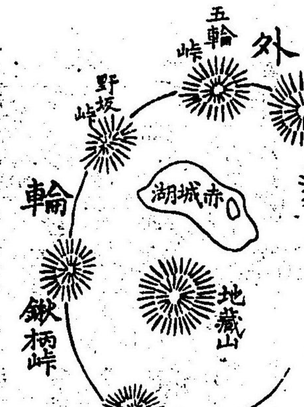
を布き、歯車ある機關車を用ひて、進行に際し互に咬み込みて逆退せざる樣にす、『アプト』式と稱するもの之れなり、世界に於ける鐵道學上の模表とするところとす。

妙義山　は碓氷峠の南にあり、奇岩絶壁亂立するを以て著名なり、白雲、金洞、金鷄の三峰に分る、火山の噴出溶岩流の凝結せるものなる集塊溶岩よりなるを以て、風雨の作用に抵抗し難く、削剝作用は恣に働きて、その脆弱なる部分を削り、或は崩壞せしめたる爲め、堅固なる部分殘りて、四個の石門をなすあり、或は蠟燭岩をなすあり、或は佛像の形をなし、或は大砲の形をなす、今も猶削剝盛にして、勤岩とて容易に動き出すものあり、その絶景言語に盡し難く、誠に自然の妙工なり、秋の紅葉も亦歎賞するに足る。



榛名山　伊香保温泉と共にその名著しき榛名山は、これ舊噴火口の側壁たる外輪山と、新噴火口たりし中央火口丘なり、その成因箱根の蘆湖に同じ榛名湖の近傍低地なる榛名牧場は即ち此の火口原の一部にして、榛名富士は中央火口丘なり、高さ千四百五十七米にして、形富士に似、頂上に火口ありて古昔噴出の跡を示す、伊香保温泉は榛名山の東麓にあり、炭酸泉にして、透明無臭少しく鹹味あり、風景の絶佳なるを以て貴紳の入浴常に絶えず。（上圖を見よ）

赤城山　榛名妙義と共に上野三山の名ある赤城山は、殆んど國の中央に位し、南方は關東平野に臨みて、遠く裾野を曳き、頂上に巨大なる舊噴火口を有し、遠く之れを望めば美麗なる摺鉢形を呈し、眞に名山たるに恥ぢず、高さ一千八百九十三米に達す。中央火口丘は地藏山にして、外輪山は楕圓形をなし、東西一里に足



ら、南北一里に餘る、外輪山と中央火口丘との間は火口原にして、赤城湖の水湛ゆ、之れ又火口原湖なり、冬季結氷數尺に達する故、赤城氷として盛に、前橋東京に輸出す。（上圖を見よ）

産物　群馬縣は如斯火山に富める地たるを以て、土地は火山灰の堆積よりなり、桑樹の栽培に妙なり、且海岸を去る遠きを以て濕氣多からず、降雨少なきを以て、養蠶の業盛に、繭の産額長野縣に次ぎ、全國第二位に位す、されば生糸機織の業盛に、富岡の製糸場、桐生、伊勢崎の機織は天下に聞ゆ。

本縣の養蠶は主に農家の副業にして、各戸毎に之れを飼育すれども、高山社の如く組合を以て大飼育をなすあり、山田郡桐生、新町及勢多郡大間々の如きは最も名高き蠶業地にして、繭實精良、長野福島兩縣と相並びて、我國の首位に居り、桑畑は二萬五千丁歩、繭の産額三十六萬石に上り、長野縣の四十二萬石に次ぎて全國第二の收穫なり、その總價格は實に八百萬圓に及ぶ、製糸業の盛なる亦長野縣と共に全國第一にして、大製糸場屈指に遑あらず。

鐵道　**日本鐵道高崎線**　東京より來り、埼玉縣の大宮にて奥州線と分れ、こゝに他の三線と連絡す、兩毛線は之より東北前橋市に至りて東に折れ、機織業の中心地たる伊勢崎、桐生を經て栃木縣に入る。信越線は高崎より西中山道に沿ふて信濃に入り、越後に通ず。

又上野鐵道線は高崎より西南、名胡碑にて名高き吉井、製糸場にて名ある富岡を經て、下仁田に通ずる輕便鐵道あり、軌條、列車共普通のものより頗る小形なればこの名あり。

都邑　**桐生**　關東に於て最も著名なる機業地にして、京都西陣と名を爭ふもの、人口二萬三千を有し、羽二重、甲斐絹、縮緬、琥珀、紋織等の絹織物を主とし、綿八反、綿琥珀、綿縮子等の絹綿交織をも出す、産地は桐生町を中心とし、山田、新田、二郡に亘りて自家製造も多けれど日本織物會社、成愛合資會社、縮緬合資會社等の工場多し、市場は三、八の日、桐生に開き、賣買額實に九百五拾萬圓に達す。

伊勢崎　伊勢崎は桐生に次ぎて機織業地なり、伊勢崎縞は其特産にして、經に絹糸又は玉糸を用ひ、緯に玉糸或は紡績絹糸を用ひて、縞及絣を作る、毎戸婦女子の餘業に屬し、産額二百三十萬圓、毎月一、六の日、市を開く、取引先さは主として京阪地方なり。

前橋市　は群馬縣廳の所在地にして、利根川其西を廻り、廣瀬川中央を流る、土地平坦、四通八達の要衝に當り、交通頗る便なり、人口四萬、生糸市場の中心をなす。

高崎市　日本鐵道高崎線と官設信越線との連絡點にして、商業繁盛、殊に生糸の産出を以て名

蓄ばる、人口三萬三千、歩兵第十五聯隊の衛戍地たり。

研究上の注意

一、準備　妙義山石門の寫眞、赤城山榛名山景、桐生織、伊勢崎縞の標本。

二、此縣にては先づ養蠶機織業の盛なる理由を充分に理解するを要す。

三、地質、氣候、人口の稠密なる事、歴史上の由來、時に地質の火山灰なる、其氣候の雨量少なき等自然的諸原因が蠶業隆盛の最大源因なることを充分に理解せんことを要す。

四、機業養蠶にて利益多く、交通便ありて、往來頻繁に、關東平野の一部をなすを以て、人情自ら輕薄華奢の風あるを歸納すべきなり。

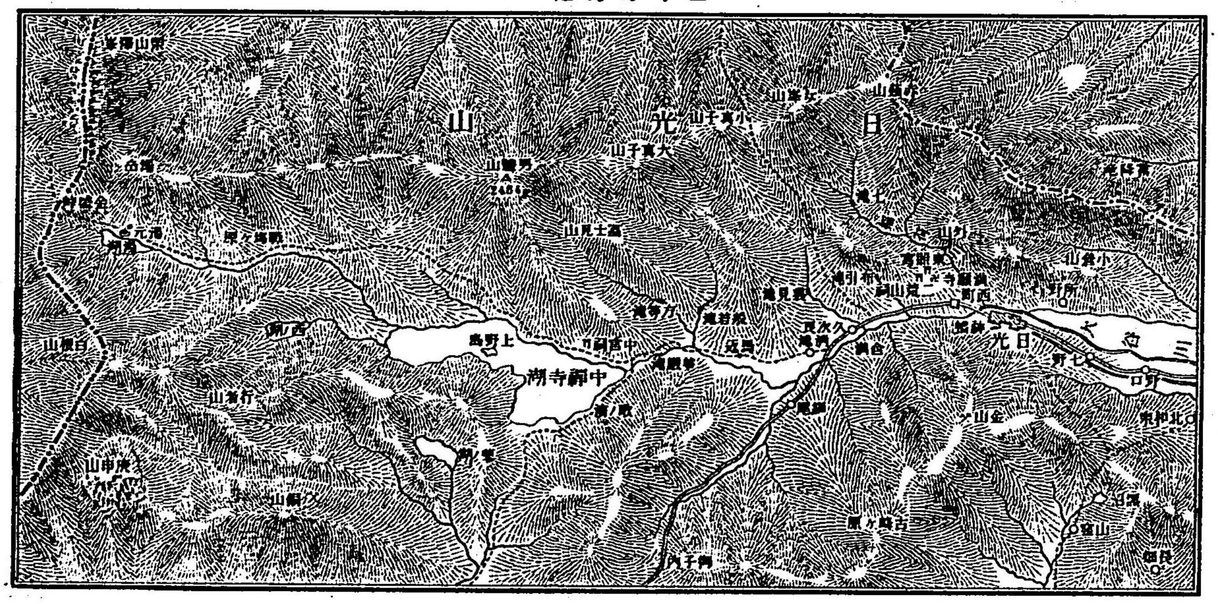
五、新田郡は新田義貞の出でたりし地、その太田町の北方金山に新田神社あり、義貞を祀る。幕末の奇士、高山彦九郎も此新田郡澤野村の人、大字細谷に高山神社あり、彦九郎を祀る。之等の忠臣の感化大なる可きを思はゞ、人格偉大の人は肉體死するも生命死せざるを覺るに足らん。

栃木縣

沿革　毛野の地、國府を南都賀郡國府村に置く、天慶中、藤原秀郷、平將門を誅せし功に

日光附近圖

二十万分之一



より子孫二本國の守介となり、小山城に居り小山氏を稱す、源頼朝の起るや、宇都宮氏、那須氏
從つて功あり、漸く著はる、源義家の孫義康足利郡を食み、九世尊氏に至り征夷大將軍となり、
州族多く之に從ふ、關東管領の威令衰へ、宇都宮氏那須氏頗强く、北條氏來使するに及び南境、
その便となる。（中略）豊臣氏東征、那須氏の地を收めて蘆原（那須郡）に移し、那須の臣、大關高増を黒羽。太田原晴
清を太田原に封ず、宇都宮國綱、舊領を全うす。徳川氏に及び、宇都宮（戸田氏）、烏山（大久保氏）、
壬生（鳥井氏）、足利（戸田氏）、佐野（堀田氏）、吹山（有馬氏）及び黒羽、太田原に各藩を封ず、
明治維新後廢合して現今の如し。

位置　栃木縣は下野全國を管轄し、西一市八郡（宇都宮市、足利、安蘇、上都賀、下都賀、河内、
芳賀、塩谷、那須）にして西は群馬縣に連り北は福島縣に接し東は茨城縣に亘り南は千葉縣なり。
下野と土野とは毛野と呼びたりしもの其京に近き方をカミツケと呼び、遠きをシモツケと呼びたり、國に前後上下等ある
は皆京都を標準とせしなり、足利郡は足利尊氏の出でたりし地、新田義貞の出でし群馬縣新田郡と渡良瀬川を挟んで相對す、
一小川を隔て、忠邪二人を出す又奇ならずや、那須郡は屋島に源の義を射落せし那須與市宗高の出でし所なり。

地勢　群馬縣との境上の山脈は、足尾山塊なり、北は日光火山彙、那須火山を以て福島縣に連
なる、東は八溝山脈蜿蜒として走り、茨城縣と界し、南の一面開けて關東平野に連なる。

交通　東京、栃木及び茨城縣に接するなり。

日光火山彙

日光火山彙は下野の北西部に蟠れる九座の火山の總稱にして、男體山は最も高く、二千四百八十三米なり、今は何れも熄火せるも頂上には大なる噴火口あり、中禪寺湖は男體山の南麓に位する長方形をなせる湖にして周圍六里に上る、今の大谷川の深谷に男體山より噴出したる熔岩の爲めに其一部を堰き留められ、さてこゝに水溜せるが即ちこの湖なり、蘆湖、榛名の如き火口原湖と誤る勿れ、中禪寺湖より大谷川の谷に水の奔下せるもの、即ち有名なる華嚴瀑にして、高さ五丈直下七十五尺、其間一岩の水を遮るなく誠に壯大の觀あるなり、中禪寺の湖邊は氣冷かに水清く、周圍の綠樹其の影を倒に湖底に映じ、百樣の瀑布は遠く遠雷の響を傳へ、風景絶佳、夏時避暑の閑客頗る多し、湖邊綠深く氣靜かなる勝地には内外人の別莊あり、湖中の清水は魚を養ひて、潑溂たる鮮魚食膳に上る。

中禪寺湖の成因

那須火山

那須火山は栃木縣の東北境にありて高さ一千九百四十米、其裾長く南東に延び、渺茫たる那須野が原となり、以て關東平野に連なる、那須火山は今尚盛に硫烟を噴出す。

河流

河流　本縣はかく、西北東の三方山岳を以て圍まれ、中央に那須野及び宇都宮の平野を挾み、關東平野に連なるを以て、河流の南流する自ら知る所なり、大谷川は中禪寺湖より發して東流して鬼怒川に合す、其鬼怒川は足尾山塊の鬼怒沼山より發し、宇都宮平原を流れて利根川に合す、渡良瀨川は足尾山中參湖より發して利根川に入る。

那須山地方の水は東南流して、八溝山脈を横切りて茨城縣に入る那珂川之れなり。

鐵道

鐵道　群馬縣より來れる兩毛線は小山に至りて奥州線に合す、奥州線は埼玉縣大宮より千葉縣の一隅を掠めて來り、小山、宇都宮を經て那須野を過ぎて福島縣に入る、小山驛よりは水戸線走りて水戸に通ず、宇都宮よりは日光線によりて日光に通じ、兩毛線の佐野驛には北の方葛生より南の方赴名を連接する佐野鐵道あり、葛生地方に生ずる石灰岩を渡良瀨川に運ばん爲めに布設せられたるものなり、これ又出野鐵道と同じく輕便鐵道なり。

都邑

都邑　**足利**は渡良瀨川の北岸にあり、人口三萬、著名の機業地にして、桐生に次ぐ、織物の種類夥しくして、高價なる絹織物より絹綿交織物、綿織物皆產せざるなし、絹縮緬糸織中形瓦斯縮緬の如きは最得意とする所なり、主として各戸工業にして、產額三百萬圓に及ぶ。國學の遺跡と稱せらるゝ足利學校は町の北にあり、稀代の古書を藏す。

栃木

栃木は麻、生糸、木材、切石の市場にして、豪商巨賈多し、人口二萬七千に垂たり。

小山

小山　關ケ原の役家康上杉景勝を征せんとして東下せしに、石田三成の叛を聞きて旗を旋らせし地、鐵道の交叉點にして、四通八達の衝をなす交通線路の交叉點の都會をなす好適例なり、四方の旅客四方の貨物一地に集まる、其都會をなす固より怪むに足らざるなり。

宇都宮市
三五、二二七

宇都宮市　栃木縣廳のある處、人口三萬五千、附近鹿沼町の麻、眞岡町の木綿等はこの市に

に盛に取引せられ、猶繭、生糸の市場盛んなり。寛政三奇士の一人蒲生秀實は、實に此地に生る、其家今猶存す。

日光

日光 は山水の美、人工の麗の集まる所、百錬の瀑布あり、明鏡の湖水あり、樹なす溪流あり、紅なす紅葉あり、氣候の清涼なるあり、土地の高燥なるあり、加ふるに金殿樓閣の丹精を以てす、外人の以て本邦第一の勝區となすもの實に故あるなり、元和二年家康の駿府に薨ずるや、久能山に葬りしも、天海僧正遺命により其翌年を以てこゝに改葬したり、朝廷賜ふに東照權現の號を以てす、今の東照宮の社殿は家光の造營せしものにして、金色燦爛光彩目を奪ふ、特に陽明門は所謂日暮御門と稱す、讃歎日の暮るゝを知らざるを以てなり、唐門は本殿の正面にありて其壯麗言語に絶す、家康の遺骸は本殿後方の山腹、寶塔の下に眠れるなり、東照宮に並びてその左に家光の廟所大猷院あり、其美觀又匹敵すべし、將軍歴々の權威諸侯莫大の寄進財力を惜まざりしによりし建築、彫刻、石表、燈籠、室内の裝飾天下の美を極め、精を集め遠く和蘭、朝鮮よりの寄進ありし、日光を見ねば結構を語る資格なしとは實に結構なる諺なりかし。

日光瀑布は華嚴を第一とし、阿含(アゴン)、般若、方等、龍頭、裏見、霧降の七瀧あり、華嚴の壯觀は天下に匹なく、霧降の三段となりて落つる所、亦捨て難き景なり、裏見は明治三十五年の洪水崩壞して裏見の實を失ひしは惜むべきなり。

足尾銅山

足尾銅山 日光の西南に當り、足尾町より日光火山彙南方に隣接せる、所謂足尾山脈中の雄峯、庚申山の南側に位す、眞に山間僻遠の地なるに拘はらず、人口三萬一千、繁盛益々加ふる所以のものは何ぞや、有名なる足尾銅山あればなり、古河氏の所有にして、本邦銅產額の四分の一を出す、即ち一年◯六十四萬斤に上り、その價格四百萬圓に及ぶ、本山の基底をなすものは、粘板岩、角岩、砂岩等の古生紀の水成岩なるが、地質の變動により之れを貫きて地中より迸出の火山岩たる噴出せしかば、地盤は破碎を生じたり、而して岩體に多くの龜裂を起したり、此れ地下熱泉は硫化銅を溶解し、其裂目に噴出せしめ、さて沈澱したるもの、即ち鑛脈にして、その鑛石は主に黄銅鑛なり、即ち硫黄と銅との化合物にして、此の鑛石を細かに碎き、木炭、石炭と共に熱して硫黄分を取り去り、以て銅を製するなり、此にて作れる粗銅は更に東京本所の精銅所に移して精製したる上、或は內地の需要に充て、或は海外に輸出す、現今我重要產物の一にして、輸出高中第五位を下らず、近時世論の喧びすしかりし、鑛毒問題は足尾精煉所の鑛毒、渡良瀨川に注流し、下流の田圃に浸漸して、害を及ぼす尠なからざるによる、今や政府も之れが調査に從事して、其豫防法を講ずるに熱せり。

麻の產額は四十萬貫百二十萬圓に及び廣島縣と共に全國の首位を占む、鹿沼町は之が中心なり、猶葉煙草の產七十萬貫二百萬圓に上る、那須、芳賀、鹽谷郡地方に多く產す。

研究上の注意

研究上の注意

注意すべき準備、下野全圖、日光寫眞、足尾銅鑛、足利織物、

沿革

沿革

茨城縣

沿革　常陸　往朝の時には、親王の任國にして、他人國守たることを得ず、上古より重鎭と見做されたれば、その國司たるもの、皆大人物なり。藤原宇合、石上宅嗣、菅野眞道など、何れも國司となりて常陸に下りき、これ奥羽に境し、重要の地なればなり。平清盛の盛時、佐竹氏常陸介となりしより、彼族世々此に居り。太田城に住す。

鎌倉の時、別に小田氏を筑波郡に、大掾氏を府中に分置して、各之を治めしむ。建武中興、足利尊氏常陸守となる、足利氏の末に大掾氏、小田氏轉後亡びて、佐竹氏獨り强大、水戸城に居り、全州を併有す。德川家康、子賴房を封して三家の一となす、又土浦、笠間、下館、府中、宍戸、谷田部、麻生、牛久、下妻。諸藩あり。因に云ふ、今日風土記の存するものは、常陸等五國に過ぎず。常陸風土記の存するは、宇合、宅嗣等傑出せる文學者の國司となりしため、その文章も極めて可成中には韻を踏めるあり。されば人を喜んで謄寫せしかば、今日迄殘存せしなり、且、國司の入選にありて、その時代に於ける、その國の重んぜられたるを知るは、地理歷史上興味ある事なり。

位置　關東の地理も茨城縣を以て終りとなす。例により範圍より云はん、常陸一市七郡（水戸市、多賀、鹿島、行方、新治、筑波、稻敷、眞壁）及下總の利根川以北三郡（結城、猿島、北相馬）を管するなり。茨城縣は千葉縣の北に位し、利根川其界を流る、北は福島縣に接し、東は面太平洋に面し、西は栃木縣に接するなり。

地勢　西の一部及び、南は栃木及び千葉の平原に接し、東は海岸の低地なるも、北の方は八溝山脈の延亘するなり、八溝山は下野、常陸、磐城の境上に屹立し、高さ一千三十五米その麓南に走る、栃木縣との界をなし更に加波山、筑波山となる。

筑波山　筑波山は關東平野の東北に屹立する山にして、その頂上に男體、女體の二峯あり、樹木鬱蒼として、奇岩怪石亂立し、高さ僅かに八百七十三米（三千尺）なるも、平野中に聳ゆるが故に人目を引く、頂上よりは太平洋、關東平野を一望中に納め、眺望絕佳なれば、古來人口に膾炙し、詩歌に詠せられたるもの少なからず、其平野中に聳ゆるを以て氣象觀測に便利なれば、山階宮殿下の設立に係る測候所あり。

八溝山

地勢斯の如く、北部と西北部とに山岳連亘し、東南部は平坦なれば、河流の方向自ら知るを得べけん。[illegible]久慈川は遠く岩代に發し、八溝山の東麓を廻りて、南流し太平洋に注ぎ、之れと殆んど並行して那珂川あり、下野の那須岳に發し、下野の東部を流れ、水戸市の北を經て太平洋に入る。兩川共に舟揖の便あり、茨城縣東北部の貨物運輸を掌り、又その岸に沿ふて道路開通し、河口には各同名の港あり。[illegible]

霞ヶ浦

霞ヶ浦[illegible]周圍三十六里、本邦第二の大湖なり、湖邊の人口十二萬八千、沿岸毎一里の人口三千六百人に及び、湖北に石岡町（人口一萬三千）高濱（人口三千）小川（人口四千）湖東に玉造、（人口[illegible]）湖南に江戸崎（人口[illegible]）湖西に土浦（人口一萬五千）[illegible]麻生（人口三千五百）潮來（人口五千）[illegible]（人口三千）等の町あり、之れ等の九ヶ町は直接間接に霞ヶ浦によりて生活するものにして、[illegible]湖上を走り運輸交通の便あり、湖邊の平地米産に名あり。湖中多く淡水産の魚に富む。[illegible]これば[illegible]の集湊[illegible]市街の成立等、湖水と人生との如何に密接なる關係を有するかを群知し得るなり。[illegible]

北浦

霞ヶ浦の東に北浦あり、細長き湖にして、周圍十五里、二湖の水共に利根川に通じ、水運頗る便なり。北浦より東は鹿島郡にして、鹿島町に建國の功神、武甕槌神を祀る、官幣大社鹿島神宮あり、神武天皇元年の創建と傳ふ。利根川を挾んで遙に千葉縣香取神宮と相對す。[illegible]

涸沼

涸沼は北浦の北に位し、湖口は涸沼川となりて那珂川に入る、利根川下流の地は、霞ヶ浦、北浦、涸沼を始めとし、千葉縣の印旛沼、手賀沼、其他に湖沼無數あり、之れ等は土地の隆起と、河流の沈澱堆積とにより、陸地の發達するに從ひて生ぜるものなり、即ち霞ヶ浦附近一面海なりしが、次第に隆起して、高所は山岳、低所は田野、更に低き所は湖沼と化したるなり、[illegible]家が、吹く風は勿來の關と思へども道もせに散る櫻花と詠じたりし勿來關址は今の官道を去る七八町の海邊にあり、これより計算すれば一年間に三分、十年間三寸、百年間に三尺の隆起をなせるを知るべし。[illegible]

元來常陸なる國名の起源も「常陸は上古海水逆流して常なかりしが、後來漸々潮退き人民常に陸地を得て居に安んじける故に常陸國と稱ふ」この意味より起れるなりと云ふ。[illegible]

茨城縣は斯くの如く、海底の隆起よりなれる國なれば、その海岸極めて遠淺にして、且つ利根川、那珂川、久慈川の獨したりし、土砂の堆積と風波の作用より、海岸は一帶に弓形にして、砂丘長く相連り、出入乏しく、極めて開濶なり、南方の鹿島灘の海岸は特に低平なるも、北方の海岸は山岳近く海岸に逼まり、沙濱の間、往々小岩壁のあるあり風景亦美なりとす。

産物

産物　本縣は湖畔の平地多く、米の産額頗る大たり、平均産額、百二十萬石に及ぶ、特産物としては、土浦醬油、結城紬、結城木綿、太田煙草及び北方山地の花崗石及び寒水石の石材あり、結城紬は主として絣に織り、その地質染色の牢實にして耐久の効力に富み、絣形鮮明にして時候

に適合するにより中流階人の衣服として嗜好せらる、結城木綿は白木綿にして、品質堅緻よく久しきに耐ゆるを以て、酒及醬油漉袋、暖簾地に、蒲團地として賞用せらるゝ、されば產額年々增加し、縣下繊物の總產額八十七萬圓に上る、太田煙草は其品質の可なるを以て聞え、本縣は煙草の產地としては屈指の中にあり、久慈郡赤土（アカツチ）特に名あり、縣下の產額二千萬圓に達せり。

鐵道　は本縣を縱橫に走る、栃木縣小山驛より兩毛線に接續して起れる水戶線は、繊物の產地たる結城を經て、水戶に通ず。

日本鐵道常磐線　は東京より來り千葉縣を經て、利根川を渡り霞ケ浦岸の土浦を經て、水戶線と友部驛に會し、更に水戶よりは東北濱街道を經て磐城に入る。

水戶鐵道　は水戶より煙草の產地、太田に通ず。

都邑　**結城**　は鎌倉時代小山朝光の領地なり、子孫この地に居り結城氏を名のる、南朝の忠臣、結城宗廣はその末なり、人口一萬餘、商業繁昌す。

水戶　は三家の一たる德川氏の城趾、尊王忠誠の士光圀、齊昭を出ししところ、茨城縣廳のある所なり、人口三萬五千、北に那珂川を控え、南は千波沼に臨む、有名なる常磐公園は、德川齊昭の創設せしもの、天保十年烈公が遊息所となし其の荒れを拓き、衆庶と樂を倶にするの意を以て僧樂園の名を與へたり、土地高燥にして、一萬餘株の梅樹艶を競ひ、千波沼の白蓮眼下に好薰を送る、眞に塵外の一仙境なり、世に加賀の金澤の兼六園、備前岡山の後樂園と並び稱す、公園の東に別格官幣常磐神社あり、光圀齊昭の二卿を祀る、光圀は黃門公と稱し、大日本史を編して、大義名分を明かにせし人、齊昭は烈公と稱し、文武兩道を講習せしめたりし弘道館は舊城趾の前面にあり、のは三公の鼓吹による多しとす、かく文武兩道を講習せしめたりし弘道館は舊城趾の前面にあり、中に藤田東湖の弘道館碑あり、寒水石に刻して、壯麗なるものなり、水戶地方は雲井煙草の產地なり、年額百萬圓に上り、漆器水戶塗も亦名產なり、水戶の東那珂川の河口に湊あり、人口一萬二千漁業盛にして、水戶市に用ゐる魚は皆ここより來る、その對岸大洗は海水浴場なり。

太田　は茨城縣北部產物の收合所にして、人口九千、町の北方瑞龍山は水戶家累代の墓地にして、其西なる西山は光圀の隱棲せし所なり、其家今猶存す。

研究上の注意

一、霞ケ浦北浦等の生成に付き、土地の隆起と、土砂の沈澱とを具體的の例にとりて理解すべし。

二、霞ケ浦と其湖畔の都會の生成とに付き、思考して、湖と人文との關係を充分に理解すべし。

三、鹿島灘沿海砂丘の生成につきて想像し近き例を取りて了解を力むべし。

四、準備　常磐公園の寫眞、筑波山の寫眞、德川光圀、齊昭の像、弘道館碑の石摺、結城紬の標

林等其效べし。

第二章　奥羽地方

位置境界　奥羽地方は本州の東北部にありて、南は關東並に本州中部に接し、北は津輕海峽の深溝を以て北海道本島に對し、東は渺茫たる太平洋に面し、西は日本海に接す、其形馬の両耳を立てて我に背きて面するが如し、而してその背に當れる部分は磐城岩代にして、陸前陸中は右耳に當り、羽前羽後は左耳に當る、その頭の部分は耳をも合せて陸奥國なり、何故にこゝを奥羽と稱するぞ、維新以前までは此の七國も唯だ陸奥出羽の二國に過ぎざりき、陸奥は道の奥の義にして、東海道山道の奥に當りし故にこの名あり、出羽は越後の出端の義なるべしといふ。

區劃　維新中興の後、陸奥は磐城岩代陸前陸中陸奥の五國に、出羽を羽前羽後の二國に分ち、更に行政上六縣に區分す、福島縣は岩代全國と磐城の大部とに亘り、宮城縣は陸前の大部と磐城の一部に擴がり、岩手縣は陸中の大部分と陸前の一部、陸奥の一部とを含み、青森縣は陸奥大部を管し、秋田縣は羽後の大部陸中の一部に亘り、山形縣は羽前全國と羽後の一部とに及ぶ、その範圍頗る交錯すれば各縣下の條下に至りて精しく述ぶべし。

面積人口　かく奥羽は七國六縣面積四千二百五十方里にして、關東の二倍に餘れども、人口は四百七十六萬、關東の八百萬に比して殆んど半數に近く、一方里千百二十三人の平均にして、北海道を除きては最も人口の稀薄なる所なり、これ土地の山岳多くして平野に乏しきと、氣候の寒さにもよるなるべけれど、我王化は漸次に西より東せしものなれば、中央を去る稍遠ければ、文化の發達、交通の利便、自ら一歩後れを招きたるに由るものなり、今後交通の發達と人口の繁殖とにより、漸次稠密となるべきは疑なきなり。

地勢　我等は先づこの山多く平野少なき有様を説明すべし、奥羽には三條の大山脈粗ぼ平行して、南北に走れるあり、即ち中央陸羽の境上を走れるを中央脊梁山脈となし、那須火山脈に屬する數多の活火山休火山數多こゝに噴出す、那須火山脈は北海道火山の餘勢を受け、陸奥に恐山、八甲田山(ハッコーダ)、陸中に岩手山(イハテ)、岩代の吾妻山、安達太郎山(アダタラ)、磐梯山等の火山を起し、以て下野の那須火山に連なる、何れも火山質の高山にして二千米以上に聳ゆるあり、現に活動せる火山亦乏しからず、脊梁山脈の東方には北上山脈阿武隈山脈の南北に相連なるあり、これ等山脈と脊梁山脈との間は一連の谿谷あり、馬淵川(マベチ)、北上川、阿武隈川この間を流れて肥沃なる平野を作り、物産この所に集まり政治商業の中心地を作る。脊梁山脈の西には、鳥海火山脈の走れるあり、陸奥の岩木山、羽後の森吉山、鳥海山(チョウカイ)、羽前の月山その名著はる、岩木川、能代川、御物川、最上川の諸川脊梁山脈に發しこの山間を横ぎりて日本海

に注ぐ。是れ等河川は其の流域に平野を作りて人事物產の集合所をなし、文明輸入の門戶となり、人文發展の基地をなす。奥羽の骨格は以上の三大山脈なり、筋肉は此の三條の山脈間に擴がれる平野なり。而して此の平野に滋養を供給する血管は、北上、阿武隈、馬淵、岩木、御物、能代、最上等の諸川なり。實に奥羽の價値ある所は此の河領の平野なり。是等平野は或は湖底の乾涸によりて生じ、或は河流の浸蝕、沈積によりて作られ、今猶ほ河流の灌漑を受く。奥羽の平野は奥羽の河流の生める子なり。奥羽の貴さは主として川あるが爲なり。川の人事上の價値多き斯の如きを知るべし。

沿海　奥羽の沿海は出入乏しく、唯石卷灣、松島灣、陸奥灣の外大なる出入なく、太平洋に牡鹿半島あり、日本海に男鹿半島の突出あり、津輕海峽に下北半島、津輕半島の相擁せる外海岸大なる出入なし。

氣候　奥羽の地勢は以上述ぶる如く、山脈の蜿蜒として蟠まり、その間に平野の挾まれるあるを以て、氣候も所によりて大に趣を異にす。中央山地は冬の寒、夏の暑共に甚しく、所謂大陸的氣候なれども、東部一帶は稍温和にして、激變少なしとなせど、親潮の寒流沿岸を洗ふを以て、その影響を被る少なからず。北西海岸は亞細亞大陸の氣候の感化著しく、特に冬季は西北風吹き荒じ、降雪尠なからず。左に氣象表を掲げて參考に供すべし。

	全年平均	夏季	冬季	降水量
山形	一〇、六	二四、一	負三、七	一一八七、七
秋田	一〇、三	二三、八	負一、七	一七五三、〇
福島	一一、七	二四、三	負〇、五	一二四一、四
金山	一一、二	二四、〇	負〇、四	一四二九、一
石卷	一一、〇	二三、五	負〇、五	一一四五、三
宮古	九、九	二二、四	負〇、九	一三八七、〇
青森	九、二	二二、九	負三、〇	一三八三、九

產物　平野あり、河流あり、地味亦惡しからず、且つ土地廣く、住民少なし、問はずして農業に適すべきを知る。奥羽は多く米を產し、南方は養蠶の業盛に、東部は牧畜盛なり。これ至るところ牧畜に適する原野多きによると雖も、藩時代頗る意を牧馬に用ひて獎勵したりしによる。古來三春馬、南部馬の名天下に高く、岩手縣は熊本鹿兒島と共に牧馬の數多きこと全國に冠絶す。

奥羽の地は三條の火山脈南北に走り、地質錯雜せるを以て鑛物の富全國その比を見ず。岩手縣釜石の鐵山、福島縣の磐城の石炭、秋田縣の阿仁、小阪、院内等銀銅を藏する多く、實に奥羽の地は鑛產物に於て一大寶庫をなせり。

古來養蠶製糸の業行はれたれば、織物の產亦少なからず、福島縣の川俣絹、宮城縣の仙臺平、岩手縣の南部縮緬、秋田縣の畝織、山形縣の米澤織等特異の織物を出す。猶漆器は福島、青森、

秋田に出で、陶器は福島縣なる本鄕燒、相馬燒の產あり、奥羽の地山林の富多く秋田の森林天下に名あり。

人文
奥州の三關

人文 白河關、勿來關、念珠關は奥羽三關にして、陸路奥羽に入るもの、必ず依らざるべからざる處、白河關は山道の要路を阨し、阿武隈山脈と中央脊梁脈との相遏れる所、かの能因法師の遠く都にありて詠じたりしと傳へらるゝ「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白川の關」の地なり、勿來關は海道の咽喉に當り、源義家が「吹く風を勿來の關と思へども道もせに散る山櫻花」と詠じたりし處、念珠關は新潟縣との國境、羽越の街道を扼す、げに三關は何れも狹隘なる阨路にして、其他は山嶽重疊たれば奥羽の地は維新以前迄、宛然別世界の觀ありしもの偶然にあらず、上古蝦夷の跋扈する所あり、中世安陪賴時、貞任の横梁あり、亘理三代の繁榮あり、近世に蒲生氏鄕、伊達政宗、上杉景勝、等據て以て一方に覇たりし所なり、王政維新の際會津藩が王師に抗せしもの亦地勢の然らしむる所なりき、されど今日交通の頻繁の爲めこの別世界も化して、日本文明の一乾坤に融和し、益その繁榮を加ふるに至れり。

研究上の注意

研究上の注意

山脈と平野、河流を色取れる地圖を準備し、河流と平野、物產の關係を獲得するに努むべきなり、奥羽人文の發達遲々たりし所以を地勢上より理解し、今は進步の途中にあり、漸次有爲の才を出し、國家文運に貢獻せる狀を悟るべきなり。

福島縣

沿革

沿革 磐城國はもと、陸奥國に屬し、養老中、之を割て國を置き、後又併せて陸奥に入る、明治元年十二月、之を分つて五國とす、本州其一なり、往昔征夷大將軍坂上田村麿の子淨野、鎭守府將軍に補し、三春（田村郡）に城て之に居り、其子孫遂に田村を以て族稱と爲し、世々之に居る、又藤原淸衡、陸奥出羽の押領使たる時、岩城郡を其女婿平成衡に讓與す、之を岩城氏の祖とす、成衡五子を生み、乃其地を割て分與す、是磐城五郡（菊多、磐前、磐城、楢葉、標葉）の權輿なり、文治五年、源賴朝、泰衡を誅し、奥羽の地に諸將を分封する時、相馬師常、宇多、行方二郡を領し、（宇多郡小高城に居る）結城朝光、白河郡を領し、（朝光下總の結城に在て之を領す、孫祐廣、始て白河に移り子孫世襲す、之を白河結城と稱す）岩城、田村二氏仍故地を領す、建武中奥州源顯家州守に任じ、鎭守府大將軍を兼ぬ、足利尊氏の反するや、顯家兵を率ゐて西上し戰死す、奥羽の州族多く尊氏に應す、獨田村輝顯、結城親朝官軍に屬す、興國元年、顯家の弟顯信、州の介に任じ白河に鎭す、尋で尊氏、畠山高國、吉良貞家を採題とし、州内を略定す、親朝等叛て之に

降り、顯信西歸し、州内皆尊氏に歸す。既にして伊達氏漸く強大、政宗に至り、刈田、柴田、伊具、宇多、亘理の四郡を併す。元中八年將軍義滿、奥羽を以て鎌倉管領に隸す、管領持氏亡び、州内統一する所なし。天文中、伊達政宗六世の孫晴宗、兵勢益熾なり。將軍義晴以て探題と爲す。是時に方て相馬、田村、岩城、石川諸氏競ひ起り、互に相呑噬す。天正末、晴宗の孫政宗既に蘆名を滅し、石川を降し、悉く其地を有す。天正十八年、秀吉東征し、政宗の侵略する所、及田村の采地を沒して蒲生氏郷に與へ、結城の地を割て政に與ふ(慶長十五年)政、徙封の後ち代封せらるゝ者數氏あり、文政の始阿部正權に賜ひ、慶應中棚倉に轉じ、二本松藩に命じて城を守らしむ。岩城、相馬二氏の地は舊に仍る。關ヶ原役後、岩城貞隆の地を收め、相馬氏の封疆は故の如く、白石を伊達氏に加封す。其餘前後封を受くる者、磐城平(初め鳥居忠政、後ち安藤信成)、三春(秋田俊季)、棚倉(初め立花宗茂後阿部正升)、泉(初め内藤政晴、後ち本多忠知)、湯長谷(內藤政亮)、守山(松平頼元)凡七藩、王政維新按察使府を白石に設く、尋で之を改て角田縣と爲し、既にして皆廢して縣とし、又併せて平縣を置き、磐前縣と改稱し、明治九年福島縣に合す。

岩代　もと陸奥に屬し、養老中之を割て磐背國を置き、後又併せて陸奥に入る、明治六年十二月之を割て五國と爲す。本州其一なり。文治五年、源頼朝泰衡を誅し、奥羽の地を分つて諸將を封じ、佐原義連に會津四郡を給ふ。義連の孫光盛葦名氏と稱し、會津郡に居り、黒川に城く。建武中興、源顯家州守に任じ、鎭守府大將軍を兼ね、義良親王を奉じて陸奥及出羽を兼知す。親王尋で大守に任じ、初め國府(陸前宮城郡)に居り、後靈山城(伊達郡石田村)に移る。足利尊氏の反するや、顯家西上し、州族多く尊氏に應す。興國元年顯家弟顯信、州の介に任じ、(白河)磐城に鎭す。四年、尊氏、畠山高國を探題とし、二本松(安達郡)に居り、靈山諸壘を陷れ、正平中、尊氏、又吉良貞家を探題とし、塩松(又四本松に作る安達郡小濱)に居り、高國と偕に州内を略定し、本州大半尊氏に歸す。元中八年將軍義滿、本州及出羽を以て鎌倉管領、足利氏滿に隸す。應永中、氏滿の子滿兼、其弟滿貞を本州の管領となし、笹川(安積郡)に鎭す、永享の末、滿貞、上杉持氏に黨して敗死し、嗣後州内統一する所なし。天文中、伊達氏、米澤(羽前置賜郡)に據り、兵勢益熾なり。將軍義晴以て探題とす。是時に方て葦名(會津郡、黒川今若松)、二本松(安達郡)、二階堂(岩瀬郡、須賀川)、大内(安達郡、小濱)、諸氏競ひ起り、互に相呑噬す。天正の末、伊達政宗二本松、二階堂二氏を平げ、葦名を滅し、大内を降し、悉く其地を有して黒川(會津郡今の若松)に徙る。十八年豐臣氏東征し、政宗の侵略する所、會津仙道を收めて蒲生氏郷に賜ひ、黒川に治して(若松と改稱)陸奥及出羽の守護たらしむ。後宇都宮に徙して上杉景勝を封す。關ヶ原役後、景勝の封を削て米澤に徙し、再蒲生氏を若松に封す。嗣無くして封除し、加藤嘉明之に代り、子明成に至て國除し、保科正之(後に松平と改稱す)を封す。その餘、州内前後封を

受くる者、二本松（始、松平重綱後、丹羽光重）、福島（初、本多政長、後、板倉重寛）二藩とす。明治紀元、王師北征、若松藩主松平容保罪に伏し、其封を收めて斗南（陸奥北部）に徙し、酒井忠寶を代封す、丹波、板倉二氏若松に薫するを以て、其封を削り、板倉勝達を重原（三河碧海郡）に徙し、民政取締所を置く、尋で藩所を廢し、若松、二本松、福島三縣を置き、又合して福島、若松二縣となし、後若松縣を福島縣に合す。

位置　福島縣は茨城、栃木二縣の北に連り、奥羽の入口に當る、奥州の兩關門たる白河關と勿來關とは共に本縣の南端咽喉にあり、岩代の全部一市十郡（若松市、信夫、伊達、安達、安積、岩瀬、南會津、北會津、耶麻、大沼、河沼）及磐城七郡（東白川、西白川、田村、石城、雙葉、相馬、宇多）に亘る。

境界　本縣北は宮城縣、山形縣に接し、東は太平洋に面し、南は茨城縣、栃木縣西は新潟縣に境す、海岸線は極めて單調にして出入に乏しく、阿武隈山脈の東縁邊にして削るが如き絶壁をなし、良港を見ず。

山脈　阿武隈山脈は阿武隈河口に起り、南走して茨城縣に及ぶ、山貌一面高原の形相を示し急峻なる峰巒なく、高さ平均四百米にして、その表面は波狀の起伏をなす、中央脊梁山脈は本縣の中部を走りて高峻を極め、吾妻山、磐梯山、安達太郎山等の活火山を起し、以て栃木縣との境上

那須火山に連なる。

安達太郎山は明治三十三年七月十七日一大爆裂をなし、熱灰を噴出し、泥土岩片を飛ばし、焦獄地獄の巷を現はし、幾多の人命を奪ひしが、今も猶火口熱水を湛えて、硫煙高く噴騰し、棲館の觀あり、吾妻山は明治三十六年五月十九日俄然破烈し、灰燼砂石を飛ばし、泥灰を降らして、噴煙鳴動せしが、現時猶盛に白煙を吐けり、磐梯山は明治二十一年七月十五日大破裂を為し、小磐梯と稱する一峯を飛ばし、黒煙柱狀をなして昇騰し、天地晦迷顔る慘憺を極めたり、四百六十有餘の人命を奪ひ、幾多の田園財貨を埋沒しならんこと數ふべからず、今も猶白煙の轟々遠雷の響を以て噴出するを見る。

平原　縣内山岳重疊して平野に乏しけれど、阿武隈川の流域、猪苗代湖畔、並に古の湖底たりし會津平原は、稍廣き平野をなし米穀の産多し。

河流　阿武隈川は那須火山より發し、白河、郡山、福島を經て宮城縣に入り、磐城陸前の國境を東に流れて海に入る、流域南北に長く、上流地方を阿武隈平原と云ひ、東西四里半、南北十二里半に及べど、水利宜しからざれば、開墾普ねからず、郡山附近の廣谷原にては猪苗代湖の水を導きて開拓せられし所あり、阿武隈川下流福島近傍の平野を福島平原と云ふ、阿武隈川及びその支流の灌ぐ所、幅二里長六里、往時の湖底たりし地、水涸れて現今の狀態となる、田園よく開け

國中最も生產力に富める地方なり、米の產、穀物の產多く、特に養蠶業頗盛にして本邦有數の養業地なり、阿武隈川全長二十五里、田七萬二千町、畑四萬三千町その流域にあり、全國耕地の甘分の三、二九に當る、福島より下流十五里舟揖の便あり。猪苗代湖、裏ヶ浦に次ぎて、我國第三の大湖なり、周圍十三里、その北東の兩岸は往時湖底なりし廣大なる平地を控へ、土地肥沃米穀よく熟す、日橋川は湖の吐水路にして西北より流出し、急流をなして會津平原に走り大川、只見川を入れて阿賀川となり新潟縣を經て日本海に朝す。

會津平原は日橋川、大川の流域にして四圍丘陵を繞らし、なさがら摺鉢狀をなす、地學上之を盆地と稱す、會津米の產地なり、古阿賀川が一方を切りて流出できりし以前は四圍の山より流れ來れる多量の泥砂を集めて湖水をなせしこと、猪苗代湖の如くなりしならん、猪苗代湖に比べて覺遜せば、會津盆地の如くなるべし、田園よく開け若松市その中央にあり、福島縣の生命を繫ぐ所は以上四平野にして、產物を都邑も皆この平原に集まる、僅かに海岸に沿ふて多少の平地存し、少許の產物を出し都邑の點々相連なるのみ。

鐵道　日本鐵道奥羽線　栃木縣より來り、阿武隈川筋にある白河福島を經て宮城縣に入る。

常磐線　は茨城縣より濱街道に沿ふて來り、宮城縣に入りて、奥羽線に合す。

猪苗代湖　西岸　日橋川　平潟　會津平原　鐵道　日本鐵道

岩越鐵道　は奥羽線の郡山驛より、猪苗代湖の北岸を經て若松、喜多方に通ず。

奥羽南線（官設）　は福島驛より西して山形縣に入り、米澤、山形を經て院内に達する官設奥羽南線あり。

都邑　**白河**　奥羽の咽喉に位し、阿武隈川に臨み、地の利を得商業盛なり、人口一萬八千、城址は町の北端にあり、寛政の實相松平樂翁その藩主たりしなり、戊辰の役會津兵之に據りて官軍に抗し激戰數日に亘りしところ、當年戰死者の墓碑多し、白河關址は西白河郡の南端古關村にあり、東西白河郡は良馬を產し白河町は馬の市場として名あり。

郡山　は縣の中央にあり阿武隈川に臨む、人口一萬一千、附近は養蠶盛なる地なれば、製糸業、蚕卵種の取引活潑なり、猪苗代湖の水を疏して、田園を開墾し、良田相接す、郡山の西、三春產良馬の產地なり。

福島　舊板倉氏の城下たりしところ、阿武隈川に臨む、人口一萬餘、農產物、生糸類、絹織物、繭、眞綿の取引頗る盛にして、眞に奥羽第一の商業地なり、人口に膾炙せられ福島町四圍地方の產物饒多なると奥羽の門戸を占むるとによる。福島縣廳所在地なり、

半田銀山　は福島町の北にあり、幕府時代には佐渡相川但馬生野と共に我國三鑛山の一に數へられ、五萬餘、明治初年五代友厚氏の手に歸し、三十三年山崩の難に遇ひ、三十六年遂に休業したり。

都邑　白河　郡山　福島　半田銀山　人口三千　官營油

若松市　人口三二、七八三

○會津塗　會津燒　相馬燒　福島　會津　相馬

若松　會津盆地の中央都會にして、人口三萬、四方山を繞らして自ら別天地を作り、要害堅固と稱せらる。蒲名氏、浦生氏、上杉氏、加藤氏ここに鎭して、雄を東北に振ひしところ、家光弟保科正之を封じて親藩となし、諸侯の間に重をなしゝが、戊辰の際王師に抗し、市街兵燹に罹り、今猶舊に復し難しとす。城址は市の南端にあり、市の東方飯盛山には白虎隊勇士の墳墓あり、行人袖を濕ほさゞるなし。由來會津平原は盆地なれば地域限あり、市民は主として工業を以て立たんとし、奥羽の製玉業地をなす、會津塗は市の名產にして、產額三十三萬圓、漆器徒弟學校を設けて改良を圖る。會津燒は若松市の南方一里なる本鄕村を主產地とす、故に本鄕の名あり、產額五十萬圓、その價格の廉なる割合に精良なれば、需用全國に多く、又輸出品として素燒を橫濱に送り、繪付をなすもの多し。福島縣にては會津燒の外相馬燒の名產あり、磐城相馬郡中村及び雙葉那大堀村を主產地とす、その特質、地質堅緻にして強熱に耐ゆ、毎個必ず繪馬を畫く、日狩野尙信の地に遊びしとき、藩主相馬義胤の需に應じて畫かしめしに、需用は多く茶器に用ひ、花瓶置物能くせざるなし。

平　は磐城東方の一都會とす、附近は所謂磐城炭田の地にして、常陸より起り延長二十一里に及ぶ本州中最大の炭田なり。炭質は新しく亞褐炭に屬し、九州北海道のものよりも劣等なれば、鑛業用に適せざるも、工業用、暖爐用として需用廣く、概ね東京に輸出す、常磐線の貨物は主として

研究上の注意

百に及ぶ。

石炭の種類

無煙炭　生成最も古く、純粹の炭素なり、火力頗る強く、黑煙を發せず、軍艦用はこれに限る、英國のカヂフ炭、我國にては天草炭これに屬す。

黑炭　普通の石炭にして、稍不純分を含有するもの、我九州、北海道の產は概ねこれなり。

褐炭　生成新しき爲め褐色を呈し、或は木理の見ゆるあり、磐城炭はこれなり。

泥炭　最も新しきもの、湖底の洗瀉物よりなる多し。

研究上の注意

1. 會津盆地、相馬燒、本鄕燒、會津塗、川俣絹。
2. 福島町の商業隆盛なる所以を土地と人事との關係より知るべし。
3. 河流と平野との關係、平野と物產との關係を理會し、更に平野河流と都會との關係に及ぶべし。
4. 會津盆地生成の理を近易の例によりて理解すべし。
5. 會津の工業地となりし原因を悟りて、生業の變遷につきて知るところあるべし。

第參篇　地誌　宮城縣

宮城縣

沿革

沿革　陸前、建武中興、源顯家州守に任じ、鎭守府大將軍を兼ぬ、初國府に居り、後靈山城（岩代、伊達郡）に移る、足利尊氏の反するや、族弟家兼を以て探題となし、大崎城（玉造郡大崎村）に居らしめ、（子孫志田、玉造、栗原、加美、黒川五郡を領し、大崎と稱す）家兼の從子斯波家長を州守となし、高水城（陸中、紫波郡）に居らしむ、二人皆官軍に抗して敗死す、俄にして顯家西上して戰死し、州族多く尊氏に應ず、既にして伊達氏、岩代に起り漸く强大（文治の役には中村朝宗、功あり）、岩代の伊達、信夫三郡を領し伊達氏と稱す、應永中、政宗（朝宗八世の孫）柴田、宮城、名取、黒川四郡を併せ、天文中、政宗六世の孫晴宗、米澤（羽前置賜郡）に移る、將軍義晴以て探題となす、天正十八年、豐臣氏東征し、大崎、葛西の地を沒し、之を木村秀俊に賜ふ、秀俊政を失す、秀吉その封を奪ひ、之を伊達政宗に賜ひ、岩手山城（玉造郡）に居らしむ、關原役後、政宗、治を仙臺城に定め、子孫世々之に居る、明治維新、慶邦、會津に黨す、王師封境に臨み、屢邦城を致し降る、朝廷其封を削り、伊達宗基をして襲がしむ、尋で石卷、登米二縣を置き、又石卷を登米に併せ、既にして曾廢して仙臺、一關二縣を置き、又改稱して宮城、水澤と云ふ、後合して宮城一縣とす。

位置

位置　宮城縣は磐城の北部三郡、（刈田、伊具、亘理）と陸前の大部一市十三郡、（仙臺市、柴田、名取、宮城、黒川、加美、志田、玉造、栗原、遊田、登米、桃生、牡鹿、本吉）とに亘る、北は岩手縣、狹義の陸前に當る、南は福島縣、西は山形縣に接す。

地勢

地勢　土地勢上都に分つを得べし、一は脊梁山脈にして縣の西境を南北に連亘し、一は北上山脈にして東邊一帶の地を占む、その間は即ち廣大なる北上平原を開き、北上川及びその他數流その間を灌漑し、鐵田相連なりて仙臺灣邊の宮城野に連なり、米の產額頗る多く、平年百八萬石に及び、仙臺米の名高し、名邑大市亦此內に橫はる。

脊梁山脈

脊梁山脈　は、南境、磐城、陸前、羽前の境上に藏王山あり、高さ一千九百六十四米の休火山にして、西北境に聳ゆる栗駒休火山に至る、侵蝕を受くる甚しく、一見火山にあらざるが如しと雖ども、外輪山の跡明に存す、北上山脈は脊梁山脈の如く嶮峻ならず、幾多の小峰相連なりて起り、殆んどその間に平地を存せず、宛も丘陵起伏せる高原地に類せり、北上山脈の南端遠く太平洋中に突出して牡鹿半島をなし以て石卷灣を抱き、灣の入口は石の卷灣の東方に灣入して、水深く港內波穩なり、面積の小なるは欠點なるも、石卷灣邊に於て最好の錨地なり、日本郵船會社の定期航路に當り、東北地方に出入する貨物は更にこゝより石卷、鹽竈との間を往來する小蒸汽船により收散せらるゝなり。

北上山脈

北上山脈　牡鹿半島の東南端に一島嶼あり、金華山これなり。圓錐形の一孤峰にして直立四百四十五米、海中に屹立し、三等回轉紅白交閃燈の光を放ちて航海者の目標をなす、石卷灣の西に松島灣あり、

沿海

沿海　松島と其成因

大小無數の島嶼その間に散點して風光秀絶、所謂三景の一をなせり、此等の諸島はその西北の沿岸地方全體と共に火山灰の海底沈澱よりなれる凝灰岩にして、殆んど同高を有し海波の浸蝕作用により多くは奇形を呈し或は穿たれて石門を作り、水面に接する所深く凹入するあり、而して翠松之が髪をなし灰白色の凝灰岩と相映じて、風景絶佳なり、眞や奇工も筆を拋ち歌人も口を噤むと云ふ能はず、唯あゝ松島や松島やと三歎せしめたるもの、理なり、總じて本縣の海岸は北上川河口の以南と以北とに於て著しき差異あり、以南は概ね平坦にして、砂濱相連なり、弓形をなせど、以北は海岸急傾斜をなし、斷崖海に迫りて、狹長なる灣、大牙相迎ふ、水深く兩岸亦絶壁多し、かゝる海岸を地學上リアス式と云ふ。

河流　北上川は岩手縣の北境なる七時雨火山附近に發し、北上山脈、脊梁山脈の間を南流して本縣に入り、石卷港より海に注ぐ、總長二百八十年、伊達政宗領内に良港なきを憂ひ、その臣河村孫兵衛に命じ、鹿の又よりこの地に至る三里の間を開鑿して、北上川の水を引かしめたり、寛永元年より三年にして成る。領内米穀の輸出倉庫地とす、全長七十餘里、石の卷より陸中狐禪寺にまで滊船の便あり、田九萬四千町、畑八萬六千町を濕ほし全國耕地の百分の三、五八に當る。

阿武隈川　福島縣より來り、本縣に入りて東流し、海に注ぐ、全長三十五里、灌漑舟運の便

多し。

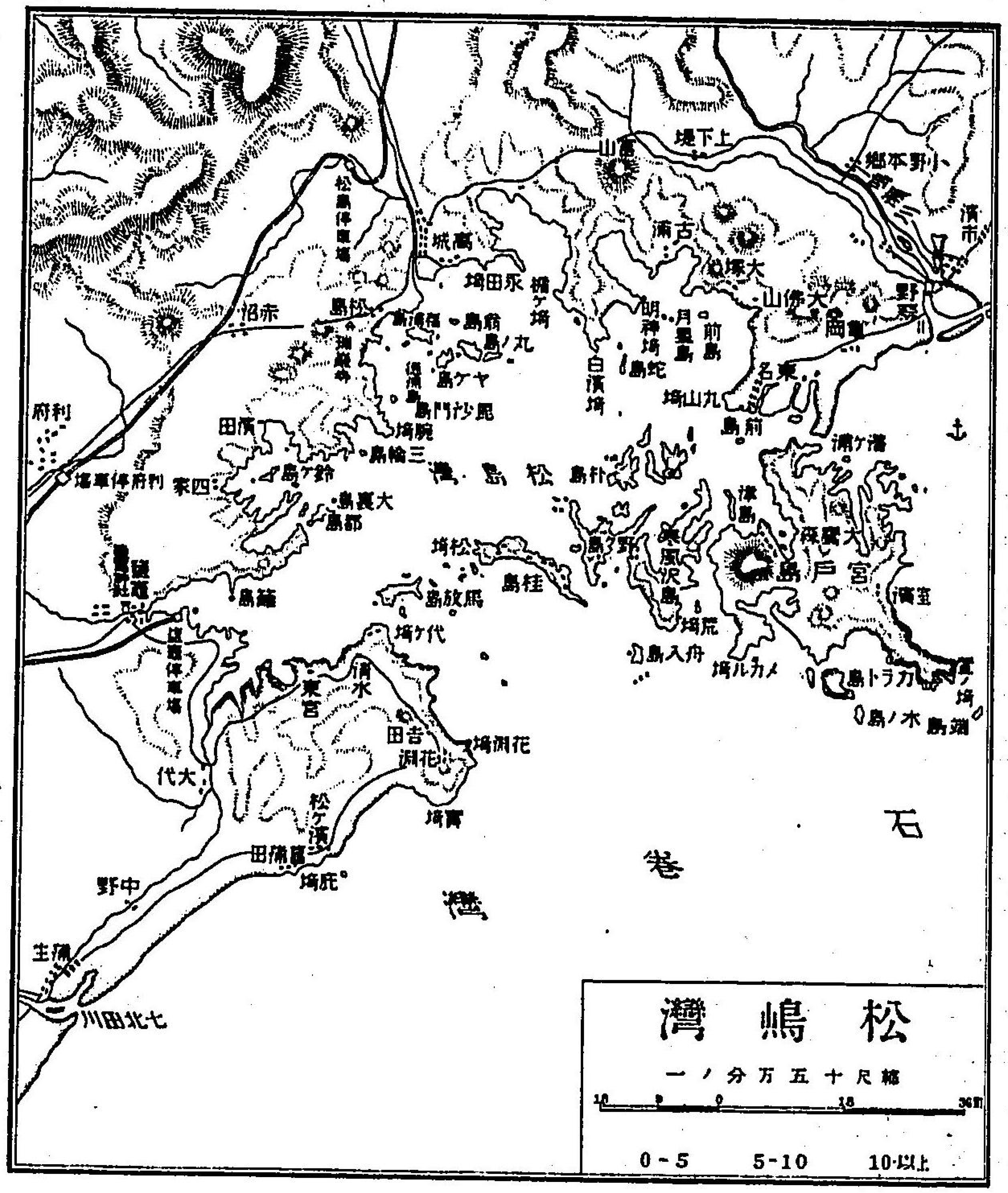
鐵道　**奥羽線**、**常磐線**二線阿武隈川の北岸岩沼驛に會して、縣下を縦貫せり、仙臺の東北岩切より支線、鹽竈線を出して鹽竈に至る。

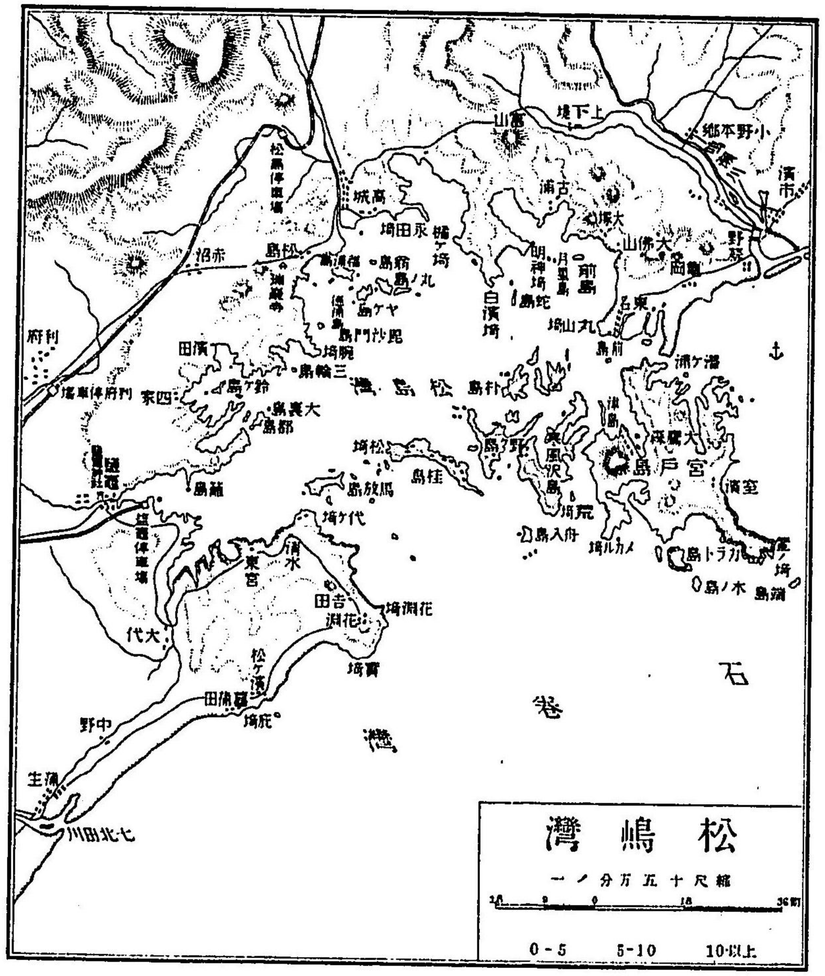
都邑　**仙臺市**は宮城縣の中央に位する大都會にして、人口九萬三千、奥羽第一の大都會なり、もと伊達氏六十二萬石の城下たり、舊城は市の西にあり、青葉城と云ふ、慶長五年伊達政宗の築きしところ、今第二師團司令部あり、第二高等學校、仙臺醫學專門學校、政宗の廟所瑞鳳殿亦こゝに近し、瑞鳳殿の結構頗る壯麗を盡し、彫刻の美を極む、深殿には政宗の像を安んず。宮城縣廳、宮城控訴院、宮城集治監あり、地方官衙相並ぶ、名士の墳墓には支倉六右衛門、林子平あり。

支倉六右衛門は慶長中政宗の命を奉じてローマに使し、八年の久しきを經て歸國せしもの、子平は寛政三奇士の一、幕末の經世家なり、夙に海國の志を抱き、海國兵談を著はし、蝦夷地の開拓を說き、頗る活眼達識の士なりしかど、幕府の忌諱に觸れ、六無の狂歌と共に空しく[illegible]にして、永眠せしものなり、今の時地下の[illegible]、感慨如何にぞや。

産物には仙臺平、埋木細工あり。

仙臺平は藩祖政宗が伴ひ來りて京都の[illegible]、西陣の職工小杉[illegible]右衛門を招きて、伊達家用の織物を作らしめしが、





多し。

鐵道　奥羽線　常磐線　二線阿武隈川の北岸岩沼驛に會して、縣下を縱貫せり、仙臺の東北岩切より支線、鹽竈線を出して鹽竈に至る。

都邑　仙臺市　は宮城縣の中央に位する大都會にして、人口九萬三千、奥羽第一の大都會なり、もと伊達氏六十二萬石の城下たり、舊城は市の西にあり、青葉城と云ふ、慶長五年伊達政宗の築きしところ、今第二師團司令部あり、第二高等學校、仙臺醫學專門學校、政宗の廟所瑞鳳殿亦こゝに近し、瑞鳳殿の結構頗る壯麗を盡し、彫刻の美を極む、深殿には政宗の像を安

んず。

宮城縣廳、宮城控訴院、宮城集治監あり、地方官衙相並ぶ、名士の墳墓には支倉六右衛門、林子平あり。

支倉六右衛門は慶長中政宗の命を奉じてローマに使し、八年の久しきを經て歸國せしもの、千平は寛政三奇士の一、幕末の經世家なり、夙に海國の志を抱き、海國兵談を著はし、蝦夷地の開拓を說き、風雲を指眼達識の士なりしかど、幕府の忌諱に觸れ、六無の狂紙と共に空しく蟄見を閉にして、永眠せしものなり、今の時地下の實、感慨如何にぞや。

産物には仙臺平、埋木細工あり。

仙臺平は藩祖政宗が伴ひ來りし京都の吳服商岩井八兵衛、西陣の職工小杉彌右衛門を招きて、伊達家用の織物を作らしめしが、

途にその工夫にて織り出せしと傳ふ。この地方萬年木の衰微にて堅牢なる紫系と眞正地藍とを用ふるを以て、色の不變不褪を特色とす。主として袴地用なり。藩府時代は頗る隆盛なりしかど今は產額多からず、市の內外を合して三十二萬圓に過ぎず。

埋木細工

埋木細工(うもれぎ)は市の近傍名取川の凝灰岩層間に挾まれる、褐炭にして、今は青葉山より產す、机、卓、茶盆、文房具、合せて產額四萬圓に及ぶ、質堅牢にして黑色玲瓏雅致甚だ富めり。

仙臺市が眞に發達せざる所以

仙臺市は眞に東北地方の大都會たる資格を保つと雖ども、單に政治上の中心地を爲すに過ぎずして商業の盛、福島に及ばず、工業は寧ろ若松に劣れり、大藩の城下にして衣食に安んじたりし風今猶去らず、仙臺平は名高きも產額少く、仙臺味噌の東京に出づる多きも、主に附近の產なり、仙臺米の名あり、米の產額平年百八萬石に上れど商況振はず、その他埋木細工の類は問ふを用ひず、政治上の一中心地にこそあれ、商業地としては見るべきなし。

石卷

石卷 は北上河口にあり、人口一萬八千、港口は土砂堆積して、巨船を入れ難きも、之れを中心として或は附近沿岸諸港に通じ、北上川と松島灣とを連絡する野蒜運河により、野蒜、鹽竈に至り、或は川を溯つて一の關、狐禪寺に至るあり、眞に四通八達、百貨輻輳せり。

產物 水產

產物 **水產** 本縣の水產物は頗る多く、所謂仙臺鮪の本場にして、東海岸特に牡鹿半島附近より產する、海產物は實に非常の巨額に達し、鮪漁は特に隆盛にして、年々二十萬圓余の產額あり。

研究上の注意

研究上の注意

一、準備、仙臺地圖、埋木細工、仙臺平、松島寫眞。

二、北上川とその平野との關係、仙臺市の商工業の振はざる所以、商工業の發達せざる都會の將來は衰微の外なきことと理由等を獲得せよ。

三、松島生成の理を說き、遠からざる將來に於て、松島は水蝕の爲に破壞し能るなきやを疑ふも興なしとせず。

岩手縣

沿革

沿革 古昔蝦夷の地、後、安倍氏の跋扈せし所。平理氏三代の繁榮せし亦この地を以て根據となしぬ。天正十八年、豐臣氏東征し、蒲生氏鄕をして本州及出羽の守護たらしめ、南部氏の封を定め、葛西の地(磐井、膽澤、江刺、及陸前、牡鹿、登米、桃生、本吉の八郡)を沒して木村秀俊に賜ふ、翌年土寇蜂起し、秀吉、秀次を遣り之を征す、南部信直、從ふて功あり、紫波、和賀、稗貫三郡を加賜し、秀俊の地を奪て伊達政宗に賜ふ、慶長三年、南部信直、盛岡城を築き、福岡(陸奥二戶郡)より徙る、關ヶ原役後、南部氏の封疆故の如くにして州內過半を領し、世々盛岡に治す、南撥三郡(膽澤、江刺、磐井)は伊達氏に屬す、明治紀元、王師北征、南部氏の封を削り、尋で

位置　宮城縣ト一方里千七百七十三人、福島縣ト二百四十人、地勢　北上山脈　脊梁山脈

江刺、膽澤、九戸、三縣を置き、九戸を二戸と改め、既にして之を江刺に併せ、盛岡藩を廢して縣となし、又悉く合併して盛岡縣を置き、終に改稱して岩手縣と云ふ。

位置　岩手縣は奥羽東部の中央に位し、東は太平洋に面し、南は宮城縣に境し、北は青森縣に連なり、西は脊梁山脈を以て秋田縣に隣る、陸中の大部一市十一郡（盛岡市、岩手、紫波、稗貫、和賀、江刺、西磐井、東磐井、上閉伊、下閉伊、九戸、膽澤、）及び陸前の氣仙郡、陸奥の二戸郡とを管し、面積の大なること我國第一なるも人口は七十一萬、二方里の住民六百九十三人なれば、土地の割合に少數なるを知る。

地勢　地勢、山脈重疊し、東には北上山脈あり、早池峰は最高峰にして高さ一千七百九十六米なれば、甚しき高山にあらざるを知る、西には脊梁山脈連亘す、この兩大山脈の間は北上川の灌漑する流域にして、耕種、牧畜共に縣下に冠絶し都會も鐵道も、こゝに集まる、實に北上川は岩手縣の母なりと云ふべし。

脊梁山脈、宮城縣の栗駒山より北に國境を走り、幾多の休火山相並ぶ、盛岡市の西北に聳ゆる岩手山はその名峰なり。岩手山は又岩鷲山と云ふ、盛岡の西北六里にあり、海抜二千七十米、その形富士に似たるを以て南部富士の名あり、頂上は三ケの火山となる、盛岡より眺むるを得るは東岩手火山にして、大噴火口あり、直徑約六丁、妙高嶽はその中央火口丘なり、中央火口丘とは

昔時の大噴火口より噴出盛なりし時、噴出物堆積してなれる火口内の山を云ふ、東岩手火山の西にあるは西岩手火山にして、噴火口卵形をなし、東西二十七町、南北半里、今猶盛に硫烟を噴出する硫氣孔あり。

脊梁山脈の麓は裾野頗る廣く小牛馬の牧畜に用ひらる、南部馬はこれ等の原野に產するものなり、馬の飼養十萬頭に達し、熊本、鹿兒島と相並びて全國に冠絶す。

仙人の鐵山、湯田の銅山等鑛山の富、脊梁山脈中に多し、北上川以東の地は即ち北上山脈の群山乾立し、直ちに海岸に逼りて出入鋸齒狀をなせるリアス式の海岸をなし、幾多の小港灣海岸に沿ひ、釜石、大槌、宮古の如きは、海水深く灣入して孰れも良港たる資格を有せざるにあらざるも、嶮峻なる北上の山嶺その背後を擁し、中央北上平野と交通を開く能はず、若しその後方の交通便利にして、富饒なる生產地のあるあらば、その繁榮察するに難からず、北上山地の地形はこの發達を妨ぐ惜しむべきなり、されど海岸一帶の地は有名なる漁業地にして、宮古沖は魚族棲息多きを以て聞え、鰹節の產最も多く、河川には鮭の獲多し、縣下水產の總額百五十萬圓に上ぼり、奥羽第一の巨額なり。

北上山脈中には釜石鐵山あり、本邦第一の鐵山にして、採掘面積八十二萬坪に及ぶ、文政六年の發見にかゝり、現今田中長兵衛氏の有なり、その製煉せる鐵は釜石港より輸出して大阪砲兵工廠、

釜石鐵山　海岸

横須賀造船所に送るもの多く、[illegible]産額四百三十三萬貫に及ぶ。[illegible]のみ。

鐵道　[illegible]宮城縣より來り[illegible]一關（イチノセキ）、盛岡を經て青森縣に入る奥羽線の北上平野を縦貫するあるのみ。[illegible]

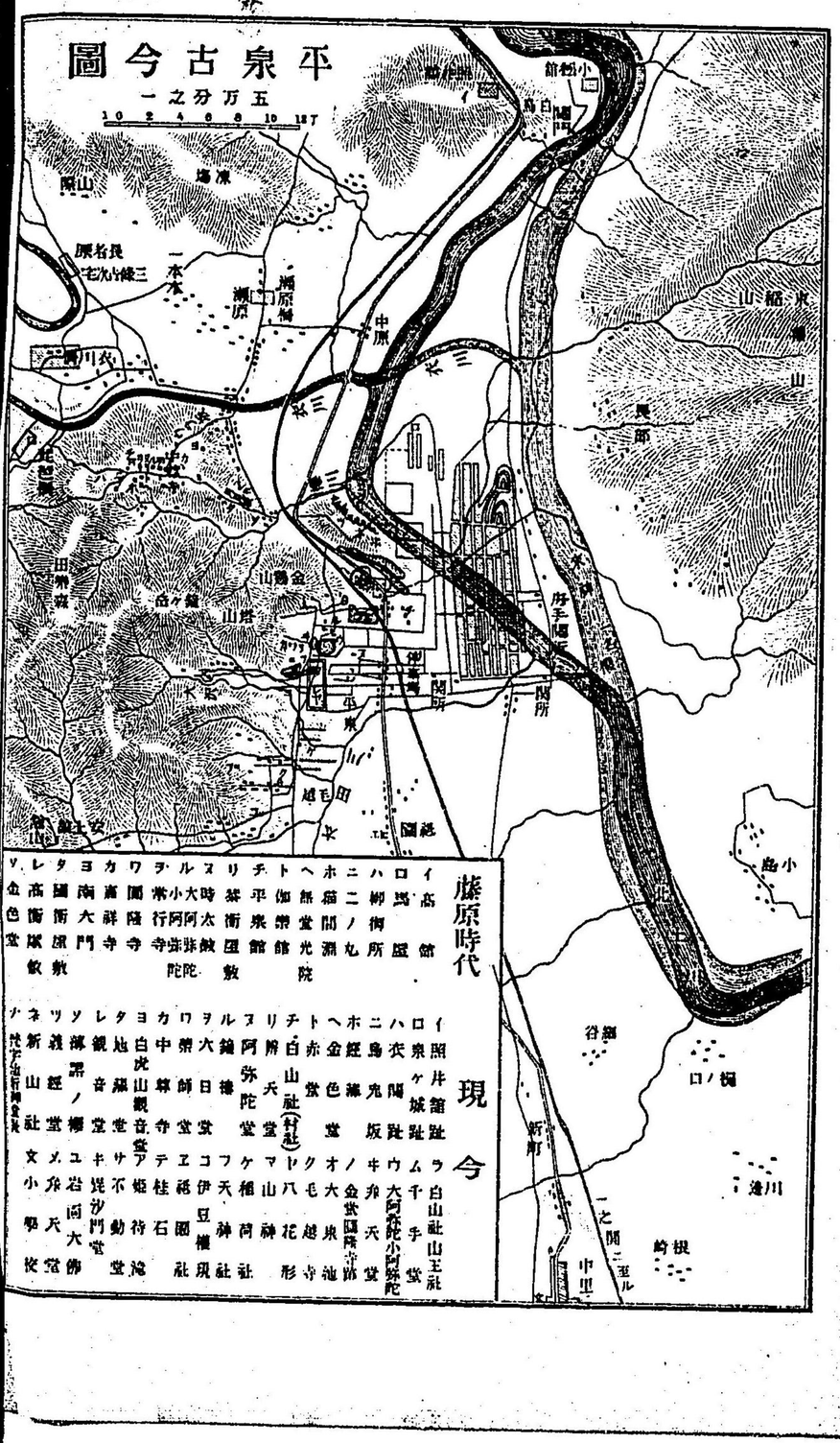
都邑　[illegible]**一關**[illegible]は陸中に入る關門にして、[illegible]商業活潑なること、盛岡市に次ぐ。[illegible]近傍狐禪寺より石巻港に通ずる蒸汽船の往來あれば市街頗る繁盛なり。人口六千五百。[illegible]一關の北三里に平泉（ヒライヅミ）あり、藤原清衡、[illegible]基衡、[illegible]秀衡、[illegible]泰衡四世居館の地[illegible]、當時豪奢を極めし蹟[illegible]今尚ほ見るを得べし。館址は僅に斷礎を殘すに過ぎざるも、[illegible]中尊寺[illegible]毛越（モーツ）寺等は尚其一部を存し、特に中尊寺の金色（コンジキ）堂、金色燦然[illegible]光（ヒカル）堂の名に背かず、中尊寺の側に判官館あり、藤原氏が義經の爲に築きし所、又平泉の北には、[illegible]衣川の西より流れ來りて北上川に注げるあり、貞任が衣川柵を構へしはこの所なり。[illegible]

盛岡市　[illegible]は縣廳の所在地にして、もと南部と稱し、南部氏累代の居城地たり[illegible]、人口三萬二千[illegible]地方官衙を始とし、[illegible]高等農林學校あり、北上川に臨みて、交通の便に富み、釜、鐵器の産多く、鐵瓶は南部鐵瓶と稱し、共蓋にして古風質朴なるところ、[illegible]賞玩に値す、[illegible]南部紬、南部縮緬も市並にその附近に産す、産額十九萬反に及ぶ。

研究上の注意

[illegible]

鐵道　[illegible]
都邑　一關　平泉
[illegible]
盛岡　三一、八六一
研究上の注意



一、準備、中尊寺寫眞、岩手山寫眞、南部繰物

兵庫港中沿岸の大港をなさゞる所以を見て、港に要する性質は水深く、波濤を避くるを得る便ある外、後背に富饒なる平野あるを必要とする所以と理解すべし。

三、北上川と北上平野八その產物とその關係より河と人生との影響を獲得せんを要す。

四、デルタ式の海岸の好適例なるを以て、ことに周到なる說明を以て、その成立を明にすべし、

北上河水の流出口に水蝕の作用を受け漸次河口の擴張を來し、而してかゝる鋸齒狀をなす所以を理解すべし。

かゝる沿岸は、波濤を避け得るを以て、魚族の卵を生み付けん爲に、多く集まるを悟るべき

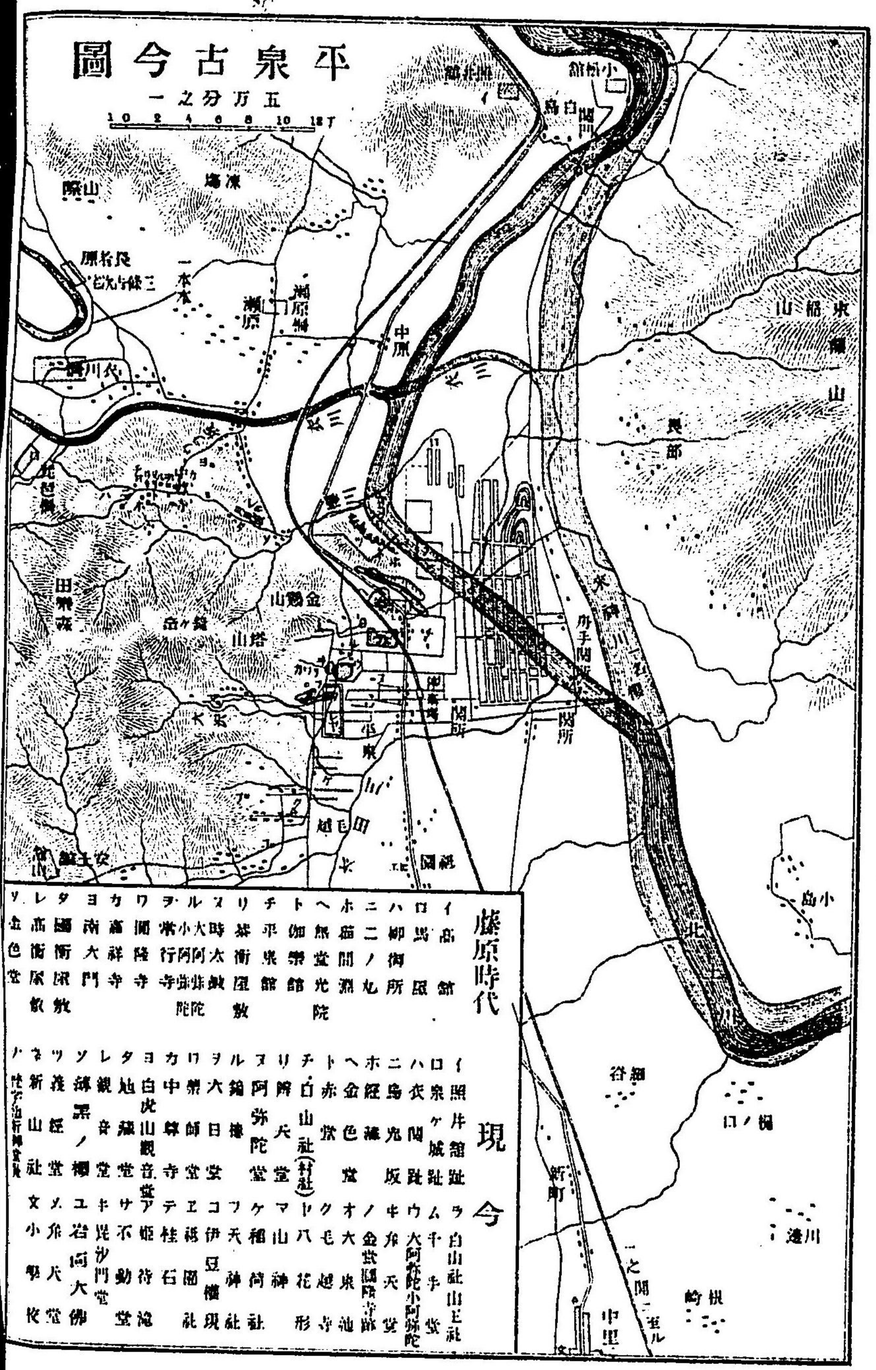
青森縣

沿革　陸奥、文治五年、源賴朝、藤原泰衡を誅す、其將、南部光行、從つて功あり、乃奧州總

都の五郡を賜ふ。今の二戶、津輕、陸中の岩手、閉伊、鹿角是なり、建久三年、光行初て二戶郡

にいり、三戶に城き、子孫世々之に居る、光行十二世の孫守行、應永中足利持氏に從ひ功あり、

陸奧國司に補す、時に北畠顯家の裔、津輕郡浪岡を據り、浪岡氏と稱す、天文の初、南部安信其



一、準備、中尊寺寫眞、岩手山寫眞、南部織物

二、陸中沿岸の大港をなさゞる所以を見て、港に要する性質は海深く、波濤を避くるを得る便ある外、後背に富饒なる平野わるを必要とする所以を理解すべし。

三、北上川と北上平野、その産物との關係より河と人生との影響を獲得せんを要す。

四、リアス式の海岸の好適例なるを以て、つとめて周到なる說明を以て、その成立を明にすべし、

五、河水の流出口に水蝕の作用を受け漸次河口の擴張を來し、以てかゝる鋸齒狀をなす所以を理解すべし、

六、かゝる沿岸は、波濤を避け得るを以て、魚族の卵を生み付けん爲に、多く集まるを悟るべきなり。

青森縣

沿革 陸奥、文治五年、源頼朝、藤原泰衡を誅す、其將、南部光行、從つて功あり、乃奥州糠部の五郡を賜ふ。今の三戸、津輕、陸中の岩手、閉伊、鹿角是なり、建久三年、光行初て三戸郡に入り、三戸に城き、子孫世々之に居る、光行十二世の孫守行、應永中足利持氏に從て功あり、陸奥國司に補す、時に北畠顯家の裔、津輕郡浪岡に據り、浪岡氏と稱す、天文の初、南部安信其

地を取らんと欲し、弟高信をして之を伐たしめ、高信を津輕の守護とし、石川城に居らしむ。天正中南部信直、其弟政信を津輕の郡代となし、浪岡城に遣さしむ。津輕為信、大光寺左衛門三人をして之が補佐とす。三人相爭ひ、大光寺羽州に走る。天正十七年、政信暴死し、信直、南右兵衛を遣して政信に代らしむ。十八年、津輕為信、浪岡城を攻めて、南右兵衛を走らし、遂に津輕の地を有して、弘前に城き、之に居り、潜に款を豊臣秀吉に送る、是より始て守牧に列し、子孫世々弘前に治す。十九年、南部の支族、九戸政實、福岡城に據り叛す、南部信直之を伐て克たず、秀吉、秀次を遣て之を平げ、信直を福岡城に移す、慶長二年、信直、城を盛岡に築き之に徙居す、明治紀元、田名部に、松平容保の子、容大を封し斗南藩と稱す、既にして皆、改めて縣とし、更に合併して弘前縣を置き、改て青森と稱し、縣廳を青森に定む。

位置　青森縣は奥羽の最北部に位し、東は太平洋に臨み、西は日本海に瀕し、北は陸奥灣より津輕海峽を隔て、北海道の南端渡島國と相對し、南は岩手、秋田の二縣に隣る。縣廳を青森市に置き、陸奥の大部三市八郡（青森市、弘前市、東津輕、西津輕、中津輕、南津輕、北津輕、上北、下北、三戸）を管す。

地形　馬耳の如き南半島長く海中に突出し、その兩角の中に陸奥灣を抱く。下北半島は東角を占め、大間岬、尻矢岬の二岬、鋭く海中に出で、尻矢岬には燈臺あり、霧笛の設あり、津輕半島は西に出で、その尖端、龍飛岬は遙に渡島の白神岬と相望む。

津輕海峽は水頗る深く、潮流速にして所々急流をなし、陸奥灣はW狀に灣入して青森、野邊地の二灣をなし、その東北大湊は沙嘴により抱かれたる內港を有し、碇泊の便あり、今海軍の要港にして水雷團あり。

地勢　脊梁山脈、中央を縱斷して南北に連亘し、中央に八甲田山あり、下北半島に恐山の活火山あり、八甲田山は田茂萢嶽、赤倉嶽、井戸嶽、前嶽、酢ヶ湯嶽、小嶽、高田大嶽、石倉嶽の八峰よりなれるを以てこの名あり、陸奥の中央に蟠れる休火山にして、酢ヶ湯嶽は最も高く、千五百七十一米に及ぶ、頂上に圓形の噴火口あり、麓には熱湯を湛えたる地獄湯、盤に硫氣を噴出する硫氣孔あり、恐山は下北半島にあり、高さ七百餘米、傾斜緩にして山頂に一大火口址あり、その底に水を湛えて恐山湖と稱せらる、火口は北に開け湖水これより流れて壯走し所謂火口瀨を作り、正津川となる、火口瀨とは火口內に溜まりたる水の火口側壁の一部を破りて流出する處を云ふ、火口內には數多の硫氣噴氣孔を有し、殊に湖の北畔に於て硫烟深く閉ぢて臭氣甚だし。

國の西部更に一條の山脈の走るを見る、即ち鳥海火山脈にして、岩木山は、その主峰なり、弘前の西四里の所に位し、美麗なる圓錐形をなし、山容大に富士に似たるを以て、津輕富士の名あり、巖木山、岩木山、鳥海山の三峰に分れ、巖木山は外輪山にして蒼時大噴火をなせしときの、外側壁

一部殘留せるものなり。岩木山は中央火口丘にして、海抜千五百八十八米に及び、山腹には爆發作用の爲に山體を破壞せられし爲、今も猶爆裂火口を認むるもの十數あり。

河流　岩木川はその山脈の麓に發し、八田甲山より發したる諸川を併せ、北流し十三潟より海に注ぐ。全長三十九里、國内第二の大河にして、その流域は津輕平野をなし、稻田十里遠く相連なりその地方特產の苹果の園點々相接す。農業の盛縣下及ぶなし。從つて名邑已に集まる。十三潟は風波の爲に土砂を吹き寄せ、流水を滯溜せしめて成れるもの、東西二里に足らず、南北一里に餘る。

馬淵川は岩手縣に發し、東北流して八戸より海に注ぐ。水流緩にして、河邊平地多く、全長十二里、河口八戸附近は鰯漁盛に水產の業全國に冠絶す。

北和田湖は周回十里、火口湖にして、火山噴火口に水の溜りしもの、湖岸屈曲に富み、俗に半個の灣ありと稱す。水色透徹四邊の翠色倒に影を映し、風景遙幽なり。

小河原沼は東方太平洋岸に橫りて、形南北に長く、四里に亘り、東西二里、周回十二里に及ぶ。七戸川之に注ぎ、東北隅より二里餘の氷路に通じ、海に通ず。小河原沼は風波の築造せる砂丘の内側に水の滯溜せしもの、かゝる種類の澤潮その海岸に多し。

平野　小河原沼附近の平野は、遠く馬淵川、奥入瀨川の流域と連なりて八戸の平野をなす。農業は津輕平野に比して遠く及ばず、一草野漠々などして三本木原の如きはなし。牧畜業盛に古來良馬を產す。

青森平野は東、南、西の三面全く山嶽丘陵に圍まれ、地積頗る狹く、弦月狀をなせど、農業盛に、頗る良田に富む。青森の市街その北緣に橫はる。

鐵道　日本鐵道奥羽線　岩手縣より來り八戸の西にある尻內を過ぎて、青森に至る、尻內より八戸を經てその東なる淺虫で八戸支線の通ずるあり。青森よりは更に官設奥羽北線により弘前を過ぎて秋田縣に入る。

都邑　**青森市**　青森灣邊にあり、日本本島の最北端に位し、青森縣廳の所在地なると、北海道の交通は多く此地に由り、航路亦平穩なるとを以て、旅客貨物の集散繁盛を極め、市街頗る賑ふ。人口三萬四千、地方官衙を始めとし、歩兵第五聯隊之にあり、海陸の要衝に當るを以て將來益繁華に赴くべきなり。

弘前　津輕平野の中央に位し、岩木川その北を流れ、四圍は豐饒なる農業地なれば、養蠶の業、苹果園藝の術盛なり、往昔津輕氏歷代の城地にして、人口三萬五千、第八師團司令部こゝにあり、步、騎、砲、工、輜重の各兵科駐屯す。津輕途はこの地の產なり。

十、津輕塗　元祿十年池田源兵衞の發明せしもの、數層の彩漆を塗重して自然に雲形の花紋を顯はすこと若狹塗に似たり、製品は家具、膳、火桶、煙草盆皆巧妙を極むれど價の廉ならざる爲め販路狹し産額二萬七千圓に過ぎず。[illegible]

研究上の注意

出前　[illegible]研究上の注意[illegible]

[illegible]準備[illegible]津輕塗。[illegible]

二、津輕海峽の軍用上重要なるを知らしめ、大湊水雷團の必要に及ぶべし。[illegible]

三、青森市の繁華なる所以を理解し、弘前市と都府根據の異なる所を比較しては、その都府範圍[illegible]を異にする所を明にし、何故に遠からざる兩地にかゝる大都邑の二個現出せるかに及び、更[illegible]に兩市將來の盛衰を想像すべきなり。

[illegible]

秋田縣

[illegible]

沿革

沿革　[illegible]羽後、羽前はもと出羽、明治元年十二月七日太政官布告を以て二國に分ちしもの、その沿革を叙するに併せ述ぶるを便とす。[illegible]和銅中、陸奥、越後を割て出羽を置き、國府を出羽郡井口に建つ、天平寳字中秋田城を築き、州の守介之を兼ね、秋田城介と云ふ、康平中州人清原武則陸奥守源頼義に從ひて安倍貞任を平げ、鎭守府將軍に任ず、寛治中其子武衡、從子家衡と共に、仙臺郡金澤に據て亂を作す、陸奥守義家舉て之を平げ、[illegible]理清衡を陸奥出羽の押領使とし、子孫世襲す、頼朝東征し、葛西清重を奥羽の奉行となし、その將小野寺、武藤三氏食邑[illegible]實朝[illegible]安達景盛をして州事を管せしめ、[illegible]北條貞時に滅さる。[illegible]建武中興葉室光顯國司となる、[illegible]氏反して光顯[illegible]と戰ひて敗死す、[illegible]氏[illegible]族[illegible]を山形に[illegible]之を最上氏と[illegible]、元中の初、伊達氏[illegible]置賜郡を取る、[illegible]八年[illegible]足利義滿[illegible]出羽を關東管領に隷す、戰國の世に及び秋田、最上、武藤、小野寺、諸氏逐鹿の巷となり、最上氏[illegible]頗盛なり、天正十八年豐臣氏東征、伊達氏の置賜郡を削りて蒲生氏郷に與へ、[illegible]で上杉景勝に與ふ、關ヶ原役後、羽後に主たる[illegible]の[illegible]氏あり、佐竹氏二十五萬石最も大、その他本莊に六郷氏、龜田に岩城氏、秋田新田に佐竹支藩あり、廢藩置縣の後、秋田縣の管轄となる。[illegible]

位置

位置　秋田縣は青森縣の南にありて、岩手縣とは脊梁山脈を以て背中合せをなして、日本海に臨み、南は山形縣、宮城縣に接す、縣廳を秋田市に置き、羽後の大部一市八郡(秋田市、雄勝(ヲカチ)、平鹿(ヒラカ)、仙北(センボク)、由利、河邊、山本、北秋田、南秋田)及び陸中の鹿角(カヅノ)郡を管す。[illegible]

地勢

地勢　地形長方形をなし、南北に長く、東西に短く、男鹿(ヲガ)半島の突出せる外、海岸單調なり、域内山嶽に富み、東部脊梁山脈には、那須火山脈の噴出多く、その西部には鳥海火山脈の走るあり。

中央脊梁山脈

中央脊梁山脈

[illegible]駒ヶ岳火山の噴出せるあり、岩手縣との境上に位し、那須火山脈に屬し、

山脈中央背梁

高さ二千五百九十五米に及び頂上に楕圓形の噴火口を有し、火口内に三ケの中央火口丘ありて、三十年前迄は濛烟の騰るを認めしと云ふ。駒ケ岳の麓には焼山火山あり、焼山の西に森吉火山あり。

鳥海火山脈　鳥海山

鳥海火山脈は陸奥の岩木山に起り、本縣の南境に鳥海火山を起すが、山容秀麗、峰頭雲を凌ぎ、何れも噴火口を具へ、昔時噴火の跡を示す。

鳥海火山脈

鳥海火山脈は陸奥の岩木山に起り、本縣の南境に鳥海火山を起すが、山容秀麗、峰頭雲を凌ぎ、何れも噴火口を具へ、昔時噴火の跡を示す。

能代川

能代川は秋田縣三河の一にして、鳥海山の東方に發し、西北流して本莊町を過ぎ、海に入る。沿岸は狹隘なる平地をなすが、御物川は源を縣の東南境に發し、院内銀山の鑛區に深谷を穿ちて東流し、秋田市の西を經て、土崎に至り海に注ぐ。流程三十五里、舟揖を通ずる三十餘里、御物平野はその川の流域にして、往時の湖底たりしが、その後湖水次第に乾涸し以て今日の平原を生ずるに至れり。土地頗る農業に適し稻粟相連なる沃實に秋田縣の主腦地なり。

河流　子吉川　御物川

河流は子吉川は秋田縣三河の一にして、鳥海山の東方に發し、西北流して本莊町を過ぎ、海に入る。沿岸は狹隘なる平地をなすが、御物川は源を縣の東南境に發し、院内銀山の鑛區に深谷を穿ちて東流し、秋田市の西を經て、土崎に至り海に注ぐ。流程三十五里、舟揖を通ずる三十餘里、御物平野はその川の流域にして、往時の湖底たりしが、その後湖水次第に乾涸し以て今日の平原を生ずるに至れり。土地頗る農業に適し稻粟相連なる沃實に秋田縣の主腦地なり。

院内銀山

院内の銀山は御物川の上流にあり、本邦屈指の銀産地にして、慶長十一年大谷吉隆の家臣、村山宗兵衛、關ケ原役に敗衂してその地に逃れて發見せしもの、今、古河氏の借區にして、金一萬七千八百九十四圓三十錢目に止る。

縣の北部の平野は即ち能代川の流域にして、御物平原に比すれば稍狹く、鹿角、大館、鷹巢、能代の盆地、相連なりて一聯の平地をなす、これ亦古代の湖底なり、能代川はこの平原を灌漑し、全長二十五里、河口に能代港あり、上流大館まで十二里舟揖の便あり、この地方は四方山嶽に圍まれたるに拘はらず、縣下屈指の繁華を來せるは、小坂、尾去澤、阿仁の鑛山あり、且つ森林の富は全國に比なく、能代川の水その材木を輸出して河口能代港に致し、更に東京その他各地に出

小坂鑛山

小坂鑛山は、文久元年の發見にかゝり、今は藤田組の借區するところ、金八千五百四十八圓、銀七百九十六貫、九百四十二匁、銅五百八萬四千七百六十四斤、合計百八十萬の巨額を產す、銅は海外に輸出し、金銀は之を大阪造幣局に販賣するもの多し、銅の鑛石は主として黃銅鑛、黃鐵鑛にして、足尾、別子と比肩して我國三大銅山の一なり。

尾去澤鑛山

尾去澤鑛山は慶長中の發堀にかゝはり、現今三菱合資會社の借區するところ、金千七百二十三圓、銀三百四十七匁、銀百五十八萬五千斤に及び、鑛石は主として黃銅鑛及び班銅鑛なり。

阿仁銅山

阿仁銅山は寬文十年の發堀にかゝり、今は古河氏の營業に屬す、金千百十匁、銀三百二十五匁、

銅百八十二萬四千餘斤を產す、銅の鑛石は主として黃銅鑛なり。

秋田縣は鑛物の富全國に冠たり、銅二千萬斤、價格四百萬圓を產し、我國銅產高の四分の一に相當し、銀も亦六千貫、價格八十萬圓を產し我國第三位に位す。

森林

本縣鑛物の富の名高きと共に林產の富之に下らず、能代川流域の森林は全國有數の茂林にして、農商務省の管理する國有林なり、杉を第一とし、柏、松、之に次ぐ。米の產額百十五萬石に上る、能代御物川平野の產する所なり、御物、能代兩河流域田地十萬町、畑地三萬五千石に及び、全國耕地の百分の二、六六に當る、秋田米の名ある、故あるなり。

八郎潟

八郎潟　東西三里、南北六里半、周回十五里、魚鰕の產多し、北方は一條の砂嘴によりて、日本海と隔てられ、西男鹿半島に對し、南方亦砂嘴を以て海と界せられ、船越の邊僅に海と通す。その潮もと男鹿島を前面に控え、日本海に開口せる一灣たりしも、御物、能代兩河が多年流出したりし土砂、風浪の爲に漂流堆積して帶狀の砂丘を生じ、以て外海と分離し今日の狀をなせるなり。

田澤湖

縣の東境に近く圓形の田澤湖あり、周回五里、火口湖なり、湖水清冽多く鱒魚を產す。

鐵道　奥羽北線　青森縣より來り、大館、能代、秋田市を經て、橫手驛に至り、奥羽南線山形縣より來り、院內を經て之に合し以て東西の連絡を全うす。

都邑
能代

都邑　**能代町**　能代河口にある、日本海運漕の要港なり、人口一萬一千、能代川の流域より、伐採する良林こゝに集まり、有名なる能代挽材會社あり、盛に東京その他各地に輸出す。春慶塗はこの地の特產物にして、漆を疊塗すること數十遍なれどその色淡黃よく木質を透見し得るを特色とす、工人の之を塗るに當り細塵の汚ずを恐れ、舟を十數里の海上に浮べ之が業に從ふ。

春慶塗の由來

春慶塗は飛驒の高山に興りしもの、靈元天皇の御宇飛驒の工人打山九三郞能代に來り之を傳へたりと云ふ、塗法一子相傳にして他人に傳へず、製造後三年を經されば販賣するを得されば產額少なく、價亦廉ならず、僅に一萬三千圓の產あるのみ。

秋田市
三三、二九四

秋田市　佐竹氏の居城たりし地、秋田縣廳の處在地なり、人口三萬三千、地方官衙皆こゝにあり、步兵第十七聯隊の衞戍地なり、物產は畝織、八丈、金銀細工、諸砂糖漬等あり、畝織は秋田織と稱し、黃八丈と共に秋田縣下の產物なり、秋田黃八丈の名天下に高く、染色の不褪と價格の低廉なるとは他にその比を見ず。

研究上の注意

研究上の注意

一、準備、秋田畝織、秋田黃八丈、春慶塗、銅鑛、銀鑛。

一、八郎潟生成の理を辨へ、以て河流の堆積作用の大なるを知るべし。

二、能代平野、御物平野の湖底たりし事實より、その肥沃の饒土たるを知らしめ、秋田米の產の

偶然ならざるを了解せよ。

三、春慶塗の振起せざる所以を例として、我國工業の多くは個人的家內工業に屬する弊を述べ、工業の振起は分業的團結によることを獲得すべし。

山形縣

沿革 羽前、羽後はもと一國。明治元年十二月、分割せしもの、關ヶ原役以前の事歷は、羽後の部に述べたれば、今は關ヶ原役以後の沿革を述べん。關ヶ原役、上杉景勝西軍に應じたりし爲め、會津百二十萬石を削られ、米澤三十萬石となる、後、十五萬石となり子孫相續す、最上義光は德川家康に應じたりしため、山形五十七萬石に封ぜられしが、元和中近江に徙され、山形を鳥居忠政に賜ふ、その他羽前に主たるもの、鶴岡に酒井忠勝、新庄に戸澤政盛、上の山に松平重忠、天童に織田信浮、長瀞に米津通政、米澤新田に上杉勝周あり、諸氏皆子孫相承けしが、山形のみは水野氏代て封を受く。明治維新、鶴岡藩を若松に徙し、長瀞藩を上總の大網に徙し、山形藩亦近江に移り、明治五年山形、置賜の二縣を置き、更に合併して山形縣を置く。

位置 山形縣は奥羽の西南部に位し、東及び南は山岳疊重をなして宮城、福島の二縣に接し、北は秋田縣に隣り、西は日本海に面し、一部は新潟縣に接す、縣廳を山形市に置きて、羽前の全部二市十郡（山形市、米澤市、東村山、西村山、南村山、北村山、最上、東置賜、西置賜、南置賜、東田川、西田川）及び羽後の飽海郡を管す。

地勢 脊梁山脈は國の東境を南北に走りて、高峻を極め、福島縣との境上にある藏王火山は、その著しきものなり、北境に鳥海火山脈の主峰鳥海火山あり、その脈更に南して月山となる、月山は湯殿、羽黒と共に羽前三山の一にして、北方鳥海山と相對峙せる消火山なり、海拔千九百五十九米、舊火山の跡明了ならざるも大噴火の遺跡を尋ぬるを得、頂上に一社殿あり、官幣中社月山神社あり、湯殿山は月山の西南山腹の一局部を稱するものにて、湯殿山神社あり、大巳貴命、少彦名命、大山祇神を祭り、國幣小社なり、靈驗顯著なる神社として奥羽地方の崇拜甚しく、白衣の行者の參拜する夥し、賽路頗る險峻にして、鐵階鐵鎖による所多しと云ふ。羽黒山は月山の北方にあり、月山湯殿山と共に三名山と稱せられ、山腹に羽黒山神社あり國幣小社にして、推古天皇元年の創建にして歷代の尊崇淺からざりしもの、高さ僅に三百六十米なり。縣の南境に飯豐山あり、高さ千八百八十米を有し、花崗石よりなり、群峰の間に蟠居して頗る雄大の姿あり、これ越後山脈の雄峯にして、その脈延きて國中を縱斷し、朝日嶽二千百四十四米の高峰を起し、以て鳥海火山脈に連なる、本縣には以上三條の山脈の外更に西方海岸に近く南北に

連亘する小山脈あり、湯澤山はこれが主峰なれど九百九十三米に過ぎず。西北には最上川南北に流れ、その下流日本海に瀕して庄内の平野あり、最上川中流の平原は米澤、山形、及び新庄の三平野に分つを得、皆二ケの盆地をなし、四圍山を繞らし南北に亘れる細長き帶をなす、今は最上川之を貫流すれど往時は湖底たりし所なり。

最上川は大日嶽の麓に發し、米澤、山形、新庄平原の水を集め、田地七萬四千丁、畑地三萬四千町歩を潤ほす、全國耕地の百分の三、一五に當る、流程五十里、上流は水勢急にして、本邦三急流の一なれど下流は幅廣く、水勢寛にして河口酒田港より三十里の間舟楫の便あり、沿岸亦奇勝に富む、流域地は肥沃にして穀物の産多く、養蠶亦頗る盛なり。

庄内平原は最上川の下流及び赤川の灌域にして、沃野遠く開け、産業よく興り、人口の密度縣下に冠たり。

赤川は源を南境に發し、最上川の下流と相合して、日本海に注ぐ、沿岸は即ち庄内の平原の中部にして、米の產額多し。

山形縣はかく平野多く、土地肥沃なる故、米產に於ては、奥羽第一にして、全年收穫高百三十萬石に及び、實に本邦第八位を占む。

平野　春梁山脈の西北には最上川中流の平原は米澤、山形、及び新庄の三平野に分つを得、皆二ケの盆地をなし、四圍山を繞らし南北に亘れる細長き帶をなす、今は最上川之を貫流すれど往時は湖底たりし所なり。

最上川　大日嶽の麓に發し、米澤、山形、新庄平原の水を集め、田地七萬四千丁、畑地三萬四千町歩を潤ほす、全國耕地の百分の三、一五に當る、流程五十里、上流は水勢急にして、本邦三急流の一なれど下流は幅廣く、水勢寛にして河口酒田港より三十里の間舟楫の便あり、沿岸亦奇勝に富む、流域地は肥沃にして穀物の産多く、養蠶亦頗る盛なり。

庄内平野　庄内平原は最上川の下流及び赤川の灌域にして、沃野遠く開け、産業よく興り、人口の密度縣下に冠たり。

赤川　赤川は源を南境に發し、最上川の下流と相合して、日本海に注ぐ、沿岸は即ち庄内の平原の中部にして、米の產額多し。

米產　山形縣はかく平野多く、土地肥沃なる故、米產に於ては、奥羽第一にして、全年收穫高百三十萬石に及び、實に本邦第八位を占む。

鐵道　福島縣より來れる官設奥羽南線、米澤山形を經て、秋田縣に入り院内町に通じ、更に延長して横手町にて北線と連絡せり。

都邑

米澤市　米澤平野の中央に位し、商工業の中心地をなす、人口三萬二千、上杉氏の舊城地にして、城址今猶存す、此地は米澤織の產地にして、機杼の響到る處に喧し。

米澤織は安永六年藩士鷹瀨彦助、藩主の命を奉じ絹糸織製造の業を開始せしが後京都より織工を聘し、藩の事業となせしより本邦に勃興せり、產額五十萬圓に及ぶ、福島縣下絹織物、總產額二百七十萬圓に次ぎ、奥羽地方第二の位置を占む。

幕末の名侯上杉鷹山は米澤の藩主なりき。

山形市　山形縣廳のある所にして、縣内第一の都會なり、人口三萬八千、山形平野の中央に位し、地方官衙を始めとし、歩兵第卅二聯隊の衛戍地なり。

鶴岡　豊饒なる庄内平野の中央にあり、人口二萬一千、縣内第三の都會なり。

酒田　酒田町は最上川口に位する一商港にして、人口三萬、維新前迄は出羽の輸出港として繁華なりしも、最上川の土砂を沈澱する多く、大船を泊せしひるに足らざれば、明治以後は頓にその盛況を減ず、されど日本海岸の一商港として、本縣の海岸は概して、單調平滑、出入に乏しく砂濱相連なる。

研究上の注意

一、準備、米澤總。

二、米澤、山形、新庄、平原の生成の理と、その盆地毎に一の中心地あるを說きて都會の發生を悟るべし。

三、酒田港衰退の狀を說きて、港に要する性質を合點すべし。

第三章　本州中部地方

總說

境界　本州中部地方とは本州の中央部を占めたる地方にして、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、(以上東海道)若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡、(北陸道)の十六國を云ひ、之を行政上より分けて、愛知、(尾張、三河)靜岡、(駿河、遠江、伊豆、七島を除き)山梨、(甲斐)岐阜、(美濃、飛驒)長野、(信濃)福井、(若狹、越前)石川、(加賀、能登)富山、(越中)新潟、(越後、佐渡)の九縣とす。

此の地方は北は一帶日本海に臨み、東は奥羽地方及び關東地方に接し、南は太平洋に瀕し、西は近畿地方に境す。

地勢　域内の地勢を大別して、中央高地、太平洋岸平地、日本海岸平地の三部となすことを得べし。

中央高地　此地は日本全體の地勢を作る所の崑崙山系、樺太山系、相會合するのみならず、富士帶火山脈南北に橫斷するを以て、地勢最も高峻に、土地も亦壯大なり、即美濃より飛驒信濃に亘りては全國中第一の高地にして、假に之を中央大高原と命名することを得べし、即富士帶火山脈の以西崑崙山系に屬する重なる山脈を擧ぐれば、西南に紀伊山脈は伊勢灣口に陷りて、三河國渥美半島となり、甲斐、信濃、駿河、遠江の間に蜿蜒して赤石山脈となる。木曾山脈は赤石山脈の西、天龍川を隔てゝ略南北に連亘す、飛驒高原は美濃の北部より飛驒及び信濃の西部に亘る日本第一の高原なり、中國山脈は西より來り、近江、越前の境を東に走り濃飛高原に連る、白山を盟主として西に連る火山脈を白山火山脈と云ふ。

富士帶火山脈は盟主富士山より北に延びて、信濃より越後の妙高山、燒山等に連り、富士山より南に走りては伊豆の天城山となり、太平洋に沒し、豆南諸島に顯る、即本州を南北に橫斷して北日本と南日本の結節點をなす、此の火山脈の東側には關東山脈ありて、甲斐、武藏の間に蟠り、那須火山脈は東より來り淺間山に連り、越後山脈は越後と上野、下野、との間を亘り、信濃の東

信濃飛驒の間を亘るの火山脈又は乘鞍火山脈又は飛驒山脈とも呼ぶもあり

那須火山脈は四に

走りて下野と岩代の境に駛走するを帝釋山脈、上野と信濃との境に超伏するを三國山脈とも云ひ共に富士帯に合す

北に於て富士帯と合す。寒風火山脈は遠く羽後の寒風山より來り、越後の西南部に於て富士帯に合す。

以上の如く中央高地には山岳重疊するを以て、河流は是より南北に分派して、北する者のは日本海に、南するものは太平洋に流入し、下流は何れも多少の平野ありて重要なる農産地なり。

太平洋に注ぐ河流には東に富士川、天龍川、大井川あり何れも山岳間を流るゝを以て急峻なり、木曾川は飛彈山脈と木曾山脈との間を刻して、美濃平野に出で伊勢に入る。

日本海に注ぐ河水には、東に日本第一の長流信濃川あり、西には神通川、庄川ありて共に飛彈より來り、越前には日野川あり。

太平洋岸平地

太平洋岸平地　域内の西南部木曾川下流の灌域は本邦第三の平野にして濃尾平原と云ひ、地味肥え、農產豐に、殊に尾張米の產地として有名なり。而して東方沿海にも狹小の平地を存す。

日本海岸地

日本海岸平地　越後には廣大なる平野ありて信濃川之を灌漑し、農產を以て有名に、殊に越後米の稱あり。其西越中及び加賀も稍々廣き平野ありて何れも米の產出尠からず。

沿海

沿海　太平洋岸は日本海に比して出入甚だ多く從て良灣佳港少からず。先づ東には伊豆の斗出ありて其尖端を石廊崎と云ひ、是より西方海上志摩に至る七十五里の間を遠江灘と云ふ風浪嶮なり。

又石廊崎と御前崎との間の灣入は駿河灣にして灣底に清水港あり、又西方には伊勢灣ありて、渥美志摩の兩半島斗出して、門戶をなす內に知多半島南出して三河灣を作り、灣內に武豐港あり。

日本海岸は出入少く、唯々八掌狀をなしたる能登の一斗出ありて、內に七尾港を抱く、是より東の海岸は概して單純なり、西方には若狹灣の凹入ありて、即ち日本海の佳港は此內に集めたるが如く、出入少からず、即東には敦賀の良港あり。(西は近畿の部を見るべし)

氣候

氣候

温度

氣候　氣候は地勢の爲めに左右せらるゝこと甚しく、殊に本區の如きは中央に高峻なる山脈蟠屈するを以て氣温、雨量、風向等に影響を及すこと尠からず。

温度　即ち中央山地と日本海岸と太平洋岸とによりて三區分することを得べし、太平洋岸の各地は概して氣候温暖なり、即ち夏は海風炎熱を一掃して清涼に、冬は黑潮暖流の影響を受けて寒氣甚しからず、且積雪少し、中央地方は地勢高隆なるを以て、氣候概ね寒冷なり、殊に夏季は甚だ短けれども、冬季は最も長し、即ち此地方三月の温度は九州の一月の温度よりも冷なり、即ち木曾山中は五月花咲き七月迄寒威料峭を覺へ九月麥熟するに至る。

日本海岸は南に山を負ひ北日本海に面し寒風吹掃するを以て太平洋岸に比すれば冬は寒冷にし

に夏は稍々冷涼なり、今重なる地の温度を表出して參考に資すべし。

日本海岸地方	全年平均	夏季平均	冬季平均
新潟	一二、五度	二五、七度	一、三度
伏木	一三、一	二五、九	二、七
輪島	一二、七	二四、五	三、〇
福井	一三、四	二五、九	二、五

中央高地	全年平均	夏季平均	冬季平均
甲府	一三、二度	二五、五度	一、一度
飯田	一一、六	二三、五	〇、二
長野	一〇、九	二四、一	一、七
松本	一〇、二	二三、九	二、五
高山	一〇、〇	二三、〇	二、八

太平洋岸地方	全年平均	夏季平均	冬季平均
長津呂	一六、一度	二五、四度	八、〇度
沼津	一五、〇	二五、八	五、〇
濱松	一五、〇	二六、〇	四、七
岐阜	一四、三	二六、五	二、九
名古屋	一四、五	二六、七	三、二

雨量 雨量は太平洋岸、日本海岸、中央高地によりて各々異り、日本海岸は本邦最多の雨量地に屬し、一千七百粍乃至二千五百粍に上る、次は太平洋岸にして千五百粍乃至二千粍に上る、中央高地は最も寡少にして僅に千粍内外に過ぎず、而して冬季北陸地方の雪の多きこと我が國第一にして、殊に越後の高田の如きは古來深雪を以て有名なり、今各地の雨量を左に記すべし。

日本海岸(全年雨量)	
新潟	一、七六一粍
伏木	二、一四七
輪島	二、〇五五
金澤	二、五一七
福井	二、三八八

中央高地(全年雨量)	
長野	九五八粍
松本	一、〇八六
飯田	一、七九三
高山	一、八七七
岐阜	二、〇二二

太平洋岸(全年雨量)	
長津呂	一、四六七粍
沼津	一、八五二
濱松	一、八四五
名古屋	一、六九九

雨量の斯く南北により異るは地勢と風向とによるものにして即南海岸は夏期雨量多く是れ此季節は南風温氣を齎らして中央山地以南に落下するを以てなり。北海岸は冬季を以て雨量最も多く此の季節は西北風の吹掃して日本海の水蒸氣を拉し來り中央山地の北方に衝突墜落せしむるによりてなり。

風向 風向は季節と位置とによりて異る、即、南方太平洋岸は夏季南風又は西南風多し、然れども全年の平均風向は靜岡以西は西北風多く、以東は東風最多なり、北方日本海沿岸地方は冬季は北風多きも全年の平均風向は却て西南風多しとす。

農産

産業 本區の太平洋岸及び日本海岸には大平野あり、特に濃尾平野及び越後平野は本邦中有名なる平野にして、土地肥沃、農産饒に、人民集居し、商業も亦盛なり、中央高地は氣候稍々寒冷にして、人口稀に土地磽确なるを以て農耕發達せず、從て農産多からざれども之に代はるべき養蠶及び林産あり、農産は濃尾平野及び越後平野は何れも日本一二の米の産地にして尾張米、越後米の名高し、其他米の産地として南方の靜岡、北方の富山、中央の長野、何れも百萬石以上の産出あり、愛知縣の麥も又多産なり、駿河遠江の茶は本邦中産額最も多し。

長野縣より山梨縣地方は土地桑楮に適し、養蠶甚だ盛にして繭、生糸の産額多く、長野縣の如きは本邦の第一位を占め、山梨[illegible]（繭の産は多からざるも生糸は多し）岐阜も尠からず。[illegible]

工産及水産

工業及木産　工業も各種の製出あり、織物、陶磁器、漆器、銅器等を最とし、即ち木綿織は愛知を以て、絹織は福井縣を以て何れも日本第一とす。陶磁器は愛知、岐阜何れも日本[illegible]を占め漆器は静岡、長野を最とす。[illegible]

水産物は太平洋岸の鰹（静岡、三重）日本海岸の烏賊（新潟、富山）特に名あり。[illegible]

鑛業

鑛産　新潟の金、銀、岐阜の銀は何れも名あり、其他甲斐の水晶、雨畑硯、伊豆の根府川石、三河の御影石、名倉砥、遠江の石油等は有名なり。

林産

林産　木曾の山林、伊豆の天城山は何れも巨木鬱蒼たり殊に木曾の五木（檜、椹、欅、樅、槇）は古來甚だ名あり。[illegible]

風向

風向　[illegible]

茶産額

全國約七百萬貫　静岡縣　百九十二萬貫　三重縣　四十七萬四千貫　京都府　四十七萬三千貫

[illegible]

繭産額

全國約　二百五十萬石　長野　四十二萬六千石　群馬　二十萬四千石　埼玉　二十萬四千石

福島　十九萬二千石　岐阜　十二萬四千石　愛知　十萬八千石

生糸産額

全國　二百五十萬貫　長野　四十九萬貫　群馬　三十四萬貫　山梨　十六萬貫

福島　十五萬貫　埼玉　十三萬貫

[illegible]

絹織

全國　六千九百萬圓　福井　千四百六十萬圓　京都　千三百三十萬圓　群馬　七百四十萬圓

石川　五百六十萬圓　富山　三百六十萬圓

[illegible]

木綿織

全國　四千九百萬圓　愛知　七百八十萬圓　大阪　七百十萬圓　和歌山　四百萬圓

埼玉　三百九十萬圓　愛媛　三百二十萬圓　京都　三百二十萬圓

[illegible]

陶磁器

全國　六百九十萬圓　愛知　二百四十萬圓　岐阜　百二十萬圓　京都　五十三萬圓

佐賀　四十九萬圓　石川　二十一萬圓　岡山　二十一萬圓

[illegible]

漆器

全國　五百八十萬圓　和歌山　[illegible]百萬圓　石川　六十八萬圓　静岡　五十五萬圓

京都　三十八萬圓　長野　二十六萬圓

地理研究者の注意

地理研究者の注意

一、太平洋岸、中央高地、日本海岸の三面、各々地勢を異にし従て、是れが氣候、産物、民質等に及す影響に注意すべし。[illegible]

二、太平洋岸と、日本海岸とが人文の發達を異にするは如何なる理由によるかを研究すべし。

三、本區は東に東京横濱、西に京都大阪を控へ、總べて東西兩大都の影響を被ること注意すべし。

靜岡縣

沿革

沿革　遠江國は鎌倉時代に於て、安田義定守護を以て國守に任じ、建武中興足利直義を以て守護とす、直義國に就かず、成良親王を輔けて鎌倉に居り、尊氏と共に反す、延元元年井伊道政、宗良親王を奥山城に奉じ、後井伊谷城に移る、州人叛して多く尊氏に應ず、是れに於て、尊氏其將今川範國を守護とし、子孫世襲し、永正の頃、今川氏親盡く本州を從へ、三河駿河をも併有す、永錄の末武田晴信、駿河を取り氏直は（氏親の孫）出奔し、本國遂に德川氏に歸す、家康江戸に移るに至り、豐臣氏堀尾吉晴を濱松に、山内一豐を掛川に有馬豐氏を横須賀に封す、關ヶ原役後、三氏を移封し、德川氏松平忠頼を濱松に、松平定勝を掛川に、松平忠政を横須賀に封す、慶長十四年、三藩を徙して德川頼宣を封す、元和五年、紀伊に頼宣を移し、又三藩を置き、寛永九年井上正就に横須賀を、青山幸成に掛川を賜ふ、寛曆年中田沼意次を相良に封じ、濱松を併せて都て四藩、王政維新後靜岡藩に屬し、別に一藩を立て、堀江と云ふ、既にして改めて縣となし、又廢して濱松縣を置き、明治九年濱松縣を廢し、靜岡縣に併す。

駿河國

駿河國は頼朝、幕府を鎌倉に開くの後、源廣綱（三浦義村等守護を以て國守を兼ね、正平六年足利氏今川範國を以て守護とし、府中に治す、入世義元に至り、勢強大、尾張に入り、織田信長と戰つて敗死す、子氏眞嗣ぎ、國人離叛す、永錄の末、武田晴信當國を奪ふ、子勝頼に至り織田氏に亡ぼさる、國織田氏に歸し、家康即府中城に居る、天正十八年豐臣氏之を關東に移し、中村一氏を當國に封じ、後ち德川頼宣、同忠長相繼で此地に封せられ、寛永九年忠長罪ありて國除せられ、城代を府中に置き、士隊及び騎歩卒を置きて之を戍らしめ、松平忠重を田中に、松平信治を小島に、水野忠友を沼津に封じ、戊辰の亂後、三氏を安房上總に徙して、德川家達を當國に封じ、府中を改めて靜岡と云ひ、後靜岡縣を置く。

伊豆國

伊豆國は鎌倉の時は山名義範を以て守護となし、足利基氏、其家臣上杉憲顯を以て守護となす、延德中に至り、北條長氏の有に歸す、天正十八年、豐臣秀吉北條氏を亡す、是に於て地德川氏に歸し、内藤信成を韮山に、戸田忠次を下田に封じ、其餘の地は洲人江川英長を以て代官となし、郡政を統べしむ、既にして戸田氏、内藤氏共に封を轉じ、江川氏韮山に居り、代々代官たり、大島、八丈の諸島を兼知す、明治維新後韮山縣を置き、廢して足柄縣より兼治し、尋て靜岡縣の管轄となる。

位置

地勢

沿海

天龍川

位置　本縣は神奈川縣の西南に連り、東北には富士の秀峯聳えて、山梨縣と背中合せをなし、南部は太平洋に瀕し、西愛知縣に連れり。其管轄は駿河全國（靜岡市、駿東、富士、廬原（イホハラ）、安倍、志太の一市五郡）遠江全國（榛原（ハイバラ）、小笠、周智、磐田、濱田、引佐（イナサ）の六郡）伊豆の二郡（賀茂、田方）とす。

地勢　駿河の北境には、我が國第一の高山、富嶽の高く聳ゆるあり、所謂富士滯火山脈となりて、東南に亘り、愛鷹（アシタカ）山、箱根山彙、及び伊豆の斗出となりて、太平洋に沒す。遠江には赤石山脈の蟠屈するあり、一派は南方に延びて、小夜中山（サヨノナカヤマ）峠となり、遂に御前崎（オマエザキ）に沒す。一派は西南に走りて、遠、參の境を亘り、渥美半島となる。

本縣の南方太平洋岸は駿河灣の大灣入ありて、伊豆と御前崎とに擁せられ、灣の北邊は、砂白く松樹鬱として風光明媚の勝地多く、就中田子浦、三保の松原等あり、灣の東岸（伊豆）は危崖絶壁にして、船を寄すべきの所なく、西岸は砂濱遠く連り又良灣なし、遠江の海岸も亦出入少く、唯濱名湖の口あるのみ、伊豆の東岸も懸崖險絶なり。

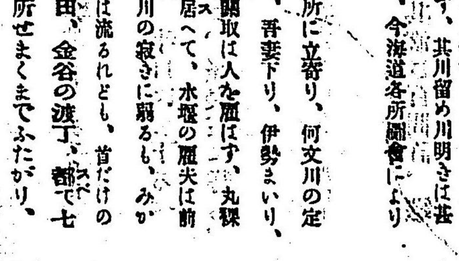
天龍川　遠江以北の如く北方に山脈蜿蜒屈曲するを以て、二南方に傾斜し、河流はすべて南下す、即天龍川、大井川、富士川は本縣の三大川とす、天龍川は信濃諏訪湖に發し、遠江を南に貫き、掛塚に至りて海に注ぐ、流程六十里、幅八町に達する所あり、下流の鐵橋は東海道第一の長橋なり、此河は信濃の南部に通ずる交通路なり。

天龍川の幅さ信濃國の部にて二町四十間、袖浦村より、周智郡奥山村まで三十五里の間舟拵の渡あり、鐵橋の長さ八百間と

大井川　は甲斐國白根山（シラネ）に發し、幾多の澗水溪流を合せ、遠、駿の國境より南流して駿河灣に注ぐ、流程四十六里、吐口の濶さ十八町に達す、平時は水量少く、一たび雨降れば洪水汎濫の憂あり。

此河は舊時代には架橋、渡船を禁ぜられしを以て、人馬皆徒渉せざる可らず、而も其河流に水脈數條となく分れ、深淺群に出し難きを以て、往來の人必人足（ニンソク）（川越と稱す）を雇ひ、或は蓬籠に駕り、或は肩背に負はれて徒渉す、其人足は島田、金谷の兩驛に川會所（問屋又庄屋とも云ふ）ありて之を支配し、洪水には一切之を抑止す、其川留め川明きは甚だ殿重にして、毎に駿府代官の出張陣屋（島田）並に江戸道中奉行に報告す、今海道各所關會により徒渉の一般を記せば。

此大井川古より舟なく、橋なうして、往來の人は島田金谷の川越所に立寄り、何文川の定かを聞て其賃を渡し、御符を制つて渡丁（ワタシモリ）に授さしむ、交易の實入、京登り、吾妻下り、伊勢まいり、富士詣など、八人懸りの輿に乘せられ、又は肩車にて渉るもあり、相撲の關取は人を雇はず、丸裸に成て土俵入の如くわたるもあり、刎相の雲客、列國の諸侯は、駕を輿に居（ス）へて、水壓の厲失は前後を圍ひ、急流に足を揃へ、肱を合て渉す、渡丁は紅葉散り水落ちて、冬川の寂きに嗣るも、みかさ増す夏川を賃に入れ、かしかりの沙汰、羅山子のいへる如く、已が草の月は流れども、首だけの借錢をなして、五月雨の水に威を增し、下り酒の盃を解て宴するとぞ、島田、金谷の渡丁、都（スベ）て七百人なり、霖雨降り止まずして、水量ましぬれば、河止とて東西の驛中、所せまくまでふたがり、



大井川

昔の大井川渡しの狀態

昔の大井川

架橋は明治十五年に成る、川船も亦あり

一驛に宿も後へ戻りて、水の落るを待もあり云々

然るに今や、星移り物變り、鐵道架橋（明治二十二年）成りて『文明鈴澤君知否、鐵車飛渡大井川』の感を催さしむ、從て島田、金谷の兩驛は實に蕭寂として昔の繁華の面影だになし。

富士川

富士川　は甲斐國より來り、鰍澤（カジカザハ）より舟楫の便ありて、岩淵まで里程十八里、半日にて下るべし、赤石山脈と富士帶との間を駛流するを以て、傾斜極めて急激なるのみならず、怪巖右に聳ち、奇岩左に立ちて、流勢奔駛、實に本邦三急流の一に背かず、全長四十里とす。

此河始めは舟楫の利なかりしが、慶長十二年（皇紀二二六七年）角倉了以命を奉じて船制を定め、淺瀬を深ひしにより、舟楫上下すべし、當初船の初めて甲斐國に溯るや、土人驚て『船ならで水を行くは』と絶叫せり。

濱名湖

今切の變遷は古來甚だ多く、應永十二年、文明七年、明應七年、永正七年及八年の數あり。近くは寶永元年にも湖口の破壞あり

濱名湖　遠江にあり、面積五方里、南方太平洋に通ずる湖口を今切と云ふ、其濶さ百間許、鐵道其上を走り、風光清絶にして、却て琵琶湖邊を汽車窓より眺むるに優る數等なり。

往古は純然たる淡水湖なりしが明應七年（皇紀二一五八）八月海嘯のため、湖堤破れて海と通ず、湖内は漁船往來す、昔は所謂遠（トホツアフミ）淡海之滋賀の淡海（アフミ）に對して遠近の稱を立て、遂に國名の起因となるに至れり。

今切の西方新井（アラヰ）町は東海道の關津にして衛戍ありたりき、これ此の湖口新井、舞坂の一里舟にて渡らざる可らざる要關なり、而して湖口波荒く、渡航危險なりしかど、港口に水刎ねの大杭を打ち、沙除け蛇籠を沈め、其後稍々安泰となり『荒も舞坂天氣も靜、名のみ荒井の船渡し』と云ふに到る。

鐵道東海道鐵道

鐵道　**東海道鐵道線**　（官設）は足柄、富士の間を越へて幾多の隧道を通じ、御殿場に出で、三島、沼津、靜岡を經、大井川、天龍川を渡り、濱松を過ぎ、愛知縣に入る。

豆相鐵道

豆相鐵道線　三島より南、大仁（オーヒト）に通ず。

富士山

富士山　は新高山を除けば我が國第一の高山にして、海拔一萬二千四百六十七尺に聳へ、甲斐駿河の兩國に跨り、駿河の方を表（オモテ）富士、甲斐の方を裏富士と云ふ、形狀恰も白扇を倒にするが如く近國十三州より仰望すべし、山頂には周圍一里餘、直徑六百米、深百六十七米の一大噴火口あり、（之を御內陣と云ふ）坑底には直に萬古の雪を貯へ、又電柱の如き氷柱は坑內側に垂下し、實に偉觀なり、坑の周圍に八峰あり、就中劍峯最も峭拔を極め、山頂の平地より聳出、四百尺、最高點なり、岩質堅硬にして劒刀に代へ得べきを以て、此名あり、其北に馬脊嶽、雷電嶽、又北に聯りて釋迦岳、藥師岳あり、南に觀音岳、經嶽、駒嶽、等の三峯峙ち、此八峯は環狀の如く、之を蓮華の八葉に比し、芙蓉峯の名あり、嶽頂より展望すれば、十三州の山河湖沼は悉く眼底に映じ來り、眺望偉觀、眞に天下無比なり、到底富士山頭の絶景は登臨せし人に非ずんば共に語る可らざるなり。

富士山は我が國民の模表

宜なる哉此山は古來我が國民の模表となり、即海拔實に一萬二千尺、雲霧は其裾に迷ひ、風雷は其腰に轟き、仰で以て形勢の雄大に驚き、登臨して以て宇宙を小とするに足るものは、如何に國

民の氣象をして雄大ならしむべきか、其形は崇高なる圓錐狀をなして、八朶の芙蓉天空に秀でたる、皓々たる白雲は其巓を擁し、蒼々たる綠樹は其麓を綾どり、之れを仰げば貧夫も廉に、懦夫も起たしむるに足るものは、如何に國民の心情をして高潔ならしむにあらずや、若し夫れ拂曉劍峯に杖を立て曙色太平洋を破りて熾ゆるが如き旭日昇り、薄暮大神を放つや唯々蒼茫として曠野古巨海とを莽せず、實に人をして乾坤の不可測を嘆せしむ、且又絶巓の西側に逍遙せんか、嶽西を綠繞する雲霧の間、嶽麓の太平原若くば太平洋水に、富士の反影を分明に認め、所謂影富士の溥絶奇絶なるを望みては、其造化の變幻靈妙なるに驚き、如何に國民の壯美的感想を養ふに足るべきか、而して古往今來詩に咏じ、歌に逃べ、或は繪畫に文章に、敬虔の念慮を以て此山に望み、景慕の心意を以て此山を仰ぎたるか、赤人は之を仰ぎ。(見よ)

天地のわかれし時ゆ神さびて、高く尊き、駿河なる、不盡の高根を、天の原ふりさけ見れば、わたる日の影もかくろひ、照る月の光も見えず、白雲もえ行きはゞかり、ときしくぞ、雪はふりける、かたりつぎ、言ひ繼ぎゆかむ、富士の高嶺は。

田子の浦ゆうち出で、見れば眞白にぞ、

富士の高嶺に雪はふりけり。

石川丈山は、

[illegible]仙客來遊雲外嶺、神龍栖老洞中淵、
雪如紈素烟如柄、白扇倒懸東海天、

應擧は變幻極りなき百富士を畫き、藤田東湖は
[illegible]天地正大氣、[illegible]粹然鍾神州、[illegible]
[illegible]秀爲富士嶽、[illegible]巍々聳千秋、[illegible]
[illegible]富[illegible]士[illegible]山[illegible]
[illegible]天津御空に聳へたつ[illegible]富士の高嶺を仰ぎ見よ。　我國民の類ひなき
[illegible]尊き姿かれてそは。[illegible]雪にかゞやく朝日影[illegible]村雲はらふ夕嵐[illegible]
[illegible]御國を守る兵士よ[illegible]いざ[illegible]ならへおの山に[illegible]
[illegible]景仰す[illegible]若し夫れ此山に對する讃美歌を集め來らば尨然大冊をなすべし[illegible]以て此の富嶽が如何に國民の性格に感化を與へたるかを知るべし[illegible]

[illegible]登山路は[illegible]あり[illegible]御殿場口(東口、東海道御殿場驛にて下車)[illegible]須走口(御東口、御殿場の西北)三、大宮口(表口)[illegible]東海道鈴川驛にて下車)四、須山口(南口、東海道佐野驛にて下車)五、吉田口(北口、甲州)あり[illegible]近年登山者多く[illegible]從來は富士講信徒多かりしかど、近時は學術研究的登山、若くは、探勝家の數甚だ增加せり、此の山がたゞに火山として研究すべきもののみならず、植物帶の變化及び溫度の昇降、氣壓の上下等の高山氣象を調査することを得、即植物帶には杉、富士松、[illegible]灌木、[illegible]苔等を見、溫度は漸次下降して、遂に萬古の雪を戴し、氣壓は中熱數、呼吸逼迫、頭痛等々等を實驗することを得べ

[illegible]し。[illegible]

都會　沼津
三島町
三島神社の祭神
韮山
幕末の卓見の士江川太郎左衛門
修善寺

[illegible]富士の裾野を繞りて富士八湖あり、富士沼、山中湖、川口湖、西湖、精進湖、本栖湖、四尾連湖、瀧湖、即是れなり。[illegible]

都會　沼津町　[illegible]駿河國東部の一小都會にして、狩野川に跨り、海陸の便共によし、氣候溫和に、風光佳なるを以て、避暑地として名あり。

三島町　は人口一萬、古は箱根下の名邑として知られ、[illegible]豆州第一の都會にして、官幣大社三島神社あり。

近年鐵道足柄を通ぜしより、市況頓に衰へたるが、最近又豆相鐵道の通路となりしを以て[illegible]形勢一變す、三島神社の祭神は明治五年宮社より敎部省(上申せしものには事代主神と改定せるも、大山祇神(伊弉諾神の子にして瓊々杵尊の妃なる木花咲耶姫の父)なるべしと云ふ。[illegible]

箱根の登路は[illegible]三島より東北に上る凡三里半にして箱根峠に達す。[illegible]

[illegible]はこねやま箱かくも人のゐも人　　蜀山人

韮山　[illegible]三島の南方にあり、此處は後北條氏の祖、伊勢長氏が屈起したりし地[illegible]當時こゝに堀越御所ありて[illegible]足利政知據て東國を治せしが[illegible]其子茶々丸父を恨みて之を弑するに及び、長氏起つて亂を平げ、遂に伊豆相模を掩有せしなり。

此韮山の代官[illegible]江川太郎左衛門とて幕末卓見の士、大砲を鑄造せし[illegible]反射爐の遺跡存すと云ふ。

修善寺　は源頼家幽囚せられし地にして、又有名なる溫泉あり、頼家及び範頼の墓も此處に

下田港 熱海 間歇泉噴出の狀態 田子浦 昔の田子の浦 清水港

下田港は伊豆の東南隅にあり。黒船渡來を以て名あり。此れより幕府は下田奉行を置きて、一旦開港せしが横濱開港後閉鎖せり。

熱海は三島の東にあり。温泉を以て名高く、殊に大湯と稱するものは間歇泉にして、晝夜六回噴出す。此地は北、西、南の三面は山を負ひ、東一帶海に面し、暖流に洗はれ、避暑、避寒地として好適なり。

熱海と小田原國府津間には人車鐵道あり又汽船下田熱海國府津間を日々往復す

間歇泉は湯池疊石の間に縱凡五寸、濶一尺許の涌口あり、熱湯と蒸氣とを交互に噴出す、初沸騰の聲地底に起り、宛然轟雷の如く、漸々熱泉を噴出し、勢甚だ盛なり、小頃にして勢漸く減じ、次で蒸氣を噴出し、地底又轟鳴忽にして沸烟四方に漲漫し、咫尺を辨ぜず、已にして蒸氣衰へ、再び熱湯を吐き而して後蒸氣となる、斯の如きこと、約一時間半にして、舊態に復す、晝夜凡五回、是れ定期噴出なり、時ありて長涌と稱し、三旬中凡一回、十二時間噴出し、又十二時間噴出を止む。

田子浦とは富士川の吐口、東岸一帶の海濱を稱す、北には富峰の白玲瓏たるを負ひ、西は遙に三保の勝景を眺め、南は雲烟渺漠の太平洋に連り、風光實に明媚なり。

早乙女や田子に植こむ富士の影。

田子浦とは元富士川の吐口西岸吹上の濱海を稱したるが何の世よりか富士郡吉原の南方を呼ぶに至れり。

清水港は静岡市の東方にあり、開港場の一にして、東海に於て屈指の港灣とす、海陸の運輸至便にして、商船軍艦常に寄泊す。

港界は、眞崎より西北に引きたる一線内とす、錨地は海岸附近は淺けれども、急に深くして、九尋又は十一尋に及び、底質は多く泥より成る、朔望高潮六呎八分、大潮昇六呎四分の三、外國輸出品の主要なるものは製茶、椎茸にして、輸入品は砂糖、洋酒、鑛種石油、洋紙、綿糸、織物、麥粉、洋釘等なり。內國輸出品は、米、麥、大豆、小豆、鹽、茶、椎茸、砂糖、魚類、薬種等にして、輸入品は、米、麥、大豆、小豆、鹽、砂糖、酒、醬油、鮭、肥料、石炭等なり。

三保松浦 静岡市 久能山

三保松原は清水港の南十數町の地より東南に斗出する一里許の砂嘴にして、松林滿洲、桃樹之に交り、濤聲松韻相和し、其地實に凡境にあらざるなり。

松の上ゆく月を見るかな。（新古今）

静岡市は元駿府と稱し、徳川家康退隱の地にして、東海道の要衝を占め、縣廳所在地にして、人口四萬に上る、各種の工業盛にして、竹細工、漆器、製茶の業甚だ盛なり。遼陽の大激戰に驍名を天下に轟かしたる第三十四聯隊は此地に駐在す、市街繁盛にして、人口

名譽の戰死をなしたる大佐關谷銘次郎氏は其聯隊長たりき、此の關谷聯隊は右翼軍の右翼たる大島師團（義昌）の下にあり。

久能山は市の東にあり、徳川家康を葬りたる地にして、公を祀れる東照宮あり、社殿壯麗なり、山上より眺望すれば三保松原、清見潟、清見寺一眸に收まり風光實に佳なり。

静岡市の竹細工は、日常必需の器具及び裝飾品を作り、堅牢にして精巧、頗る外人の意に適し、北米、獨、佛等に輸出せらる、

竹細工 漆器

[illegible]の如きは、此地の特產として外人に賞玩せられ、近來は又製紙漆器を發明し、輸出少からず。

濱松

濱松は濱名湖の東、天龍川との間にあり、遠州第一の都會にして、近く江海を控え、東海道の[illegible]なるを以て、古來の名邑なり、人口約二萬、茶を產出す。

八幡山 三方原の古戰場

濱松の西北三方原は元龜三年、十月德川家康及び武田信玄の古戰場なり、此地にて家康大に信玄に破られ濱松に逃げ歸る。

新居 濱名湖口の西、新居には德川時代に關所を設け湖北の氣賀と相俟つて行人を警戒せし所なり。

產物 農產

產物

農產　大井川の下流流域は牧野原と稱し、地味肥沃に米產あれども、殊に有名なるは茶樹多く「駿河路や花橘も茶の香ひ」(芭蕉)とは實に其眞景にして、縣下の全產額は百九十萬貫、我が國第一なり其製造は多く外國向にして稍々澁味を帶び砂糖を加味すべし其大部分は橫濱神戶より合衆國及びカナダに輸出す。[illegible]

靜岡市

富士製紙會社

富士裾野及び富士川の流域には三椏を栽培する甚だ多く、駿河半紙の原料となる、又大宮附近には富士製紙會社あり、水力を利用して器械を運轉し、又近傍の樅を原料とし、盛に洋紙を製す、新聞紙及び洋書等の用紙は多く此地より出し、其產額は日本第一なり。

林產

林產　本縣下は樹木繁茂し、東京及大阪地方に輸送するもの尠からず、即ち大井川及び富士川によりて流下するもの多しと雖も、殊に盛なるものは天城山の森林にして、我が國稀有の大山林とす、德川幕府は松、檜、杉、樅、樺、栂、椹、花柏を七木と稱し、濫伐を禁せり、明治七年良材を採伐し、初めて軍艦を作り、十一年竣功す、名けて天城と云ふ。

海產

海產　本縣は海岸線延長せるのみならず、東に東京、橫濱、西に名古屋等の好市場を有するを以て、漁業盛なり鰹、鯖、烏賊等の漁獲少からず又興津近海には鯛の利少からず。[illegible]

鑛產

鑛產　伊豆の石材は甚だ有名にして東京地方に輸送せられ遠江には石油を產す。[illegible]

研究上の注意

研究上の注意

[illegible]

富士山は東洋第一の名山として其の山容の崇高、優美は古來我が邦人の思想感情に偉大なる感化、即高尚と、純潔と、審美心とを涵養せること尠からず。[illegible]

富士山の氣象の變化、植物帶の變化、及び火山の狀態につき研究すべし。

本縣の生產力は製茶、製糸等におることに注意すべし。[illegible]

新聞紙及び書籍の原紙と富士製紙會社等との關係を知るべし。[illegible]

位置

[illegible]

山梨縣

沿革

沿革　甲斐國は古來國府を八代郡(今の西山梨郡)に置き、鎌倉の時武田信義をして當國及び駿河を管せしめ後其子信光を守護とし、八世信滿に至る、信滿足利持氏に譴責せらるゝや、巨摩の逸見有直、持氏の命を矯めて信滿を殺し、當國を奪ふ、既にして足利義持、信滿の子信元

管國に封じ、五世の孫信虎、躑躅ヶ崎（今の古府中）に移る、其子晴信雄武にして大に四隣を併呑し、天下の強國たりしが、其の子勝頼に至り、織田氏の爲めに亡さる。後織田氏、徳川氏相尋で之を領し、徳川の關東に移るや、加藤、淺野の二氏此地に封せらる。後家康其子義直を封ず。其後四世將軍家綱、弟綱重を封じ、幾くもなくして綱重罪ありて死を賜ふ。其後柳澤吉保、一旦茲に封せられたるが、尋で大和の郡山に徙封し、徳川氏の直轄とし、城番を置きて之を治す。

位置

位置 本縣は靜岡縣の北にあり、東は神奈川縣、東京府、埼玉縣に連り、北及び西は長野縣に包まる。其管轄は甲斐全國（甲府市、東山梨、西山梨、東八代、西八代、南巨摩、中巨摩、北巨摩、南都留、北都留）一市九郡とす。

地勢

地勢 國名の示すが如く、一國一大峡（かひ）をなす。即南には富士山の高峯雲霄を摩し、其脈北に峙ちて八ヶ岳となり、遂に信濃に入り、西には赤石山脈南北に蜿蜒して駒ヶ岳、七面山に至る墻壁の如く、東には關東山脈ありて甲武信嶽、雲取山、小佛峠等起伏して、武藏と隔絶せらる、斯く、高峰、峻嶺四周を繞りて、中央には擂鉢狀の低凹なる盆地あり、故に國境の水は集りて富士川となりて南流す。此の平原を甲府平原と稱す。平原の東には關東山脈の支脈たる天目山、笹子峠、御坂峠等一帶の山脈ありて、是より以東縣界まで一境を作る。此處郡内と云ひて河流は桂川に集り、東行し馬入川となる。

甲斐の國名の起因と土地の生因

甲斐（カヒ）は峡の義にして、其國山の峡にあるが故に斯の名あるならん。而して底凹なる盆地は是れ地層陷落によりて成るものにしてもと湖水をなす、其西南に向ひ富士川の奔流するは一縱谷をなして、所謂地溝帶なり。

富士川

富士川 は笛吹（國師岳東麓に發す）荒川（仝上の西麓）釜無（八ヶ岳駒ヶ岳）三川を入れ南流して、鰍澤に至り、是れより富士川下りの船に乘り、駿州岩淵まで十八里寸數時間に下るべし。（詳細は駿河富士川の部參照）

天目山

天目山 は關東山脈の別派に屬し、南に延びては笹子峠となり、此嶺下を鐵道通過し、海内第一の隧道を穿てり。

天目山にて武田氏亡ぶ

天目山は武田勝頼滅亡の地として、名高く天正十年織田徳川の兵に攻められ、勝頼、駒飼（天目山の西南）にて小山田信義に欺かれて、轉じて天目山に入らんとし、及ばずして遂に田野の民家に自殺す。（實は武田氏の亡びしは天目山にあらずして其附近なり）

笹子峠

笹子峠 は山深く道險にして、東京より甲府に入るの人先づ其の幽邃と險絶とに驚かざるなし、今は其嶺下に日本第一の隧道其長さ一萬五千四百七十五尺を穿ち官鐵中央線通せり。

世界最長の隧道は、アルプス山を穿ち瑞西より伊太利に通ずるものにして、其長さ六萬〇四百三十九尺、シムプロンと云ひ、同じく其次にあり、タルドと云ひ、長さ四萬九千二百十尺なり。前者は笹子隧道の四倍、後者は三倍なり。

郡内

郡内 は天目山、笹子峠の以東の一境の總稱にして、桑樹を栽培して、養蠶の業盛に、從て織物を以て有名に、郡内絹の産出多し。

富士山の麓には湖水多く、最も大なるものを河口湖（周圍四里十八町）山中湖（周圍二里十八町）と

郡内　[illegible]

（郡内）

鐵道　**官線中央線**は八王子より起り小佛峠を過ぎて本縣に入り、郡内地方を經て、猿橋驛を過ぎ笹子峠を穿ち、甲府に入り、現今は岡谷まで開通す、此鐵道は信濃、諏訪湖の附近に出で、鹽尻に達し、茲に篠井線に接續し、又名古屋より來る中央西線と連絡する豫定なり、而して隧道の多きこと海内無双なり、八王子、甲府間の隧道の數四十二あり、就中八千三百四十五呎の小佛峠の隧道及び前記の笹子隧道あり、隧道の線延長に三十四の橋梁の總延長とを合すれば、全線五十三哩中其四分の一を占む、列車の後部第一隧道を出ざるに、前部は直に第二の隧道に入るも亦一奇觀なり。

（鐵道、中央線）（隧道多きこと日本第一なり）

都會　**甲府市**　國の中央甲府平原の中心に建ち、西には荒川を帶び、生糸、繭、葡萄、織物等を多產するのみならず、一國一都會の觀あるを以て百貨集散活潑に、市况殷賑なり、山梨縣廳所在地にして、人口三萬三千、市の東南に公園あり北方に甲府城址あり。

（都會甲府市）

乾坤戰伐鬪雄處、控帶河山一水西、南蜿蜒峽嶋峰東北遥、中天風雪夜揚鼓、曉疑旗影懸、蓋世英雄蹤可弔、蒼々古色鎖寒烟。（岡本迪）

甲府城は一に舞鶴城と稱す、文祿三年淺野長政秀吉よりこゝに封せられて、築きし處なり。

甲府の東里垣打村に、酒折宮あり、日本武尊を祀る、昔尊東夷征代の歸途こゝに、滯在し給ひ『新治筑波をすぎて幾夜かねつる』燭を取る者『かゝなへば夜には九夜日には十日を』と我朝連歌の始をなし玉ひし古蹟とぞ。[illegible]

（酒折宮の跡）

勝沼　甲府の東（四里）にある一都會にして附近葡萄の産出を以て有名なり、多く東京に輸送す、又葡萄酒を醸造す。

鵑龍葉葉水晶光、亦見甘醴生計忙、暫著遨遊汗漫客、葡萄架下飲秋凉。（正増道所）

（勝沼）

鰍澤　富士川の上流に位し、甲府より馬車鐵道の便あり、此處より富士川下りの便船を發す。

山川は小石流れてころ〳〵と、かちか喧なり水の落合　[illegible]

（富士川の項參看）

（鰍澤）

身延山　富士川の西岸にあり、即久遠寺の在る處にして、老杉鬱蒼、幽邃靜絕なり、日蓮宗の總本山にして、伽藍の壯大、宏壯を極む。

日蓮文永十一年此の山中に入り一寺を建つ、爾後門徒仰で祖山と云ひ、甲州の名跡なり。[illegible]

（身延山）

猿橋驛　甲州街道の一驛にして、商業稍々繁昌す、桂川に臨み、猿橋の奇橋を以て有名なり。

猿橋は高さ十六間長さ十七間幅二丈無く橋下一本の柱なし。[illegible]

（猿橋驛）

産物　**農産及工産**　甲府平原は土地肥沃、桑楮の栽培に適するを以て、養蠶業甚だ盛に、從て生糸、絹織物の產出多し、生糸の製出は甲府尤も盛なり、縣下一ヶ年の產額十五萬七千貫にし

（産物農産及工産）

て日本第三位に上る。

故に絹織物盛にして、甲斐絹、郡内織等何れも名あり。

葡萄も亦本縣の特産にして、勝沼は其産出の中心たり。

生糸の産額

全國	二百五十五萬貫	一、長野	四十九萬貫
二、群馬	三十四萬貫	三、山梨	十五萬七千貫
四、福島	十五萬貫	五、愛知	十一萬貫

甲斐絹の製法及販路

甲斐絹は洋氣、又は改機と稱し、水に潤ほして織りたるを以て、地質滑きも緻密にして、大に外人の嗜好にかなふ、其販路甚だ廣く、内國は勿論、生糸と同じく横濱に輸送して北米合衆國、獨逸、佛蘭西、及び朝鮮等に輸出す、色は青、白、玉虫等あり、郡へて經と緯と其色異なる糸を以て織れるが故に、色光相映じ、艶美にして彩澤を發するものなり、往昔は舶來品ならん、寛文年間甲斐の郡内の織工、加伊岐を織出す、既にして京師の職工も之を倣ふ、然れども郡内に及ばずと、郡内の内特に谷村町に製するものを佳なりとす。（工藝志料）

郡内織も、郡内より産し、改機と稍々同質のものなり、多くは縱横縞にして上等夜具地等に用ひらる。（工藝志料）

葡萄は毎年九月十月頃成熟し、或は生にて、東京に送り、又は乾葡萄となして、各地に出す、葡萄酒の醸造も又盛に、甲斐葡萄酒、甲州葡萄酒の如き是れなり。

鑛産　金峰山よりは盛に水晶を出し、雨畑（七面山の北今は硯島と云ふ）よりは硯材を出す。水晶は透明六角柱の結晶にして、其大なるものは數尺に及ぶ、純粹なるは透明無色、清澄水の如く、其他黄水晶、紫水晶、黒水晶等あり。雨畑硯石は淡黒宮川石に次ぎ、温潤蒼黒なり。

研究上の注意

一、四境山を繞らし、交通不便なりしも近時中央西線の甲府より、西は岡谷まで、東は八王子に連絡せしを以て甚だ便利となれり。靜岡より甲府に急行せんと欲せば、鐵路東京に出で、八王子線を經て、中央線より來るを却て便とす。如何に地勢が人事の發達と相關係するかに注意すべし。

二、甲府と武田信玄とを連絡して、甲州人民の氣風を研究すべし。

三、中央線が信州地方を經て、名古屋まで開通する曉は、甲州人民の生活に如何に影響するかを研究すべし。

愛知縣

沿革　尾張國　古、國府を中島郡（今國府宮村大字國府宮）に置く、鎌倉の初、大屋安資守護となり、足利氏の時、土岐賴康、子康行、滿貞、相繼で守護となりしが、應永年間斯波義重之に代り、世々京都に居り、其臣織田氏を以て守護代となす、後五世義敏、同族義廉と搆

を爭ひ、義敏越前に走り、義康清洲城に來り住す。其曾孫義統に至り、家臣織田信友の爲めに弑せらる。信友の同族、信長信友を誅し、義統の遺孤、義銀を奉じて清洲に據る。義銀後に信長を陷れんと謀り、却て信長の爲めに逐はる。是より信長本國を領し、遂に京畿內外三十餘州を併有するに至る。信長弑せられて其子信雄伊勢より清洲に移り住せしが、秀吉其封を奪ひ、養子秀次を奉ず。文祿四年秀次罪ありて自殺し、秀吉福島正則をこゝに封ず。慶長五年德川氏、正則を安藝に徙し、第四子忠吉を封せしが、其弟義直代りて封を受け、同十五年名古屋城を築きて之に遷り、子孫世襲す。忠吉の封を受くるや、平岩親吉に犬山を與へ、傅相とせしが、義直封を受くるや、成瀨正成之に代り、犬山に住し、世々傅相となる。明治維新後名古屋縣を置き、別に犬山に稻里縣を置き、明治五年合して愛知縣と稱せらる。

三河國

三河國、古、國府を寶飯郡(今の國府村大字國府)に置く、鎌倉の初め、暫く源範賴國守となり、建久正治の間、安達盛長守護たり、足利の時は吉良滿貞、守護の職を奉じ、西條(八名郡)に居り、其弟尊義をして幡豆郡を領し、東條に居らしむ、後寬正の頃吉良氏衰へ、足利義政細川成元を守護とす。天文年間今川義元駿河より來り侵し、遂に東條義安(尊義八世の孫)を捕へ、駿河に幽し、西條義昭(滿貞七世の孫)を東條に遷し、自ら國の東部を奪ふ、是時に當り家康崛起して、岡崎に居り、西境を略守し、義元と拮抗する十一年、義元桶狹間に敗北するや、德川氏後遂に全州を併有す。天正年間豐臣氏家康を關東に移し、池田輝政を吉田に、田中吉政を岡崎に封せしが、關ケ原役後、德川氏の有に歸し、池田、田中の二氏を他に移し、松平家清を吉田に、(後に松平信祝)本多康秀を岡崎に、(後に本多忠澄)本多康俊を西尾に、(後に松平乘祐)戶田尊次を田原に、(後、三宅康貞)水野勝成を刈谷(後、土井利信)に封ず、且漸次封を國內に受くるもの擧母に本多忠利、(後、內藤政苗)奧殿に松平乘次、西大平に大岡忠相、西端に本多氏ありしが、文久年間に至り、奧殿藩主松平乘謨を信濃の田野口に移し、八藩と爲す、後板倉勝達を陸奥の福島より移し重原に、安部信發を武藏の岡部より平原に封じ、總べて十藩と爲せしが、幾くならずして皆廢して岡崎に、額田縣を置きて餘國を管し、明治五年十一月に至り愛知縣に合す。

位置 愛知縣は靜岡縣の西に連り、北は岐阜縣、東北は長野縣に隣りし、南は太平洋及び伊勢海に臨み、西は三重縣に境す。其管轄は尾張全國(名古屋市、愛知、東春日井、西春日井、丹羽、葉栗、中島、海東、海西、知多の一市九郡)及び三河全國渥美、八名、北設樂、南設樂、寶飯、幡豆、額田、東加茂、西加茂、碧海の十郡を管す。

地勢 東北及び東境には、木曾山脈及び赤石山脈の餘派蜿蜒起伏するを以て、山嶽多く、鳳來寺山は東北に峙立し烟巖山と云ふ、鳳來寺あるを以て此稱あり、阿蘇火山脈に接續する火山なり、山中奇勝多く三河第一の靈場なり、西北部は有名なる濃尾平野に屬し田野遠く開け人烟繁庶し殷盛な

る都會多し、南は西に伊勢海あり東に渥美、知多の二半島ありて内に三河灣を包み良港あり。

以上の如き地勢なるを以て、河水は多く西南に向て流る、西にあるは木曾川にして、次濃尾平野の運輸灌漑の生命とも云ふべく、流域は尾張米の產を以て名あり。

東三河國には矢矧川、大平川、豐川あり何れも西北より發し西南流して三河灣にそゝぐ、此の三河は即ち三河の國名の起因にして、灌域は三河木綿の原料を產出す。

濃尾平野　とは尾張及び美濃の平原にして面積頗廣く一望十里一山を見ず、地味肥沃にして、木曾川及び其支流平野の中央を流るゝを以て、灌漑又至便なり。從て農產物饒なり、此の豐饒なる平野には、古來豪傑を出すこと尤も多く、德川家康を始め織田信長、豐臣秀吉及び其部下の前田利家、柴田勝家、丹羽長秀、淺野長政、加藤清正、蜂須賀家政、福島正則等の諸雄輩出し殊に秀吉の如きは一匹夫より身を起し天下を一統し、威武を明韓に振ひ、實に千古の俠人と崇めらる、斯くて此の平野は幾多の戰場となり、諸雄覇を爭ひたる跡少からず、即ち關ケ原、桶狹間、小牧山等是れなり。

農產　此の廣大なる平野には米及び麥を產すること少からず、米は尾張米の名世に高く、美濃及び尾張を合せなば其產額日本第一なるべし、愛知縣のみにて二百六十餘萬石を出す、麥も美濃を合せなば日本第一に上るべきも、本縣のみにては八十一萬石にして日本第三なり、又尾張大根を一に宮重大根と稱し、其主產地は國の西部、西春日井、中島、丹羽、海東等の諸郡にして、切干となし遠く滿蒙斯德、布哇、又は北米合衆國に輸出せられ、產額約百三十萬貫、四十五六萬圓の價額に上る、又三河地方には綿の產出多く一ケ間約三十一萬貫を出す、葉藍も又產出多く日本第二にして凡百二十萬貫を出す。

農產	米產額		蠶產額		葉藍	
	全國	四、〇〇〇、〇〇〇石	全國	四〇、〇〇〇貫	全國	三、〇〇〇、〇〇〇貫
	新潟縣	三、三〇〇、〇〇〇石	埼玉縣	三、三〇〇、〇〇〇貫	德島縣	三、三〇〇、〇〇〇貫
	兵庫縣	一、六二〇、〇〇〇石	茨城縣	一、〇〇〇、〇〇〇貫	愛知縣	一、一八〇、〇〇〇貫
	福岡縣	一、三五〇、〇〇〇石	愛知縣	八一〇、〇〇〇貫	埼玉縣	七五〇、〇〇〇貫
	愛知縣	一、二五〇、〇〇〇石	兵庫縣	七五〇、〇〇〇貫	兵庫縣	五二〇、〇〇〇貫
	千葉縣	一、二三〇、〇〇〇石	群馬縣	六二〇、〇〇〇貫	福岡縣	五二〇、〇〇〇貫
	秋田縣	一、一二〇、〇〇〇石	福島縣	五二〇、〇〇〇貫	千葉縣	四八〇、〇〇〇貫
	山形縣	一、〇八〇、〇〇〇石	千葉縣	四八〇、〇〇〇貫	山形縣	四二〇、〇〇〇貫
	福島縣	一、〇五〇、〇〇〇石	山形縣	四二〇、〇〇〇貫	秋田縣	三九〇、〇〇〇貫
	宮城縣	一、〇二〇、〇〇〇石	秋田縣	三九〇、〇〇〇貫	宮城縣	三六〇、〇〇〇貫
	茨城縣	一、〇〇〇、〇〇〇石	宮城縣	三六〇、〇〇〇貫	茨城縣	三三〇、〇〇〇貫
	岩手縣	九八〇、〇〇〇石	岩手縣	三三〇、〇〇〇貫	岩手縣	三〇〇、〇〇〇貫
	秋田縣	九六〇、〇〇〇石	栃木縣	三〇〇、〇〇〇貫	栃木縣	二七〇、〇〇〇貫
	栃木縣	九〇〇、〇〇〇石	新潟縣	二七〇、〇〇〇貫	新潟縣	二四〇、〇〇〇貫
	山口縣	八四〇、〇〇〇石	山口縣	二四〇、〇〇〇貫	山口縣	二一〇、〇〇〇貫
	岡山縣	八二〇、〇〇〇石	岡山縣	二一〇、〇〇〇貫	岡山縣	一八〇、〇〇〇貫
	廣島縣	七八〇、〇〇〇石	廣島縣	一八〇、〇〇〇貫	廣島縣	一五〇、〇〇〇貫
	大阪府	六三〇、〇〇〇石	大阪府	一五〇、〇〇〇貫	大阪府	一二〇、〇〇〇貫
	鹿兒島縣	五四〇、〇〇〇石	鹿兒島縣	一二〇、〇〇〇貫	鹿兒島縣	九〇、〇〇〇貫
	島根縣	四五〇、〇〇〇石	島根縣	九〇、〇〇〇貫	島根縣	六〇、〇〇〇貫
	和歌山縣	三六〇、〇〇〇石	和歌山縣	六〇、〇〇〇貫	和歌山縣	四五、〇〇〇貫
	鳥取縣	二七〇、〇〇〇石	鳥取縣	四五、〇〇〇貫	鳥取縣	三〇、〇〇〇貫
	沖繩縣	一八〇、〇〇〇石	沖繩縣	三〇、〇〇〇貫	沖繩縣	二〇、〇〇〇貫

木曾川　木曾川は源を信濃國木曾山中に發し、飛騨川、長良川、糸魚川、揖斐川、等の支流を入れ、美濃尾張を過ぎて伊勢灣に注ぐ、幹流の長さ四十六里、本支航路二百里と稱す、河口は十二町に達する所あり、濃尾平野は年々此の河流の土砂を輸送するより成る、沖積層の平野なり、加ふるに尾張の海岸一帶は漸次土地隆起の傾ありて、陸地次第に增加せり、即鎌倉時代まで海岸たりし鳴海潟の地は、今や海岸を去る二里にあり彼の古歌に

遠くなり近くなるみの濱千鳥啼く音に潮の滿干をぞ知る。

鐵道東海道線　中央西線　關西鐵道線　尾西鐵道線　武豐線　豐川鐵道線　都邑　豐橋

の處は昔の面影もなし。

鐵道　**東海道線**　本（官設）は靜岡縣より來り岡崎を過ぎ、大府に至りて支線を分派し、名古屋に至り、關西鐵道線と中央西線と交叉し東北に走り、岐阜縣に入る。

中央西線　（官設）は名古屋より東北に向ひ多治見を經て中津川迄開通す。將來は信州を甲州に至る中央東線と合するの豫定なり。

關西鐵道線　名古屋より西に走り、伊勢を經て終に大阪に至るものなり。

尾西鐵道線　關西鐵道の彌富驛より、東海道線の一宮に連絡するものにして、尾張の西部を南北に通ず。

武豐線　（官設）東海線の大府を基點として、南走して知多半島の武豐に到るものなり。

豐川鐵道線　東海道線の豐橋より起り、長篠まで開通せり。

此線路中の豐川には吒枳尼天あり、有名なる豐川稻荷是れなり、信仰者間の男女道俗より集る、（吒枳尼天に付ては京都府の伏見稻荷の項を參看すべし）

都邑　**豐橋**　は豐川の南岸にありて、入口二萬三千、商業盛なり、舊名を吉田と稱し、松平氏の舊城下なり。

慶長年間に天正二年武田勝頼、家康、信長、聯合軍の爲めに大敗せし古戰場なり。

岡崎　矢矧川に沿ひ、大平川を帶び、水陸運輸の便を占め、綿の賣買頗る盛に、又附近より三河木綿を產す、從て商業繁盛に、人口二萬餘、往時德川家康の勃興せし所なり。

家康江戸に遷りし後數多の譜代並に對ぜられしが殊に明和六年本多中務大輔忠籌（五萬石）封ぜられて、明治に至る。

三河木綿は手織の綿布にして、數さゝる生木綿もあり、愛知縣下の木綿織全產額七百八十萬圓を出す日本第一とす。

武豐　は知多半島の東岸にあり、調港場の一にして、港界敷浦北村より正東に引線したる一線內、錨地の水深は二尋乃至三尋波穩かにして大船を泊すべし、水陸の運輸至便なるを以て、百貨輻湊し、商業殷賑なり。

外國輸出品の重なるものは參酒、酢、酒、醬油、輸入品は大豆、粕、米、綿花、石油、參等にして、內國輸入品の重要なるものは、米、薪、炭、木材、石炭、雜肥料、石材、砂糖にして、輸出品は酒醬油、酢、參酒、米、大豆粕、鹽、白木綿、紡績、紙等なり。

此地の主要產物は、清酒、參酒、酢、醬油、味噌、米、麥、白木綿、紡績、糸、蠟等とす。

武豐の北なる半田及び龜崎附近は酒、醬油、酢の釀造盛なり、酒は全縣の產額十六萬三千石に上り、醬油は丸萬八千石に至る。

今此所に第三師團の第十八聯隊あり、明治二十七八年役の平壤に於て、佐藤少將の指揮下に勇名を天下に轟かしたるは、實に此地方三河武士の後裔たる兵士なり。

岡崎
武豐

清酒　全國　四百八十七萬石　愛知縣　二九一
醬油　全國　五十七萬石
千葉　二十二萬七千石

福　岡	二十六萬六千石	兵　庫	二十一萬九千石
京　都	十九萬一千石	香　川	九萬九千石
新　潟	十六萬九千石	愛　知	九萬八千石
長　野	十六萬三千石	岡　山	八萬三千石
愛　知	十六萬三千石	茨　城	七萬八千石

常滑　知多半島の西岸の常滑は陶器常滑燒を産す、朱泥を用ひて雅致あり。

常滑燒の起原は、遠く天平年間行基菩薩の土器を創製せしにあり、後文化年中鯉江方寿新法を工夫し、其子方壽志を繼ぎ、種種の考案を費し、天保年間遂に新燒を遂成す、現時の諸燒は全く其規模に則る、窯數三十餘、工人千百餘人ありといふ、常滑は元來瓦類を燒し、傍ら茶器酒器類を作り、餘り盛大ならざりしが、明治十六七年頃より、土管の製造開けて遂額巨大となりぬ。

野間内海　平治の亂源義朝鎌田政家連谷金王丸鷲栖芝光等と京師を遁れて此の内海に來り長田忠致の亭に入る忠致其子景致と謀りて之を浴室に誘ひ力士を伏して遂殺す、義朝の墓は野間にあり。

有松　は近傍鳴海と共に絞を以て名高し、所謂有松絞、鳴海絞是なり、何れも樽廉にして地質強さを以て販路頗る廣し。

有松絞の起りしは寶暦人（氏名未詳）岡村に來り、試に手布を染絞せし以來、此業漸次に起り、有松絞の名四方に聞まり、需用頗る多し、現今種々の類絞を染絞する内に、豐浅絞と稱するは當初の遺法を存するものなるべし、徳川氏尾張を領するに至り、絞木綿專賣を有松、鳴海の二所に許し、他は其業を營むを禁ぜしが、明治に至り此禁解け、爾來名古屋にても同品を製造し、竟に名古屋の産額は有松を凌駕するに至れり。

桶狹間　有松町の南部にあり、永祿三年九月織田信長が今川義元を滅したる古戰場なり。

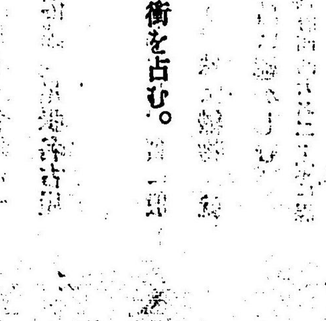
熱田　熱田より四日市へ十六哩伊勢大神宮へ三十九哩

熱田　伊勢灣の北岸に位し、伊勢路を往復する船舶の發着點なると、名古屋の埠頭なるとを以て、客舟貨船出入し、且官幣大社熱田神社あるが故に頗る繁昌し、人口二萬五千餘あり、此地近來巨資を投じて築港の計畫中なるを以て、成功の曉には一大良港となり、名古屋と相待て益々繁盛なるべし。

熱田神宮は、三種の神器の一なる草薙の寶劍を安置し、尊崇他に越ゆ、日本武尊の東夷征伐に際し、尾張氏の女宮簀姫（ミヤス）を娶りて、しばし留り給ひし所なり。

名古屋市　濃尾平野に建ち、三府に亞ぐの大都會にして、人口二十八萬餘あり、名古屋市が今日の發達をなせしは左の事情あるによる。

名古屋市の發達の理由



（一）地理的事情。

（イ）濃尾の大平野にあり。

（ロ）伊勢灣の北濱に位し熱田港を控ゆ。

（ハ）東海道の東西の要衝、中仙道より南下する要衝を占む。

（二）人事的事情。

（イ）三藩の一たる大藩なりしこと。

（ロ）官府的都府たること。

（ハ）工業的都府たること。

名古屋城の沿革

以上の事情によりて、漸次發達し、以て現今の繁華となれり、即此地は所謂三藩の一として、慶長十二年德川義直入國以來、六十二萬石を領し、累代相嗣ぎ明治に及ぶ、其城は日本三名城の一として、天守閣頂には金鯱を裝へるにより金城の名あり、現今は離宮となれり俗謠『尾張名古屋は城で持つ』とは此城が本市に於ける關係を知るべし。

官衙には愛知縣廳、控訴院、第三師團司令部、其他諸學校あり、市街整修、人家櫛比し、實に殷賑を極む、近時之に加ふるに諸工業大に發達し、紡績會社を始め各種の工場あり、殊に織物（就中双子織）、漆器、陶磁器、七寶燒、扇、團扇等の產ありて、本市をして益々繁昌に趣かしむ。

德川義直は家康の子にして、慶長十二年閏四月、甲府より尾張に入りて封を受く、慶長十五年、江戶幕府西國大名二十家に課して、城を築かしむ、二十家知行六百萬の力を集め二歲にして成る、五重の天守閣は加藤清正の造築する所にして、巨石を疊みて臺となし、五重の棟瓦を其上に置き、葺くに銅瓦を以てし、鴟尾には丈餘の金鯱を立て、光耀天日に映じ、數里より仰望

名古屋市

義直の系圖

家康 ─ 秀康（越前侯）
　　 ─ 秀忠
　　 ─ 忠吉
　　 ─ 忠輝（越後侯）
　　 ─ 義直（尾張侯）
　　 ─ 賴宣（紀伊侯）
　　 ─ 賴房（水戶侯）

七寶燒の製法及種類

（ハ）七寶燒　は銅の上に針金を卷き、色々の模樣を作り、五色の釉藥を以て燒付け、後、研磨したるものなり、七寶とは佛經に金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、琥珀、珊瑚を云ふ、故に以上のものを鏤めたりと云ふ義なるべし、七寶に二種あり、有線七寶、無線七寶即是れなり、有線は京都の並河靖之氏專ら之を製し、無線は東京の濤川惣助氏其製作に巧妙を極め、次で横濱及び此地は其次ぎなり。

豊助樂燒の起り

（ニ）豊助樂燒　京都の樂燒の一種にして、文政年間豊助と云ふもの此地に樂燒の法に本づき、菓子盆、食器の類を製す、其器は外面に漆をぬり、描金裝畫を施し、裏面は樂燒の陶質を存す。

双子織

（ホ）双子織は甚だ盛にして三百萬圓の產出あり。

漆器

（ヘ）漆器は一閑張と稱する、紙貼漆器にして、紙を貼り重ねて漆を塗りたるものにて、折敷、文庫、机等を製し產額二萬五千圓。扇は名古屋扇と稱し產額二十萬圓を超（海外に輸出す）。

名古屋より東京まで
名古屋より大阪まで

名古屋市は東京と京都との中間にありて、人情敏捷なり、且平野に立ちて生活の程度も高く、稍々浮華輕佻を免れず、此の地より以東はすべて東京の影響を被り、以西は大阪の影響を受く、本市は即東西勢力の中心にして、實に中京の名に背かざるなり。

秀吉の故郷　名古屋の西濱洲の南に、織豐村あり織田豐臣二氏の名による、秀吉誕生の地は同村大字上中村にあり、字を木下屋敷と云ふ今豐國神社を祀る。

瀨戶

瀨戶　名古屋市の東北にありて、瀨戶燒を產する所なり、元來此地方は花崗岩より成れる木曾山脈の末派に屬するを以て、窯業に適せり。

瀨戶燒の起因

瀨戶燒　とは瀨戶地方より產する陶器の總稱にして、磁器は青華、青磁、瑠璃及び其他素地なり、素地は橫濱、神戶又は名古屋に輸送し專ら外國向の繪付に用ひらる、一ヶ年此地の產額八十萬圓に上る。

研究上の注意

沿革 美濃國

抑も此地の燒物は順德天皇の御宇、加藤四郎左衛門景政と云へるもの、初めて之を作る、されど其品質精巧ならず、窯に入るるに當り、其器の口を下にして覆ふが故に、釉藥、器口に及ばず故に之を『久知波計傳(クチハゲデ)』と云ふ、今尚存するものあり、貞應二年景政隨說の僧道元に從ひ、支那に往て陶法を學び、安貞元年歸朝し、京畿諸國の陶土を驗するも皆宜しからず、故に再び此地に來り、其好の土を發見し、業を開く、之を瓶子窯(ヘイシガマ)と稱す、『古瀬戸』と云ふもの是なり、又支那より齎せし土にて燒きたる茶壺あり、世人之を藤四郎唐物と云ふ、點茶家の尤も賞玩する所にして、其釉は下に茶褐色を施し、上に黑釉を施せり。

研究上の注意

一、名古屋市の發達が、如何に自然的地理と關係あるかに心を用ひて研究すべし。

二、名古屋市と東京市と對照して、類似したる點を推考すべし。

三、名古屋市は何故に東西兩京の影響を被るかを注意すべし。

四、本縣は何が故に古戰場に富むか、是れ左の事情あることに注意すべし。

(一)大平野あること(二)東西交通の衝なること(三)人烟稠密なることと是れなり。

人間の活動は自然的地理と離るべからざることを切實に了得すべし。

岐阜縣

沿革 美濃國 往古國府を不破郡に置き、鎌倉時代には梶原景時、大内惟義をして交々守護たらしむ、正治中土岐光衡を守護とし子孫世襲す、七世の孫頼康、足利尊氏及義詮に仕へ、尾張伊勢の守護を兼ね、州守に任じ、革手城(厚見郡)に據る、其孫康政罪を足利義滿に得て出奔す、乃頼康の姪頼益之に代て守護となる、五世の孫頼藝(ヨリノリ)に至りて大桑城に徙り、天文十一年齋藤秀龍、頼藝を逐ひ自立し岐阜稻葉山に居り、守護と稱す、孫龍興に至り、西濃の豪族、不破、安藤、氏家、稻葉の諸氏皆款を信長に通ず、永祿七年信長大擧して來り攻む、龍興越前に奔り、美濃悉く信長に歸す、九月信長岐阜に徙る、後天正四年安土城に徙るに及びて、其子信忠をして岐阜に居らしむ、信長信忠俱に死し、信孝相繼で岐阜に居る、信孝死するに及び秀吉池田信虎をして大垣に鎭せしめ、金山城を森長一に賜ひ、州事を監せしむ、信虎死するの後、嗣輝政岐阜に徙る、十八年秀吉輝政を三河に徙し、信忠の子秀信をして代り鎭せしむ、秀信關ヶ原の役西軍に應じ、破れ歸りて高野山に入る、德川氏即岐阜を廢す、慶長六年石川康通を大垣に封じ、後戶田氏鐵之に代り、其曾孫氏定に至り其弟氏成に新田一萬石を與へ、支封とす、慶長の末東南境十二萬石を以て德川義直に賜ひ、又其相、竹腰正信を今尾に封ず、其他加納に奧平信昌、後に永井直陳(ナホノブ)、高須に德永壽昌後に松平義行、郡上に遠藤慶隆、後に青山幸道、山村に松平家乘後に松平乘紀(ノリタダ)、苗木に遠山友政、高富に本莊道芳を封ず、明治四年七月皆改めて縣となし、笠松縣を加へて十縣とす、同年十一月悉く併せて岐阜縣となす、九年八月筑摩縣所管の飛驒國を併管す。

飛驒國ヨリ往古國府ヲ大野郡ニ置ク、北條氏ノ末、小笠原貞宗信濃國ノ守護ヨリ兼治ス、建武ノ初、姉小路高基ヲ國司トシ、置世小島ニ居ル、尊氏ノ反スルヤ貞宗之ニ應ジ、其子政長ヲシテ州事ヲ兼管シテ國司ニ抗ス、國司ハ三世尹綱ニ至リ、應永年間足利義持京極高數（高光ノ弟）ヲシテ尹綱ヲ攻メシム、尹綱敗死ス、義持即飛驒ヲ高光ニ與ヘ、而シテ國司ハ尹綱ノ從子師言ヲシテ之ヲ繼ガシム、初メ高光ノ臣三木正頼、櫻洞城ニ居リテ州事ヲ監ス、其曾孫嗣頼ニ至リ松倉城ニ遷ル、國内ノ豪族、高山、山田、鍋山、畑等ノ諸黨之ヲ制ス、弘治ノ初姉小路ノ統絶ユ、嗣頼因テ姉小路氏ヲ繼ギ、州守ニ任ズ、其子自綱繼ク、天正十三年豐臣氏、金森長近ニ命ジテ之ヲ擊タシム、自綱遂ニ出奔ス、乃長近ヲ封ジテ高山ニ治セシム、元祿中頼時（長近六世孫）ヲ出羽ノ上山ニ徙シ、前田綱紀ニ命ジ、戍兵ヲ高山ニ置カシメ、代官伊奈忠篤ニ田賦ヲ掌ラシム、既ニシテ戍ヲ罷メ、城ヲ毀チ、更ニ郡代ヲ置キテ州事ヲ統ベシム、明治元年六月高山縣ヲ置キ、四年十一月之ヲ廢シ、筑摩縣ヲシテ兼治ス、九年八月岐阜縣ノ所管ニ歸ス。

位置　本縣ハ愛知縣ノ北ニ連リ、北ハ福井、石川、富山ノ三縣ニ接シ、東ハ長野縣ニ境シ、西及ビ南ハ滋賀、三重ノ兩縣ニ隣リス。其管轄ハ美濃全國（岐阜市、稻葉、羽島、養老、海津、不破、安八、揖斐、本巢、武儀、山縣、郡上、加茂、可兒、土岐、惠那一市十五郡）飛驒全國（大野、吉田、吉城ノ三郡）トス。

地勢　本縣ノ地勢ヲ一言ニシテ盡クサバ東北部ハ本邦第一ノ高盛地ニシテ、西南部ハ本邦稀有ノ平野ナリ、高盛地ノ東境ニ飛驒山脈（乘鞍火山脈）南北ニ蜿蜒シテ、御嶽、乘鞍岳、鎗岳等ノ高峻ナルモノ聳ヱテリ、脈中ノ野麥峠ハ飛驒ヨリ信濃ニ越ユル唯一ノ山路ナリ、又東南隅ニハ木曾山脈ノ末端蟠リ、北境ニハ白山火山脈ヲ起シ、山盟主白山ハ海拔八千八百尺ニ高聳シ、四時白雪ヲ戴ケルヲ以テ此名アリ。（白山ノ記事ハ加賀國ヲ見ルベシ）

白山の名にあらわれて三越路や　（廻國雜記）

十五里許ノ間峰ナル雪ノ消ユル日モナシ

此脈西ニ延ビテ、美濃、越前ノ境ニ蟠ル、又西境ニハ鈴鹿山脈ノ走ルアリテ、伊吹山ハ其高點ニシテ不破關ノアリシ所ハ其低落部ナリ。

美濃、飛驒ハ南方及ビ北方ニ向テ傾斜ス、從テ河流ハ北及ビ南ニ向ツテ流ル、即北走スルモノハ、宮川（益田川）白川トナリ何レモ越中ニ通ズル必要ナル交通路ニシテ、南流スルモノハ飛驒川、長良川、揖斐川トナリ何レモ木曾川ニ合シ、濃美平原ヲ灌漑ス從テ土地肥沃農產饒カナリ。

御岳　飛驒ノ東南信濃トノ境ニ峯ヱ海拔一萬〇五百十尺ノ活火山ナリ、稍々圓錐形ヲナシ火口盆所アレドモ休止世久シク崩壞舊形ヲ存セズ、唯々三之池ノ一所形跡依然、宛トシテ摺鉢ニ似、周圍二里許、頂上ハ四時白雪ヲ戴キ御嶽神社アルヲ以テ每歲夏季白衣ノ行者登山スルモノ千人

に越ゆ登山毎に白衣に印を捺す。

乘鞍岳　御嶽の北にあり、山容御嶽に似て大なり、海抜二萬四百五十尺、頂上に凹地あり、四峰の峰頭對立して馬鞍に似たり、飛騨山脈は越中、越後の交界親不知の海濱より起り、飛信の州界となり、脈中の諸火山は立山、乘鞍岳、御嶽最も著はる、故に乘鞍火山脈、御嶽山脈とも稱す。

木曾川　（上流は信濃の部を見よ）は木曾飛騨兩脈の間より來り、飛騨川を容れ江流大となり、其注入點（實は八百津、兼山より下流）より舟揖の便大にして、河幅二千尺最廣四千尺に達し、美濃尾張の界をなし、墨股川（長良川）を容れ、揖斐川と相並び長島を挾みて海に次る、長さ凡五十五里濃尾の平野は全く此の河の沖積層より成り、故に水利の便と洪水の害と何れも古來有名なり。

長良川　（又美濃の北部より發源し、岐阜の北を過ぎ、鵜飼を以て名高く、下流は墨股川の稱あり水路三十二里遂に揖斐川に合す、古名は藍見川と云ふ。

鵜匠とは毎年夏秋の候船に乘り、篝火を焚き、船匠一人にて艇を操り、數羽の鵜を使ひ、鮎を吐かせ、又水に放ち入る、その手業の物なれたること、あやしく見事なり、遊人の杖を曳くもの數からず。

又木曾川と共に古來洪水を以て甚だ名あり、是れ河の上流は急峻なる高原なれども、岐阜附近は急落せる平原なれば、爲めに諸川の水淨滯沉澱せざるを得ず、而も慶安三年の洪水の如きは、長良川最も甚しく、死者三千人を出し、明和四年には堤塘破

壞十一萬餘間、溺死二百人に上れりと實に水害頻繁なるを以て、去る明治二十年來河身改修の大工事を企て、木曾、長良、揖斐の三河を各々別々に流出せしめんとす、今や工事大に進歩せり。

濃尾平原　は廣大なること關東平野に次ぎ、人烟亦稠密なり、後に美濃飛騨高原を負ひ、水害多しと雖も、土地肥沃にして、所謂、美濃米の產地なり、其產額實に少からず、且麥及び其他各種の農產多し、此の豐饒なる平野こそ、古來幾多の偉人を出し、將又此平野を爭はんとて許多の大戰ありき。之に反して飛騨の地は土質磽确にして農產少し、されど林產多し。

鐵道　東海道鐵道線（官設）　は名古屋を經て、岐阜、大垣を過ぎ、揖斐川を渡り、關原の古戰場を過ぎ滋賀縣に入る。

關原役跡　關原の慶長十五年九月十五日の大戰の跡は、方三十町許にして、概れ畑地及び原野にして歩騎の進退に適せり。

不破關址　近江と美濃の境を起伏する鈴鹿山脈は、此地の四に於て低落せるを以て、近畿と東海との樞要なる交通の咽喉なるが故に、古昔不破關を置て東國を扼したり、是れ關原の名の殘れる所以にして、此の關は天武帝の時に設けられ、爾後伊勢の鈴鹿と越前の愛發と共に三關と稱せられしが、桓武帝の時廢せらる。

秋風や酒もほしふのわのせき。

中央西線（官設）　は名古屋より來り、多治見を經て、中津川まで開通せり、將來は木曾川に

都會 多治見
美濃燒
岐阜市
岐阜城の遺蹟

…に入るべし。

都會　多治見は其附近と共に、所謂美濃燒產出を以て有名なり、其產額却て瀬戶よりも多きも、瀬戶燒の名に壓倒せられ其名高からず。

美濃燒は土岐郡を中心として、惠那、可兒の兩郡にわたり、其產出する地多しと雖、多治見、土岐津、一倉、笠原、妻木、下石、駄知の諸村尤も名あり、此の各村に於て製出せしものを多治見に集ること、猶有田燒の伊萬里に於けるが如し、製出するものは日用品九分、裝飾品一分にして販路を清國、米國に開き、產額一百萬圓以上に達す(工藝史)其製法瀬戶に倣ふと雖ども、其質粗朴にして、青花(藍染付)淡花(薄色の藍染付)のもの多し。

岐阜市は縣廳所在地にして、濃尾平野の北方にありと雖も、美濃飛驒高原を背にし、長良川を帶び、東には稻葉山峙ち、山水秀麗なり、縮緬、提燈、團扇等を產し、商業頗る活潑なり。

岐阜は戰國の際齋藤左衞門利長之に據り、城址は稻葉山にあり、山甚だ高からずと雖、平野の上に屹立し、山色秀潤なるを以て遠くより仰望すべし、後織田信長こゝに居り、又秀信も封ぜられ、關ヶ原役後西軍に與みして、城遂に陷り廢せらる。

岐阜提燈は、典具帖にて張り、種々の繪畫を畫けるを以て、優美高尚にして、海外に輸出せらるゝもの多く、產額七萬圓に上る。團扇も亦北米合衆國に輸出せらる。

岐阜縣は地震の災多く、明治二十四年十月二十八日の大地震の如きは、岐阜市の民戶全潰二千、半潰三千、死者二百六十人、負傷者七百人、火災六ヶ所に起り、二千餘戶を焚盡す、岐阜全縣に死者四千五百人、傷者七千人、壞屋四萬戶、半壞屋一萬八千戶、燒失五千戶實に悽慘の極なり。

大垣
養老瀧
高山
飛驒の工匠
產物

大垣　人口二萬、其繁華岐阜市に及ばずと雖も、亦一都會たり、戶田氏十萬石の城下なりき。

大垣城も關ヶ原役に關して有名なり。

養老瀧　大垣町の西南(三里)養老山中にあり、瀧の高さ九丈餘、幅二丈餘、孝子の美談を以て顯る、時は元正帝の世なりと傳ふれども、眞僞明かならず。

高山　飛驒國位山の北にあり、宮川中央を貫き、山高く水清く、風光明媚、小京師の稱あり、人口一萬五千、批目(ツギメ)春慶塗、一位細工及び生糸を產す。

一位山に在る水松を產し、古公家の用ふる笏の料となすが故に、此木を一位の木、山を位山と稱すと云ふ。

批目細工は、寛永年中國主金森宗和の創めし所と云ふ。

此國の山間にありて多く工匠を出し、古へは京都に交番に上りて、飛驒の工匠の名あり。

昔番工百濟河成が飛驒の工匠と各々其技を鬪はしたる珍談あり。

產物　岐阜市の北方には多く紙を產す、紙質強く、美濃紙と稱す、其名最も高く、他國に產するものも此の紙質に同じきものは美濃と稱するに至る、全縣下紙の產百十八萬圓に上り、日本第二なり、織物も亦盛にして、岐阜縮緬を始めとし、稻葉郡(岐阜の東南)にも產し、烏帽子縮緬、紋縮緬等あり、又美野縞とて絹織物を產す、又絹綿交織をも出す少からず、陶磁器は多治見附近より產するものゝ外、西部赤阪には二種の雅致ある温故燒を產す。又赤阪附近よりは石灰岩を出

すこと多く、之を以て各種の細工物を作る。

紙の産額　全國　千二百七十萬圓　一、高知　二百三十萬圓　二、岐阜　百十八萬圓　三、愛媛　百萬七千圓　四、靜岡　六十二萬圓　五、山口　五十八萬圓

研究上の注意

一、岐阜地方は何故に洪水の憂多きかに注意すべし。

二、此地の有名なる洪水も木曾川改修工事と共に漸次其憂を減ずべし、即自然が人事の爲に左右せらるること大なるに注意すべし。

三、岐阜市が水災、震災に罹ること頻繁なるに拘はらず、直に恢復するは地理上の形勢優勝なるによることに注意すべし。

四、岐阜地方は、又我國に於ける有名なる震災地たるは何故か。

五、關ケ原の地が何故に古戰場となりたるかを地理上より研究すべし。

六、高山より縣廳所在地岐阜市に急行せんとせば、富山に出で、北陸鐵道、東海道鐵道を經て至るの却て早くして便なるは、地勢が交通と如何に關係密なるかに注意すべし。

七、岐阜縣は愛知縣と共に有名なる陶磁器產地なり、是れ其原料が同一山脈に屬する花崗岩より

成るが故なることに注意すべし。

長野縣

沿革　古、科野と稱す、國府を東筑摩郡筑摩村に置く。天平三年亦合す、治承四年木曾義仲、兵を木曾に起し北陸より京師に入り、平氏を逐ひ旭將軍の稱を得、文治中小笠原長清を守護に補し、子孫世襲す、元弘の末、小笠原貞宗、宗良親王を奉じ、曾氏と笛吹嶺に戰ふ、後、叛て曾氏に降り、守護となる、深志城（東筑摩郡、松本）に居る、永享中、小笠原氏衰へ、村上（埴科郡葛尾城）諏訪（諏訪郡高島城）、木曾（西筑摩郡福島）の諸氏起る、天文中、武田信玄、侵擾する連年、諏訪頼茂を誘殺し、小笠原長時を亡し、木曾義昌を亡し、村上義清を破り、上杉謙信と戰ふ、武田氏亡びて全國總田氏に歸し、信長、福島及深志を木曾義昌に、飯田、高遠を毛利秀頼に、高島を川尻鎭吉に、小諸を滝川一益に、海津（今の松代）を森長可に與ふ、信長弑せらるゝや諸將西上、國内大に擾る、武田の故將眞田昌幸、上田に據り上杉氏に屬す、德川家康北條氏直と地を爭ひ、本州過半德川氏に歸す、北條氏亡び德川氏の封を關東に移さるゝや、松本を石川數正に、飯田、高遠を毛利秀頼に、小諸を仙石秀久に、高島を日根野高吉に與ふ、關ケ原役、眞田昌幸西軍に應じ、秀忠の軍を上田に敗る、德川氏の初、松本（松平）、松代（眞田）、

位置

位置　長野縣は本州の中央部に位する大縣にして、八縣十國と境す。即ち北は新潟縣に接し、東は福島、埼玉、山梨の三縣に連なり、嚴密に言へば、その國名を擧ぐれば北は二面越後に包まれ、東は五里野深く越入し、その南の一部分武藏に境し、更に甲斐の深く侵入せるあり、南は遠江三河二國の捨く所となり、西は美濃、飛驒と起中と相接す。縣廳を長野に置き、信濃全國十市、十六郡（長野市、南佐久、北佐久、小縣、諏訪、上伊那、下伊那、東筑摩、西筑摩、南安曇、北安曇、更級、埴科、上水內、下水內、上高井、下高井、高井）に亘る。面積の大なる岩手、藏島に次ぎ本邦第三なり。（岩手縣一〇二三九方里、福島縣八九五方里、秋田縣七三四方里、長野縣八七八方里）

地勢　我日本群島の骨格をなす第二條の大山系、嶺岩山系と樺太山系東西より來り會し、富士帶火山脈更に南より走りて本縣を縱貫すれば、問はずしてその地勢の雄峻にして、峰巒重疊せるを知るべし。國の東境武藏、甲斐の境上には、關東山脈に屬する秩父山塊の蟠るあり、武藏、甲斐、信濃三國の境上に聳ゆる、甲武信嶽はその最高峰にして、直立二千四百五十米に及び、その他二千米以上の高峰相並ぶ。信濃川の上流千曲川はこゝに發源して、秩父山塊の西側に沿ふて北流し、富士帶火山脈との間に數個の河谷平野を作りて越後に走る。秩父山塊の北端上信の國境に聳ゆるは那須火山脈に屬する、一列の火山にして、南は荒船の休火山より、淺間の活火山、四阿山、草津、白根活火山を經て信越の境上に蟠る毛無火山の諸大火山おりて信濃川の河谷に臨む。

淺間山　大淺間山は我國有數の活火山にして、四時黒烟の絶ゆるなく、時として鳴動大噴出をなすことあり、頂上の噴火口は圓形にして、周圍十二町、御鉢廻りの各所より、現時の噴火口、即ち外輪山なり、更に麓に屹立する中央火口丘を繞る一輪の丘陵は、前掛山と稱し、舊噴火口、即ち外輪山なり、更に麓に屹立する鋸牙狀をなせる牙山（ギッパ）は往時に於ける大噴火山側壁の一部遺留せるもの、これ第二次の外輪山なり。高さ海拔二千四百九十四米、天明三年の大噴火には、灰を降らすこと八州に及び、江戸市中猶屋上灰の堆積を見たりと云ふ。熔岩の群馬縣吾妻郡方面に流れたるもの、今猶歷々徵すべし。

富士帶火山脈　富士帶火山脈は南洋マリアナ群島に起り、伊豆七島を起し、伊豆の天城山、箱根火山を經て、富士の高峰となり、更に甲斐の茅ケ嶽より、本縣に入り、秩父山塊と赤石山脈との間を走りて、入笠嶽、立科山を起し、千曲川の西に沿ふて北走し、越後の國境に至り、黒姫、戸隱の休火山となり、以て越後の燒山妙高山に連なる。されば富士帶火山脈の噴出

なかりし以前を想像するに、秩父山塊と赤石山脈との間には、頗る廣き平野ありて、甲斐の甲府盆地と接續せしものならんも、富士帶火山脈の噴出の爲に、さながら山字形をなし三條の山脈走り、一方は千曲川上流佐久平野となり、一方は諏訪湖四邊の平地並に甲斐釜無川灌域の地をなす、諏訪湖は諏訪盆地中央の凹地にい、水の涸溜せしものにして、決して火口湖にあらざるなり、八ヶ嶽は高さ二千九百三十二米にして、頂上噴火口の遺跡を存す。

赤石山脈　信濃の境上を南北に走り、主峰赤石山は三千九十三米の高峰にして、富士山、御嶽に次ぎて、本邦第三の峻嶺なり、仙丈嶽その北に聳え、高さ三千九百六十九米、その他三千米以上の高峰多し。

赤石山脈の西は即ち天龍川の河谷にして、天龍川に沿ひて、二條の平野をなす、この平野を挾みて數個の大山脈あり、即ち木曾山脈にして概して、天龍川と木曾川との間を蜿蜒と走り、南北に連亘す、駒ヶ岳の二千八百八十米は最高峰にして、美濃との境上にある惠那山亦脈中の一峰なり。

信濃の西邊、越中、飛騨との境上は本邦唯一の高山性の土地にして、雄峰簇立して、その峻を競ふ、眞に宇内の壯觀なり、これ即ち乘鞍火山脈にして、越中立山に起り、飛信の境上に聳ゆる槍ヶ嶽、（三千九十三米）乘鞍岳、（三千百六十七米）を起し、更に南じて本邦第三の峻嶺たる御嶽を起す、御嶽は三千百八十五米の高にして富士山の、三千七百七十八米に次ぐ高峰なり、頂上噴

火口存して、その雄姿亦富士に劣らず四時雪を絶たず。

かくの如く乘鞍火山脈は三千米以上の雄峰相接するを以て、この方面の交通は極めて困難にして、信濃より飛騨に通ずる唯一の街道たる野麥峠は本邦人道の最高なるものなり。

乘鞍火山脈は木曾山脈と相對して、木曾川の河谷を抱く、松本盆地はこの間にあり。

平野　火山脈國内を蜿蜒するを以て、大平野のおらん樣なけれど、山脈間の河谷に數個の稍廣き平野あり、これ信濃の重要部にして、一國の生產所なり、千曲川は甲武信嶽に奔し、秩父山塊

千曲川 平野

の西縁邊を北流し、富士帶火山脈との間に佐久平を作るや、更に方向を東北に取り、松本盆地の水を集めたる犀川を合ひて、古戰場に名高き川中島平野を作る。これ縣内第二の大平野にして、米の産地、養蠶業地、製糸業地なり。これより下流は富士帶火山脈と那須火山脈との間を東北に奔り、新潟縣に入り、信濃川と稱し新潟港に注ぐ、全長百里、縣内を流るゝ五十四里、舟楫の便あり。支流犀川は木曾山脈の駒ヶ岳に發し、松本盆地の水を集め、東流して千曲川に入る。松本盆地は縣内第二の主要地にして、屈指の蠶業地となす。

諏訪平野

諏訪平野　諏訪湖邊の平地にして、諏訪湖に注ぐ深流の土砂堆積により築造せる所多し。諏訪湖は周圍四里二十二町、吐口は天龍川となりて南走し、伊那平野を作り、遠江の掛塚港に注ぐ、流程五十六里、舟楫の便あり、諏訪平野並に伊那平野亦生糸蠶業の隆盛なる所とす。

木曾川

木曾川　は西筑摩郡の北境、鉢盛山に發し、河邊の地に狹き平野を作り、或は河身を深く刻みて、峽谷をなし、美濃尾張、伊勢を經て、桑名港に注ぐ、全長五十七里、河谷の地は有名なる木曾御料林の地にして、老樹鬱蒼晝猶暗し。檜、欏、槇、椹、明檜を木曾の五木と稱し、良材の名あり、木曾の棧道、寢醒の床等の勝地は皆川筋にあり、芭蕉翁が『かけはしや命をからむ蔦かづら』と詠せし所も、今は石を疊み、道を開きて平坦なる道路となりしかど、古は懸崖絶壁の端に木橋を以て通じたりしと云ふ。寢醒の床は上松の南にあり、急流、地磐の花崗岩を刻みて、

木曾の棧道

寢醒床

奇岩亂立し、激流奔湍して、藍色の瑠璃を表はす所、眞に天與の壯美なり、近衛家煕が『谷川の音には夢も結ばじを、寢醒の床と誰が名づけけん』と詠じたりしも誤なきなり。

鐵道 信越線

鐵道　**官設信越線**　群馬縣高崎より來り、碓水のアプト式、隧道を經て本縣に入り、千曲川の谿谷に沿ひて長野市に至り、更に荒川に沿ふて越後直江津に至る、本州中部を横斷するものなれば旅客貨物の多きこと、東海道線に次ぐ、長野市の南、篠之井より篠之井線分岐して松本町に入り更に鹽尻に通ず、他日、甲府より韮崎を經て鹽尻に來るべき中央線と合し、以て名古屋に通ずる豫定なり。

都邑 上田町

都邑　**上田町**　千曲川に臨み、川中島平野の南部、小縣平の中心市場をなす、人口二萬一千、養蠶、機織業の中心をなし、繭の取引盛にして上田縞の産あり。

長野市 三六、五二九

長野市　長野縣廳所在地、人口三萬六千、皇極天皇の勅願にかゝる善光寺あり、長野市はこの佛閣あるが爲め市街をなせるもの、南に川中島の平野を望み、農産物の中心市場をなす。

松本

松本町　は松本盆地の中心市場にして、人口三萬六千、縣下屈指の産業地なれば、繭、蠶卵紙の取引頗盛なり、竹細工の美篶行李は米國に輸出して好評あり。

上諏訪

上諏訪　は諏訪平野の中心都邑にして、縣下第一の製糸業地にして、生産額十五萬貫に及び、縣の生産額五十萬貫に對し、三分の一に及ぶ、實に本邦第一の製糸業地なり、人口一萬に達る。

飯田

飯田　市は伊那平野の中心地にして、亦二の製糸業地なり、人口二萬五千、飯田元結は紙撚を心とせるを以て、堅牢の名高し。その他、小諸、稻荷山、須坂、屋代、坂下、大町、等の名邑あり。

産業

産業　信濃は火山の群集するあり、火山灰は桑樹の栽培に適す、四圍山嶽重疊せるを以て、四通の海洋より遠す、氷蒸氣はこれ等山嶽の爲に凝結せらるゝを以て、降水量尠く、晴天多ければ、桑樹良く長し、晴天多ければ、問はずして蠶業に適するを知る、況んや暑氣の酷烈あるに非れば、蠶、夏、秋の三回飼育をなすを得、宜なり、本縣の產繭額全國に冠たるや、繭四十二萬六千石の生糸四十九萬二千貫、繭は全國の八分の一を超え、生糸は五分の一に過ぐ、實に本邦富源の一を涵す。

飯田

河谷の平野は米の生育に適し、米產額百二十萬石に及ぶ、本縣の養蠶業は農家の副業に屬し、農事の閑を以て營めば、利益多く、其の器械力を借る能はざるものなれば、勞働の價値を高からしめ、從つて富の平均を來し、全國に於て最も其の平均を得たる地とす、如斯にして本縣の富の程度高く、教育普及し、中階級思想少なきなり、養蠶業の影響するところ、實に廣からずや。

研究上の注意

研究上の注意　生糸、準備、

二、本縣の蠶業地たる理由を明了に理解すべし。

三、蠶業の利益多き所以、富の平均を來す理由を述べ、延ひて、教育、社會上、に及ぼせる影響につき充分述ぶる所あるべし。

新潟縣

沿革　越後國　往古は越前以北本國に至る、總べて高志國と稱す、後分れて越前、越中、越後の三國となり、國府を頸城郡に置く、（直江津の近傍の國分寺古國府の地）延曆十七年、本國に地若干を朝原內親王に賜ふ、是を賜封の始とす、寬弘長和の際、鎭守將軍平維茂邑を頸城郡に食む、子繁茂秋田城介に任ず、因て城氏と稱す、養和元年其玄孫資長に至り、平宗盛奏請して國守に任ず、幾もなくして卒す、壽永九年弟長茂任を嗣ぎ、木曾義仲を信濃に討て敗走し、義仲自ら國主と稱す、元曆元年義仲亡び、文治元年城義資を國守に任ず、二年源賴朝に降る、正治三年城長茂謀叛して誅に伏し、其從子資盛、鳥坂（頸城郡今の關川邊）に據て叛す、佐々木盛綱伐て之を平げ、功を以て守護となる、（邑を加治の庄に賜ふ）承久三年、北條朝時を以て守護とす、建文元年新田義貞を國守に任ず、延元の初め、足利尊氏上杉朝房をして守護たらしむ、貞和三年高師泰を國守に任ず、貞治三年足利義詮、上杉憲顯を守護とす、爾後之を世襲して春日山に治す、永正六

…家宰長尾爲景其主上杉房能を弑して國を奪ふ。七年上杉定實(上條城主)を迎へ擁奉して主と爲す。十九年定實卒し、弟景義嗣ぐ。天文十一年爲景越中に戰沒し、子晴景立つ。十六年弟輝虎と相鬩ぎて敗死す、輝虎之に代る。上杉憲政來奔し約して父子となる。因て輝虎上杉氏を冒す。將軍義輝亦以て關東管領と爲す。輝虎武威四隣に加はり、佐渡、上野、越中、加賀、能登及び越前、飛驒各々半國を取り、信濃、出羽の數郡を併す。天正六年輝虎卒し、甥景勝嗣ぐ。慶長三年豐臣秀吉之を會津に徙し、堀秀治を春日山に、村上義明を本莊(後村上と稱す)に、溝口秀勝を新發田に封ず。十一年徳川家康秀治に命じて福島に徙らしむ。十五年其子忠俊事に坐して國除かる。松平忠輝を封じ、尋て高田に治す。元和二年罪あり封を沒し、酒井家次に高田を賜ふ。四年其嗣忠勝松代に轉し、松平忠昌を封ず。寛永元年越中に改封せられ、從子光長之に代る。天和元年罪を獲て國除かる。貞享中稻葉正往を封じ、次戸田忠眞松平定重之に次ぎ、五世定賢白川に轉じ、寛保の初、榊原政永封せらる、其餘國內封を受くる者長岡(初は堀直寄、後は牧野忠成)與板(初は牧野康成、後は井伊直規)村松(堀直時)椎谷(堀直之)絲魚川(初は稻葉正成後に松平直之)墨川(柳澤經隆)三日市(柳澤時睦)峰岡(牧野忠泰)等とす。凡そ十一藩(村上、新發田高田及び以上八藩)天保中奉行を新潟に置く。王政維新、越後府(後新潟府)柏崎縣を置き、十一月之を合して新潟府を置き、翌年また越後府を置き、新潟府を縣とす、尋で越後府を縣に改め、幾もなく越後縣を水原縣に改め、新潟縣を併す、八月復た柏崎縣を再設し、三年水原縣を廢し、新潟縣を置く。四年七月廢藩置縣、十一月新潟、新發田、村上、村松、峰岡、三日市、墨川の七縣を廢して新潟縣を置き、柏崎、高田、與板、淸崎、椎谷の五縣を廢して柏崎縣を置き、明治六年又柏崎縣を廢し新潟に併す、(蒲原郡津川鄕は上杉氏の時より會津領に屬す仍つて福島縣に屬し東蒲原郡と稱す)明治十九年五月勅令あり之を改め、新潟縣の管轄とす。

佐渡國

佐渡國、古國府を雜太郡に置く、養老元年雜太郡を割て、更に加茂羽茂の二郡を置く、天平十五年越後に合し、天平勝寶四年復別れて一國と爲る、鎌倉府の初め、播磨の人本間能忠來て國府に居り、惟々澁谷、藍原、土屋の三氏と各々地頭となる、承久三年北條義時順徳帝を雜太郡和泉村に遷し、仁治三年に至て崩せらる、後本間氏守護を領し、徙て河原田(雜田郡)に居り、同族分れて澤根(同郡)羽茂(羽茂郡)新穗(加茂郡)の數邑に居る、天正五年上杉輝虎小木港に上陸し、伐て之を降す、義子景勝封を襲ふに及んで、本間潟上、澤根、羽茂の四氏本土を四分して自ら擅に約束を受けず、十七年景勝將を遣り本間潟上を擊て、其族を殲し、澤根羽茂を降して、其の采邑を越後に移し、全國を併有す、慶長の初、豐臣秀吉景勝を會津に移封し、吏を遣て國事を管せしむ、關ヶ原の役後徳川氏奉行を置き、河原田の古城に治す、後相川に徙す、王政維新佐渡縣を置き、既にして改て相川縣と稱す、明治九年相川縣を廢して新潟縣に合す。

位置　長野縣の東北に連り、東南は山形、福島、群馬の三縣に接し、西北は一帶日本海に瀕し、西は富山縣に境す。其管轄は越後全國（新潟市、東蒲原、西蒲原、中蒲原、南蒲原、北蒲原、三島、古志、北魚沼、中魚沼、南魚沼、刈羽、岩船、東頸城、中頸城、西頸城の一市十五郡）佐渡全國（佐渡の一部）とす。

地勢　本縣は蜿蜒長蛇の如く、東北より西南に亘ること約八十里に近き、大縣にして、東部には越後山脈北より駛走して、飯豊山、駒ケ岳、劒引山等を顚起し、南方群馬縣の境には、三國山脈東西に起伏して、長野縣の北方に亘り、縣の西南部には寒風火山脈の餘派、彌彦山、米山、妙高山、燒山等峙ち、縣の西境富山縣との間には飛騨山脈來りて日本海に迫る。要するに越後と他國との境界はすべて、高嶺、峻嶽を以て擁せられ、何れ他に交通するも、山峰を越へざる可らず、唯々一二の河流此山脈を破りて流れ、重要なる交通路を作る、即羽前とは荒川の谿谷、岩代とは阿賀川の谿谷、信濃とは信濃川の谿谷によりて、互に交通するが如き是れなり。

而して西北は日本海岸に瀕すれども、海岸の出入少く蜿蜒弓狀をなして、直江津の微西と彌彦山の海に迫る邊に於て遲鈍なる斗出を見るのみ、從て港灣の佳良なるもの少く、是れ實に本國の一大缺點なりとす。

斯の如く地勢は西北日本海に向て漸次傾斜し、すべての河流を注入せしむ、殊に信濃川は信濃より來り濃域は日本稀有の大平野を作る、又東方より來る阿賀川も其の灌域は越後平野の一部に屬して、此の兩大河によりて沖積せられたる此平野は地味肥沃にして、農產饒に其產額三百三十萬石以上に達し日本第一とす。

米の產額

全國	四千三百三十萬石	一、新潟縣	二百三十五萬石
二、福岡縣	一百七十三萬石	四、愛知縣	一百六十八萬石
五、千葉縣	一百四十七萬石		

信濃川　源は信濃より來り、許多の支流を容れ、蜿蜒北流して、新潟に至り海に入る、全長百五里、國界より約四十里、注容の溪流多きを以て俗に八千八水河の稱あり、幅の最も廣き所は八町、新港灣口にて四町十間、舟路南に泝り、本流は十日町まで二十九里、支流漁沼川は六日町まで三十四里の間舟楫を通ず、就中新潟より長岡まで二十里は小形汽船を通じ得べし。

阿賀川　は岩代國より來り、上流は只見、鶴沼の二川相會して日橋川となり、越後山脈を橫斷し、津川に出づ、是れより舟楫の便あり、下流は一派を信濃川に通じ、小阿賀川と云ひ、本流は北に向ひ海に注ぐ、只見川の源より五十里にして淵さ八町に達する所あり。

鐵道　信越線（官設）　長野縣より來り、妙高山の東方を過ぎ、高田を經て直江津港に到る。

北越鐵道線　直江津より起り、東北に向ひ、柏崎、長岡を經て、新潟に達す。

都邑
高田

新田（高田）は信越線に沿ひたる一驛にして、荒川の西岸にあり、人口三萬二千、商業稍々盛なり、雁木の制あり、冬季積雪深きを以て有名なり、即ち『高田町此下にあり』とは此地の奇談なり。

高田城は德川家康の六男松平忠輝の越後に封ぜらるゝ諸侯に課して築きたるもの後數多の領主の交代ありて榊原氏最後に封ぜられ十五萬石の城下たりき此地は雪深きを以て家屋の構造も特異にして人々軒下を交通し若し積雪の時向側に行かんと欲せば雪を穿ちて隧道を作る、此雪を冬季穴を掘りて貯へ夏日之を販賣す頗る甚だ廉なり。

直江津
新潟へ六十四浬伏木へ六十四浬

直江津は信越線の終極點にして、荒川の吐口にあり、港は東西十町南北三町許の遠淺にして、碇泊に便ならずと雖も、他に良泊なきを以て新潟と共に北越の三大港とし、定期汽船の新潟及び伏木等へ航通あり、近年鐵道の開通と共に、百貨の集散甚だ活潑にして、商業も亦殷賑なり人口……なる。

春日城址

直江津の西南一里半許に春日山あり、山中の古城址は嘗て上杉謙信の據て以て雄を北方に振ひたる所なり。

春日山頭鎖晩霞、驛鴎嘶盡有啼鴉、
……憐君獨賦龍州月、不比平安城外花、　賴山陽

親不知

親不知は越中越後の國境、飛驒山脈の海に迫る所にして、直徑五十町許の海岸、絶崖削壁、北陸第一の險なり、俗に『親不知』『子不知』と云ふ、今は新道を南方山中に通じ、旅客の此地を過ぐるもの稀なり、今舊時の情態を記せば。

親不知の狀況

越後に入り、市振、外波、靑味まで、濱邊四里の間、天下無双の難所にて、親不知、子不知、駒返、犬戻などすべて此邊にあり、右の方は嶮山聳立とも遙かに連り、飛驒の立山に續き、岩石は屛風を立てたるが如く、人力を以て道を開くこと能はず、直に波打際の危き所を往還す、逆浪間なく打よせて、見るもの氣を失ひ魂を消す、此間絶壁の岩根に大なる穴ありて、或は五七間或は八九間にして、同じ樣なる穴幾つもあり、是を往來の旅人彼大浪の引くを見合せ、急に走りて其穴の中へ駈込まざれば、早や跡より打來る巨濤、巖壁へ打かくるに沙烟いとすさまじく立のぼり、走りおくれたるものは浪にふれて、忽太洋の藻屑となるらん、此故に親も子を見かへるいとまなく、子も親を尋ぬるに暇なきとて之を『親不知』『子不知』と名付けたり。（二十四輩順拜圖會）

波吼崖崩頑石欹、……俯聞父子不曾知、
……扶桑第一險難地、今日初嘗摩脚皮、　（信……萬里）

柏崎

柏崎は北越線路の一驛にして、近傍石油の産出多く、日本石油會社は壯大なる製油所を設け數里の地より鐵管によりて石油を輸送し來り、四方に販賣す、柏崎の西南に米山の休火山あり、寒風火山脈に當る。

長岡

長岡（谷）信濃川に臨み、北越線中の要驛にして、水陸共に運輸至便の地を占め、附近の地は石油の産出夥しく、從て商業甚だ活潑にして、却て新潟市を凌駕せんとす。

此地は牧野氏七萬四千石の舊城下にして、河井繼之助は其藩臣にして、驍勇能く戰ひ、戊辰の役幕府に屬し大に官軍を惱ます、後傷を被り城遂に陷る、時に七月二十九日なり今の山縣陸軍大將は時の參謀となりて奮鬪せり、かくて城陷るや同氏之を守りしときの述懷に。

[illegible]ふけて夏もみにしむ越の山風

此地當時兵燹に罹り、士民塗丹の厄運に逢ひしが、今や油業勃興し、往時の衰頽を一掃して、殷賑前古に超ゆ、新潟には毎日二回の定期汽船あり。

小千谷 信濃川の西岸、三國街道に近く、北越鐵道は其北方二里の所を過ぐ、水陸の交通至便にして、商賈工匠の大家多く、人口一萬餘に上る、此の附近は越後縮及び透綾等を產す。

小千谷の縮布は、寬文年中播州明石の人、佐藤次耶、其妻萬、女見二人、千代、今朝と呼ぶ、小千谷に來り、浪人なれば辛くも手馴れし、縮布を織りて世を渡りけるが、近邑の婦女ついて之を習ふ、漸次弘まりて國產となれり、古き流行歌に『たかい山から谷底見ればおまんかあいや布さらす』又『お千代〱と皆おしやれどもお千代ばかりがおなごじやか』とは此母子の事を歌へり、即越後縮は苧麻の生地を能く紡績して、織り上げしものにして維巾の上品なるものなり。

透綾は元、文政の末京都西陣の人、宮本茂十郎、流浪して此國十日町に來り、從來此地方の特產たりし、縮布に基き經に絹糸を用ひ、緯に苧麻（カラムシ）を用ひ、創製したりと云ふ、當時是を絹縮と稱せしが、方今俗に透綾を絹縮と稱す、近時十日町は此織地非常に發達し、小千谷町を壓倒せり、此れ十日町は染色に種々の改良を加へ、又新機械等を輸入して、鋭意進步を計りたるを以てなり、今や透綾は本縣の特有產とも稱すべく一ケ年產額三十六萬圓に達す。近時小千谷及び各所に羽二重織を初め大に有望にして却て福井縣を凌がんとす、是れ日露戰爭の結果內地向の織物に打擊を受け外國向の羽二重を製し初めたるによる。

三條町 信濃川の畔、新潟を去る十里汽船の往復ありて商業繁榮に、形附木綿、金物類の產あり。

新潟市 信濃川の吐口にあり、新潟縣の所在地にして開港場の一とす、殊に本港は我が國五港の一として早く開港せられたれども、港灣淺く且風波に便ならざるを以て[illegible]朔北風吹けば急遽纜を解き佐渡夷港に避けざる可らず加之信濃川より吐出せる土砂の爲め漸次遠淺となり、他の貿易港に比すれば隆なりと云ふ可らず、人口六萬主要產物は漆器摺付木水產物等なり、上流長岡地方に汽船の便あるのみならず、佐渡、直江津、酒田、函館、小樽に航行する定期及臨時汽船あり北越鐵道線の停車場は本港を去る一里三十町沼垂町にあり。

新潟市より信濃川を挟て對岸なる、沼垂町との間に萬代橋と云へる長橋あり、長さ四百三十間とす、港界は、燈臺を中心とし、二海里半の半徑を有する圓圈内の一弧内とす、錨地は、信濃川口の水深は常に變動するを以て、信號旗及旗船を置き、其の水深及び水道を示す、然れども平均三尋より四尋の間にあり、底質は槪して砂より成る、朔望高潮三時五十五分、大潮昇一呎小潮昇三分の一呎。

主要なる外國輸出品は、醬油、果物、米、食鹽、素麵、淸酒、輸入品は鹽鮭、筋子、肥料等なり。內國輸出品の主要なるものは、米、大小豆、白玉粉、酒類、茶、味噌、煙草、梨子、陶器、傘、材木、輸入品は素麵、食鹽、砂糖、酒、茶、陶器、紙類、材木、石材、綿、肥料、石炭、炭等なり。

沼垂町（ヌッタリ） は人口一萬北越線の終點にして此地は往時渟足（ヌタリ）の柵を置きて蝦夷に備へし所なり。

五泉 新潟の東南にあり五泉平と稱する袴地の產地として有名なり。

村松 五泉の南にあり奥平氏三萬石の城下にして第二師團に屬する步兵第十七聯隊の衛戍地なり。

新發田 新潟の東にあり溝口氏五萬石の城下にして步兵第廿三聯隊の兵營あり。

佐渡

佐渡は越後の海中新潟の西二十餘海里にあり、地形二條の山脈より成り、東北より西南に並駢し、何れも第三紀層及び火山岩より成れる小島なりしを、沖積土によりて連接せられたるもの也にして、其南なる卑小の山部を小佐渡、北なる高峻の山部を大佐渡と云ふ、其中央なる沖積層の平野を國中と稱す、面積五十六方里、人口十一萬二千餘あり、國の左右に海水灣入し島の全形法馬に似たり。

革鑛の沿金

此地は古來黄金産出を以て有名なり、鑛坑は金北山の西南相川の方面にあり、近年まで帝室御料局の所有なりしも、今は三菱合資會社に拂下げられ、選鑛所、精錬所、製作所等あり、一ケ年の金産額北十八貫五百匁に上る、製金は大阪造幣局に送り、精製の上貨幣に鑄造す。

相川

此金鑛の濫觴は詳ならず、慶長六年にあり、前後徳川氏の御料として、甲斐の人大久保長安をして更に舊坑を改良せしめ、産額甚だ多くなれり、今慶長十八年より明治二十二年三月に至る二百七十六年間の金銀産出額を推算するに金百二十三萬三百四十八匁、金銀六千二百七萬八千二百十二オンス、此價額七千九百十一萬四千八圓餘

真浦

合計一億四百九十三萬千百三十一圓に上ると云ふ。

相川　島の西部にあり、人口二萬六千、金山のため繁昌せり、陶器無名異燒を産す、極めて雅致あり。

夷港　島の東部夷灣にあり、新潟を去ること三十三海里、多くの汽船は夷港に碇泊して風波の都合を見て新潟に入港す。

佐渡國は北陸の一孤島として、古來貴紳名士の貶謫せられたること多し、恐れ多くも順徳天皇承久の亂に逆臣北條義時の爲めに此島に遷流せられ玉ひ、終に茲に崩御ましまし、新町より北二里餘平泉村に黒木御所の跡あり、天皇は此地にわびしき住居遊ばし『都忘』と云ふ白菊を植えて、悶をやり玉ふ、又或時は。

研究上の注意

啼けば聞くさけば都の戀しきに此里過ぎよ山杜鵑。

と咏じ玉ふ、御心の内ぞ憐れなる、又新町の西南眞野には其御陵眞野陵（實は火葬所にして御骨は京都大源法華堂に納め奉る）あり。

又眞野村の内妙宣寺には、日野資朝の墓あり、資朝は正中二年十二月此島に流され、國府の地頭本間山城入道餌倉の命により、一族本間三郎をして斬首せしむ、一子阿新丸途に父の難を報じたり。

山城入道餌倉の命により、一族本間三郎をして斬首せしむ、一子阿新丸途に父の難を報じたり。

研究上の注意

一、新潟港の缺點を知り、其振はざる自然と人事の關係密接なることにあるを了得すべし。

二、新潟縣の特有産物たる、黄金、米穀、石油、織物については稍詳かに知るべし。

三、日露の戰爭は内地向の織物業の不振となり因て外國向羽二重織物を初め、福井縣を凌駕せんとす、即其覺悟方法の如何によりては、不幸は轉じて幸福となることに注意すべし。

四、高田の深雪の理由を研究すべし。

五、信濃は日本第一の長流として、稍々詳かに學ぶべし。

富山縣

沿革　越中國　上古越前より以北越後に到るの地を總べて越國（古志）と稱し、之れを越前、越中、越後の三國に分てり、此の國の建置明かならざれど、景行帝の朝に、大河音尼を伊彌頭の國造に定め賜ふ、伊彌頭は今の射水なれば是れ本國國造の初めならん、而して初め八郡（礪波、射水、婦負、新川、頸城、古志、三島、魚沼）を分ちて越後に屬し、養老二年越前國の四郡（羽咋、能登、鳳至、珠洲）を割いて初めて能登國を置く、天正四年外從五位下田口朝臣年足を本國の守とす、是れを國守の始めとす、而して國府を射水郡（今の新湊舊古府町と云ふ所に當る）平十三年能登を本國に併せ、既に述べて天平寶字元年舊に依て之を分立し、自後四郡（礪波、射水、婦負、新川）を以て國を建て、守ありて管し、以て保元に至る、帝室陵夷、平氏跋扈其族教盛、盛國に盛俊相繼で國政を執る、壽永二年平氏の威權漸く衰ふ、木曾義仲信濃に起る、北陸の士皆之に應じ、本國の豪族石黒光弘等悉く之に黨す、文治元年義仲既に亡び、本國を前中納言光隆に賜ふ、二年光隆の子家隆其封を繼で守たり、源頼朝總追捕使たるに及んで、守護を置く、北條氏の末名

越時有を守護とす、元弘三年王師興り時有誅に伏す、建武中興、少將中院定清（ナカノヰン）を以て國司に任ず、明年時有の子時家亂を州内に作す、朝廷桃井直常を以て代て守護を賜ふ、足利尊氏叛するや州人普門利清之に應ず、定清之を伐て戰沒す、既にして直常叛て尊氏に附き、正平五年再び吉野に歸順す、尊氏乃ち足利高經を守護とし、直常を伐て之を破る、天授、六年將軍義滿管領畠山基國に本州を賜ひ、長子滿家に傳へ、世襲して京師に入り、再傳して政長に至る、明應二年政長同族義豊と戰ひ、（河州正覺寺の役）敗死し州の豪族上政長在世の時の目代（椎名小勝胤）神保（忠氏）鈴木（國重）等相謀て上杉顯定の麾下に隷せんことを乞ふ、明年顯定其弟越後守護房能をして州事を兼攝せしむ、永正三年、房能其臣長尾爲景に弑せられ、七年顯定爲景を伐て敗死す、（越後魚沼郡妻有の庄、長森原）是より本國の士爲景の不義を惡み、守皆之と絶し、椎名神保諸氏各其地に割據す、天文七年爲景大擧し來り侵し、松倉に椎名氏、下新川郡に在り魚津を距る二里十四町）瀧山（神保氏、婦負郡に在り山田川を帶ぶ）増山（神保氏、礪波郡にあり）諸城を陷れ、其地を掠有す、十一年神保良衡、江波三河等、爲景を誘殺す、神保氏純（忠氏の子）富山城に據り、新川婦負二郡を併せ勢威頗る振ひ、永祿の初め礪波郡を併せ、椎名小石黒諸氏を降す、其勢守護の如し、爲景の子輝虎報仇を圖り、屢來り攻む、六年大擧して入侵し、良衡三河始殺され、數城を陷る、元龜三年輝虎松倉城を陷れ、椎名蓁胤を滅し、神保氏春（氏純の嗣）を富

位置
地勢

山陰圍み、明年之を拔き、越州の大半を略す、氏春走て守山（射水郡）に籠み、狹を纖田信長に納れ、天正六年揮虎卒し、內訌大に起り、越州豪雄畔し、志を信長に通ず、七年信長佐々成政に全州を賜ひ、富山に治す、十三年豐臣氏成政の地を削て新川二郡を食ましめ、礪波、射水、婦負を以て前田利長に與へ、守山に治す、十五年成政を肥後に徙し、文祿四年新川郡を利長の父利家に加賜す、慶應の初、利長徙て富山に治す、尋で父の封を繼ぎ、加賀に移り、本州を兼領し、世襲す、其支封を富山とす、（利長の嗣利常の第三子）正政革新、四年七月富山藩を廢して縣とす、十一月同縣を廢し新川縣を置き、新川、婦負、礪波の三郡を新川縣に屬し、其射水二郡は七尾縣を置て之に合せしむ、五年九月又新川縣に歸す、明治九年新川縣を廢して之を石川縣に合併し、十六年又改て富山縣を置き、縣廳を富山に定め、全國を管治す。

位置　富山縣は新潟縣の西に連り、東南は長野縣に接し、南は岐阜縣に境し、西は石川縣に隣す、四字形をなして富山灣を抱き日本海となる、其管轄は越中全國（富山市、高岡市、止新川、中新川、下新川、婦負、射水、氷見、東礪波、西礪波の二市八郡）とす。

地勢　國の東西南の三面には山岳起伏して、地勢高峻なれども、中央には廣大平野ありて漸次日本海に向て傾斜す、從て河流も悉く北流す、即國の東境を劃する飛騨乘鞍火山の山脈は日本沿海の親不知より、起り立山、藥師岳を起し、信濃飛騨の間に蟠まる、南境は飛騨高原の餘派起伏し

紀上地
最低
河流

立山
神通川

て、唯々宮川と白川とによりて南方との交通を計るのみ、西境は白山火山脈の餘派駿走して、加賀益〻聳ぎり有名なる倶利加羅峠は此の脈の山路なり。

河流の大なるものは黒部川、常願寺川、神通川、庄川とす、此等の流域は土地肥へ、田圃開け、農產饒に、米產額百萬石以上に上ると云ふ、然れども河流はすべて急流にして、一朝雨降れば洪水汎濫の憂あり、近時長堤を築きて、稍々其害を減せしと云ふ。

（治水汎論）

立山　國の東南隅に峙立し、海拔九千六百尺に上り、山峰甚だ多く、俗に七十二峰と稱す、雄山最も高し、頂には雄山神社あり、夏日行者の登山甚だ多し。

越中守　大伴家持

天離る、鄙に名かけす、古思の中、國內ことごとく、山はしも、しじにあれども、川はしも、さはにゆけども、皇神の主はきいます、新河の、その多知花麻に、とこなつに、雪ふりしきて、帶ばせる、可多可比河の、清き瀨に、朝よひ毎に、たつ霧の、おもひすぎめや、ありがよひ、いや年の畑に、よそのみも、振さけ見つゝ、萬世の、語らひ草と、未だ見ね、人にも告げむ、音のみも、名のみも、聞きて、ともしぶるがれ。

神通川　飛騨國より來り、上流を宮川と云ひ、國の中央を流れ、海に注ぐ、全長凡三十里、運輸灌漑の便大に、河口より飛騨角川まで舟筏を通ず。

庄川　鐵道北陸鐵道線　中越鐵道線　都會富山市　立山　魚津　蜃氣樓

庄川[illegible]一名射水川と云ひ、飛驒國白河の末流にして、伏木に至り海に入る、流程四十里餘、河[illegible]波[illegible]間七八里の間舟楫の便あり。[illegible]

鐵道　**北陸鐵道線**（官設）石川縣より來り、高岡を過ぎ、富山まで開通せり。

中越鐵道線　伏木港より南下し、高岡に於て北陸線と交叉し、城端まで開通し、主として伏木港に越中米を輸送するため布設せられたるなりと云ふ。

都會　富山市　は神通川に跨り、富山縣廳の所在地にして、人口六萬、市况繁盛なり、元前田氏の支藩とす、此市の賣藥行商は其名四方に高く、反魂丹、熊膽丸、感應丸等を重なるものとす。

立山　[illegible]

此地に製藥に從事する職工一萬五千人、又之を販賣するもの九千人に上り、全國に遍からざるはなし、その賣上高一ヶ年百萬圓以上あり、近年韓國、清國、西伯利、布哇へ輸出するに至る、內地に販賣するには自己が得意とする地方に出で[illegible]月每[illegible]後先の賣藥を預け[illegible]留後每年巡回して[illegible]新らしきものと取代へ[illegible]服用せし分の代價を受く[illegible]されば一旦得たる得意は卽財產に[illegible]之を買入したる[illegible]、帳簿は[illegible]、賣入、賣買等をなすことを得。

製藥の起原は、元祿の頃、備前岡山の醫師、淨閑此地に來り、反魂丹を上りしかば、時の藩主又其濟民の一手段なるを嘉納し、[illegible]諸國に行商するを聽許したり、爾後其業に從へるもの益經營を加へ、運上を藩に入れ、其保護を被り、益々盛大を致す、維新[illegible]後稍々衰えたれど外國に販賣するに至り又振ふ。

魚津[illegible]富山市の東[illegible]沿海にあり、[illegible]商業稍繁盛にして、人口一萬四千に上る、此地の海上には海市なるものの現出す、樓閣殿宇の朦朧として朝霞暮靄の間に顯る、俗に之を蜃氣樓と云ふ、每年春夏の交[illegible]水蒸氣最も多き頃[illegible]之を見ることを得べしと云ふ。[illegible]

伏木港　高岡市　銅器製造の起原

伏木港　[illegible]富山灣の西南隅、庄川の河口左岸にあり、船舶の碇泊に便利にして日本海に於ける稀有の良港なり、開港場の一にして米穀の輸出盛なり、主要なる貿易品は米、食鹽、繩、莚等なり、[illegible]將來亞細亞大陸に對して[illegible]有望なる貿易港とす、人口七千に過ぎず。[illegible]港界は[illegible]を中心として[illegible]海里半の半徑を有する圓圈の[illegible]弧內とす、水深は二尋乃至三尋、底質は砂[illegible]潮差高潮三時六分、大潮昇一呎四分の一、小潮昇四分の三呎、外國輸出品は、鐵製品、食鹽、淸酒、繩等なり、輸入品は油粕、荒銅、鐵鉎、及[illegible]內國輸出品は米、莚、表英蓙、賣藥、肥料、輸入は鰊、鯡目、干鹽魚、石炭、軸木等なり。

近年日本海定期汽船の出入繁きこと日本海第一にして、日本郵船會社の定期寄港は每月六回、其他本港直江津間、及七尾間の定期航通絕えず、然れども此港は北風吹くときは、七尾灣に避けざる可らざるを缺點とす、近時伏木、放生津（ホウジヤウヅ）の兩市街を總稱して新港とも云ふ。

高岡市　庄川の左岸にありて、西に小矢部川を控へ、北陸、中越鐵道の要衝にして、水陸共に便利を極む、富山と共に越中の二大市にして、漆器銅器の產出多く、人口三萬二千、商况活潑なり。

漆器は高岡塗と稱し[illegible]種の雅致あり、塗の原料は奧羽、關東より輸入して加工す、全縣下の產額二十萬圓に上る、銅器の產出は甚だ多く全縣下約四十三萬圓を出し、本市の產出を重なるものとす。

銅器製造の起原は慶長十四年前國主前田利長[illegible]高岡城に移居す、武器職工數十名之に從ひ、利長之を廓中に置く、時に後藤某、安川某[illegible]共に彫鏤に名あり、子孫世々業を繼ぎ、其業を學ぶもの多し、初めは刀劍の裝具、烟管、佛具に過ぎざりしが[illegible]安永年間安川三右衛門（乾隆）、研究の結果[illegible]銅鐵の鑄銅[illegible]金銀の彫鏤[illegible]一變せり、高岡象嵌の名初めて著る、職工次第に增加せ[illegible]

諸國に轉送販賣し、製造甚だ盛大、高岡の一大產物となる、天保年間、角羽某進ぐ各地の銅器を蒐集し、其時好と樣式とを研究し、尋で同業商起り、益々盛大となり、安政中角羽又横濱に赴き、外國人の嗜好を察し外國向の改良を加へ、時に横山某鑿刀の巧を極め、和漢の名畫又は古代の彫刻を以て模範となし、其製器の風趣を一變し、高岡銅器の名、いよく天下に顯る。

研究上の注意

一、本縣も水害多く、岐阜縣と相似たることは、地勢の關係あることに注意すべし。
二、伏木港の繁盛なる要因を知り、併せて將來の有望なることに注意すべし。
三、賣藥業及び銅器製造業について熟知すべし。

石川縣

沿革　加賀國　弘仁十四年越前の江沼、加賀二郡を割きて加賀國を置き、既にして江沼郡の五鄕二驛を割きて、能美郡を置き、加賀郡の八鄕一驛を割きて石川郡を置き、國府能美郡に定む、（今の國府村）永延の初、富樫忠頼本國の介に任ずるに至り國政を世襲し、五世の孫家國府治を石川郡野々市に移し、世々之に居る、文治元年源頼朝忠頼九世の孫泰家を以て守護となす、建武中奧三大納言三條師基を國主に任じ、河北郡に治す、（御所村と云ふ）延元の初、足利尊氏京師を犯す、師基兵を率ひて入て之を援く、既にして尊氏筑紫に走る、泰家五世孫高家、從ひ行き功あり、因て守護となる、三年朝廷瓜生照を國守に任じ、新田義貞の應援たらしむ、義貞尋で戰死し、照等逃亡し、國柄富樫氏に歸し、子孫に傳ふ、文安四年高家の後、五世教家卒し、其子成春と叔父泰高と守護を爭ふ、將軍義政本國を以て兩人に分與し、成春を國介に任ず、長祿二年義政半國を分て赤松政則に賜ふ、富樫の家臣拒みて納れず、成春の子政親の時に當て、眞宗の僧徒本願寺、專修寺の兩派州内に蔓延し、黨を樹て相爭ふ、政親專修寺を直とす、本願寺の僧之を怨み、政親に反す、長享二年政親高尾城を修し之を保つ、本願寺の僧之を攻め城を陷る、政親自殺し、富樫氏亡ぶ（忠頼より二十二世五百餘年）賊遂に闔國に據り、寺宇を山崎山（今の金澤城）に營み、堡砦を修し、貢租を山科（山城）本願寺に入るゝ者八十餘年、（長享より天正の初に至る）天文中上杉輝虎伐て之を降す、弘治元年朝倉義景將を遣り擊て其西境を取り、手取川を以て界とす、天正八年織田信長朝倉氏の故地を徇へ、遂に全國を平らげ御山（今の金澤）を佐久間盛政に、松任（石川郡）を德山則秀に、大聖寺（江沼郡）を拜郷家嘉に、小松（能美郡）を村上義明に與ふ、十一年豐臣秀吉盛政を賤ヶ嶽に破て之を殺し、其故地石川加賀二郡を以て前田利家に與へ、御山に治せしむ、江沼能美二郡を丹羽長秀に、大聖寺を溝口秀勝に、松任を利家の子利長に與へ、秀勝義明をして長秀に屬せしむ、十二年長秀卒し、子長重立つ、秀吉二郡を削り、其地を堀秀政及び秀勝義明に分與す、既にして利長守山（越中）に轉じ、長重を松任に徙す、慶長二年秀政の子秀治、秀勝義明

能登國

等を越後に轉封し、長重を小松に、山口宗永を大聖寺に封じ、自餘皆利家に加賜す。利家卒して子利長嗣ぐ、關ヶ原の役、宗永、長重西軍に應ず、利長宗永を滅し、長重に諭して降らしむ、德川氏長重の封を收め全國を以て利長に賜ひ、金澤に治し、能登越中を兼領し世襲す、而して大聖寺を其支封（利家の嗣利常の第三子利治を封ず）となす。維新後金澤大聖寺を兩藩と稱し明治四年改めて縣となし、既にして大聖寺を金澤縣に併せ、五年改めて石川縣とす。

能登國は此國は養老二年越前の羽咋、能登、鳳至、珠洲の四郡を割きて置き、天平十三年廢して越中に合す、天平寶字元年復置く、能登郡は後鹿島郡と改稱す、寛文十一年古名に復す。元祿十三年再び鹿島と爲す。文治二年長谷部信連得田章通此國の地頭職となり、信連は大屋莊に居り、章通は德田莊に居り、兩氏皆其職を子孫に傳ふ、元弘元年中院定清國守に任ぜらる、建武の亂定清足利氏の黨普門利清と石動山に戰て敗死す、是に於て全國足利氏の有となる、末授中島山義深此國の守護となり、七尾の城に治し、子孫其職を世襲し、義春に至る、天正五年上杉輝虎來り攻む、會々義春病で歿し、兵振はず、輝虎に降り終に其有となる、七年畠山の遺臣溫井景隆等、上杉氏の戍將を殺し、七尾城を復し之に據る、織田信長將を遣り、景隆を降し、全國を其有とす、九年信長前田利家を此國に封じ、利家七尾に治す、後加賀に徙る、慶長四年利家羽咋鹿島二郡を第二子利政に與ふ、關原の役後、德川氏利政の地を沒し、其兄利長に全國を與ふ。

子孫世襲す、明治四年廢藩置縣の時、金澤縣に屬す、既にして七尾縣を置き、越中射水郡を兼治す、五年七尾縣を廢し、全國を石川縣に合し以て今日に至れり。

位置

位置 東は富山縣の西に連り、東南は長野縣、南は福井縣に接し、北は全く日本海に臨む。其管轄は加賀全國（金澤市、江沼、能美、石川、河北の一市四郡）能登全國（羽咋、鹿島、鳳至、珠洲の四郡）とす。

地勢

地勢 加賀國の東部には白山火山脈南北に馳走し、脈中の主山白山は東南境に高聳す、其支脈北に走りて加賀能登と越中との境を劃り、平軍の潰敗を以て名ある礪波山（俱利加羅峠）は此脈を越ゆるの山路なり、尚越前との境上にも其餘脈起伏せり。

能登半島の生成

能登半島は掌狀をなして日本海中に斗出せり、地質學上の古代は一の孤島なりしが噴出岩により て本土に連りしものなり、半島の北方の高洲山は（二千八百十六尺）最高點にして、此の山脈東は佐渡、西は隱岐に連り能登火山脈の稱あり。

加賀の西方は海岸に沿ひて一帶の平野ありて、沿岸は出入乏しく、砂丘概ね相連り良港なし、唯能登半島の東方には七尾灣ありて内に能登島を抱く、本縣は地形狹長なるを以て大河に乏しく、唯手取川は白山に發源して日本海に流入するのみ。

白山

白山 は加賀、飛驒、越前の三國に跨り、山塊をなす、北陸道第一の高山にして、名高き越の

白山の登路

白峰と云ふ、最高點八千九百三十九尺、其白山中尤も著名なるもの五峰あり、即此の三峰を御前(ゴゼン)、大汝(オホナンジ)、劍ヶ峰(ツルギガミネ)と稱し、南の二峰を別山(ベツ)、三の山(ミツ)と云ふ、御前峰の絶頂に白山神社あり、又御前、大汝、劍の三峰は上層に砂礫を頂き、一の草木を生せず、四時積雪盡きざるが故に總べて白山と稱す、就中劍ヶ峰は其狀五劍を束ね立てたるが如し、唯々望むべくして攀づ可らず。

白山の名にあらはれて三越路や

峰なる雪の消ゆる日もなし(廻國雜記)

白山の登路二あり、(一)は金澤市より四里、鶴來まで人車の便あり、鶴來より女原を經て十里牛首に至る、深山間の僻邑にして日本國中有數の深雪地とす、牛首より四里市の瀨村に到る、村より八町にして白山溫泉あり、(二)福井市より勝山町を經、谷峠を越えて達するもの行程十七里二十町。

白山神社

白山神社は御前峰の絶頂にあり、祭神は伊弉册、伊弉諾、菊里媛の三神なり、大汝岳には大巳貴命、別山には大山祇命を祭る、相傳ふ越前の泰勝大師頂上に此の三社を建立すと、時に養老三年七月三日なり。

鐵道北陸鐵道線

鐵道　北陸鐵道線(官設)は富山縣より來り、津幡(ツバタ)に於て七尾線と交叉し、金澤を過ぎ小松、大聖寺を過ぎ福井縣に入る。

七尾鐵道線

七尾鐵道線は北陸線の津幡より分れて北行し七尾灣に至る。

七尾港

七尾港は七尾灣內にあり、貿易場の一にして、浦鹽斯德に尤も近く、定期航海あり、又伏木を經て直江津にも航通すべし、陸には、金澤及び富山より汽車の便あり、人口一萬餘、街衢繁昌せり、殊に將來韓國及び西伯利との關係密なるにつけ甚だ有望なり。

港界は能登島松ヶ崎より、南東に引きたる一線以西、及び屛風崎峽以東とす、港內の水深は二尋內外にして、底質は泥より成り、朔望高潮二時四十分、大潮昇一呎四分の三、小潮昇四分の二なり。

外國輸出品は、米、陶器、セメント、花莚、醬油、木炭、輸入は大豆粕なり、內國輸出品は、酒、醬油、味噌、海參、生魚、輸入品は、米、大麥、小豆、大豆、食鹽、花莚、石油、砂糖、織物等なり。

中越汽船會社汽船は、東西航行途次毎日寄港し、又大家七平氏の日本海定期航路の一基點に指定せられ居るを以て、敦賀と共に浦鹽との交通頻繁なりき。

惜むらくは港頭暗礁多く、爆裂彈を使用して、先年爆破を企だてたるも、成功せざりき。

上杉謙信七尾城を攻む

七尾町の南一里に七尾城址あり、元畠山修理大夫滿則が應永五年能登の守護となり築く所、其數世の孫義春、天正五年の頃上杉謙信に攻められ遂に陷る、此の時謙信九月十三日夜賞月の詩あり。

霜滿軍營秋氣清、數行過雁月三更、越山併得能州景、遮莫家鄉憶遠征。

輪島

輪島　能登半島北端濱海の一市街にして、人口一萬、地僻陬にあれども、人民古來勵精業を勉む、故に富庶なり、即ち輪島塗は此地の特產とす。

輪島塗及び起原

輪島塗は通常黑、赤、綠の三色を主とし、膳椀、吸物椀、手皿、盃等日用品を出す、堅硬にして久しきに耐ゆ故に人之を愛す、其起原は詳ならざれども、慶長年間稱識と云ふもの紀州根來の髹法によりて創製す、當初甚だ盛ならざりしが、寬文の頃輪島近傍小峯山に於て一種の粘土を發見し之を煆燒して、漆に和し、漆下の髹料に宛つ、爾來堅牢を加へ、輪島塗の名高し、又塗方に幾多の改良を加ゆると共に、販賣組合を設け、高價の賣買を禁する等、專ら輪島塗の發達を計り、近時は選福社なる團體あり、信義を厚くし、業務を擴張す、因て外國輸出向等盛に製せられ、此の北濱僻陬の邊鄙なる產物あるに至れり。

金澤市

金石港は四北二里

金澤城址

金澤驗

陶器

金澤市

は犀川、淺野川の灌域を占め、人口十八餘萬、北國第一の都會、元前田氏百萬石の城下にして、街衢繁盛なりしも、廢藩後、地北偏にありて一時衰へんとせしが、近時陸には鐵道の便あり、海には金石港に向て坦道を通じ、貨物の集散に便にし、諸官衙即ち石川縣廳、第九師團司令部、第四高等學校醫學專門學校等あり、北陸文武の中心たるのみならず、金澤城址日本三公園の一たる兼六公園あり、且産業も大に發達し、陶器、漆器、銅器、羽二重等を出し、今尚北陸第一の都會たるを失はず。

金澤城址は市街の中央にあり尾山と稱し、もと暦應の頃火宅僧覺如（親鸞より三世）一向宗を弘め、一小刹を今の本城尾山の地に創立す、爾來漸次宗徒多く、文明年間蓮如（親鸞より八世）京師より來るに及び、信徒益々多く、遂に黨を組み一揆を起し、富樫の守護次郎政親も爲めに亡さる、天正八年織田信長の將、佐久間盛政尾山を屠り、一揆を壓し、後羽柴秀吉入國の山城を前田利家に與ふ、因て七尾城より移り金澤の名に改む。

尾山城は前田家の舊館にして、堅牢の稱あり、輪島金澤匹敵し山中は其半に過ぎず。

金澤繁榮は、前田家の獎勵保護により、盛大となり、五十萬石と云へる、京都東山殿の推奨を被れる、名工の子孫前田家に仕へ、瓦匠を出し、東山風の妙趣は獨金澤に傳ふるまで世に稱せられ、斯くて前田氏同藩内の山中、輪島と共に相競ひて其業進歩し、近年に至り益々盛大となる、其製品は日用具にして、陶器は未だ久しからず、文化三年京師の陶工木米來りて河北郡春日山に窯を起し小松の錦山吉兵衛をして、彩繪せしむ、即九谷風の瓦工なりき、此れ今日の金澤陶器の祖なり。

第六公園

小松

安宅の舊址

大聖寺

山中

山代

九谷燒の起原

第六公園は金澤城の東南にあり、舊藩公の別莊にして、近年公園となり、松杉蒼鬱花木研麗、泉石亭榭皆雅數を極め、風景佳絶なり、其第六圖と云ふは出大、幽遠、人力、蒼古、水泉、眺望の六勝を兼ぬるが故にして、白河樂翁公が栗の李格非洛陽名園記に取り命名すと云ふ。

小松は人口二萬三千、商業盛にして、陶器、羽二重を産す。小松の西南岸に安宅あり、安宅は義經勿度が奥州に下過時に、山伏の變なる通さんと云ふ關所の地にして、弁慶勤進帳を以て聞ゆ、又此地方は日本海岸の土地發達するに反して、漸次凋落の觀ありて、其所謂安宅關址、今二三里の海中にありと云ふ。

大聖寺　本縣の西南隅にある、一都會にして、人口一萬、九谷燒、羽二重等を産す、此地は富山と共に前田氏の二支藩の一なり。

山中　大聖寺の東南二里半にあり、温泉と漆器製造とを以て有名なり、温泉は鹽類泉にして、温度百八十度を越ゆ、漆器は轆轤製の糸目椀、薄盃の類最も多く、産額十三萬圓に上る。

山代　は大聖寺東南一里餘、温泉及び九谷燒の窯元あり。

九谷燒は數所あれども、元九谷に創造せしを本窯の總稱とす、寛永年間大聖寺の藩主、前田利治藩士田村權左衛門、後藤才次郎の二人に命じて、陶窯を開かしむ、然れども精巧の品を製す、其術傳を得、逃歸して精巧の品を製す、其術は絵師久隅守景の描寫する所にして、當時の品は古九谷と云ひ、世の珍重する處なり、此窯已に中絶せしが、文化の初年に吉田屋八右衛門其廢絶を慨き、再び九谷の陶窯を修理し、專ら支那交趾風の陶器を製出す、是を九谷の中興とす、九谷の地たる大日山の麓、道路險悪、運搬に不便なるを以て、同十一年陶窯を山代村に移し、九谷吸坂の陶土を採り、益に其業を營む、世之を吉田屋陶と稱す、古九谷に遜ぎて聲價あり、永く宮本屋なるもの吉田

…風に倣ひて起る、此時飯田屋と稱する畫工あり、九谷固有の赤色に換ゆるに一種の工夫を出し、赤顏料に金彩を加へ、……北宋派の方氏墨譜を摸倣して、畫風一變し、更に古雅鮮明なる繪陶を出せり。

研究上の注意

一、現今の金澤市と、往時の金澤市とを比較すべし。

二、七尾港の大陸貿易に對する、將來の關係を研究すべし。

三、地體の變動に急激と寛徐とあり、急激なるものは地震火山の如く、寛徐なるは汀線の上下の如し、安宅關の變遷につきて如何なることを知るか。

福井縣

沿革

越前國　上古此國以北、越後に到るまでを總稱して、越國（古志の國）又は三越路と云ふ、（越前を越の道口、越中を越の道中、越後を越の道尻と稱す）後分れて越前、越中、越後三國となし、養老三年越前國羽咋、能登、鳳至、珠洲の四郡を割て能登國を置き、弘仁二年又越前國加賀江沼二郡を割て加賀國を置く、成務天皇の朝に國郡に造長を立てられしより、當國又國造の任地となれり、後國司と云ひ、又國守と稱す、國府を丹生郡に置く（今の武生、舊府中と云ふ）

初六郡を分つ、敦賀、丹生、今立、足羽、大野、坂井是なり、後南條、吉田二郡を割て八郡となす、歷朝國守國介來り任に就く、或は遙領あり、鎌倉時代には、北條時政守護の事を行ひ、……を置て州事を管す、其後地頭職を置て、守護を置かず、足利尊氏の兵を擧ぐるや、高經をして本州を侵略せしむ、延元中新田義貞皇太子恒良親王及び尊良親王を奉じて金崎に入り、高經と對峙す、……人瓜生重、兄保等と共に義貞に應じ、杣山（今南條郡）に據る、因て重を州守に任ず、既にして皇太子賊手に陷り、義貞及び子義顯、畑時能等、前後難に殉ひ、重等の兵潰ゆ、高經終に北陸諸州を定む、尊氏即高經を本州に封ず、子義將嗣ぎ斯波氏と稱し、京師に在りて遙領世襲し、家宰朝倉高景を以て守護代とす、義將六世の孫義敏に至り、義弟義廉と相鬩ぐ、高景六世の孫敏景、義廉に黨す、義敏敏景を誘ふに本州を讓るを以てす、敏景遂に義敏に歸す、文明三年甲斐氏亂を爲す、敏景討て之を平ぐ、將軍義政因て守護となして、一乘谷（足羽郡）に治す、玄孫義景に至り、勢威益振ひ、弘治の初め一向賊を打て、加賀の半國を敗る、元龜中織田信長と相戰ひ連敗し、天正元年義景自殺し、朝倉氏亡ぶ、信長朝倉の降將斯波長俊を以て假守となす、長俊政を失し、加州の一向賊虛に乘じて侵入し、朝倉の遺臣と共に長俊を亡し、全國を領す、三年信長賊を打て平ぐ、柴田勝家を北莊に封じ、北陸を控制せしめ、今立郡を佐々成政に、南條郡を前田利家に與ふ、九年成政を越中に封じ、其地を勝家に併せ有せしむ、十一年豐臣秀吉勝家を亡し、利家を加賀に徙し、

全州を舟波長秀に與へ、北莊に治せしむ、十三年秀吉長秀の守重長の封を削り、(堀秀政を北莊に封じ、大谷吉繼、(敦賀)長谷川秀一、(東郷)靑山忠元、(丸岡)織田秀雄、(大野)に分封す、慶長二年秀政の子秀治を越後に徙す、北莊を靑木一矩に與ふ、五年關ヶ原の役起り、吉繼以下(吉晴を除く)皆西軍に屬す、德川氏其地を收め吉晴を出雲に移し、第二子秀康を全土に封じ北莊に治す、十八年、本多成重を丸岡、(後有馬淸紀)に移す、寬永元年秀康の子忠直罪ありて謫せられ、第二子忠昌代り封せられ、北庄を福井と改め、世襲す、忠昌其弟直政を以て野に、(後土井利房)直基を勝山に、(後小笠原貞信)直良を木本、(直良徙封の後城廢す)に分封す、其後封を受くる所の敦賀、(酒井忠淸若狹酒井氏支封)鯖江、(間部詮言)凡て六藩、正政革新改正縣となし、三年十二月別に、本保縣(丹生郡)を置き、已にして四年七月廢藩置縣、十一月鯖江小濱の二縣を廢して敦賀縣を置き、本保、福井、丸岡、大野、勝山の五縣を廢して、福井縣を置き、十七月福井を改めて足羽と稱し、六年一月壽永之を廢し、敦賀に併せ、本州及若狹を兼治す、明治九年八月、敦賀縣を廢し、本國七郡を石川縣に屬し、敦賀郡若狹全國を滋賀縣に隸す、十四年再び福井縣を置き、本國及び若狹二州を管治す。

若狹國　和名抄に和加佐と訓し、垂仁天皇の頃、已に其名あり、允恭天皇の朝、膳臣祖佐白米命兒荒磯命を以つて初めて國造となし、(履仲帝の時膳臣荒磯に稚櫻てふ嘉名を賜ふ、稚櫻は若狹と語音相通ずれば是れ履仲天皇遊宴に膳臣余磯(荒磯に同じ)酒を献ず、時に櫻花御盞に落つ、天皇之を賞び、宮名を稚櫻宮と賜ひ、又萬磯を稚櫻部臣と云ふと、此れ國名の起因、天平寶字五年、高橋朝臣人足を以て始めて守となし、國府を遠敷郡(今の府中村)に置く、鎌倉幕府の時、惟宗忠季に命じ守護莊を賜ひ、州守に任じ、其餘郡邑を以て藤原行光中條家長等に分與す、寬喜の初將軍藤原賴經、惟宗氏の邑を收め、北條經時に賜ふ、爾後北條氏世々本州を領し、京畿を控制す、北條高時誅に伏せし後、內大臣藤原公實國司となり、旦代をして管せしむ、足利尊氏の反するや族弟家兼及び佐々木高氏をして分轄せしむ、與國年間に家兼の兄高經守護となり、後山名時氏、大高重成、細川淸氏相繼で守護となる、正平十六年、淸氏吉野に歸順す、將軍義詮、石橋和義(カズ)を守護となす、二十一年土色範光之に代り、元中八年詮範山名氏淸を討て功あり丹後を加封し、孫義貫に傳ふ、永享中將軍義敎武田信榮(ナガ)に命じ、義貫を殺し、信榮を以て守護となす、相傳ふ九世、元明(モトアキ)に至り朝倉義景に合し、織田信長を拒ぐ、義景亡び元明降を乞ふ、信長丹波長秀をして州を監せしむ、天正十年豐臣秀吉元明を近江海津に誘致して之を殺し、武田氏亡ぶ、(九世百四十餘年)長秀因て守護となる、十三年長秀卒し、子長重嗣ぐ、十六年秀吉之を松任、(加賀)に徙し、淺野長政を封す、文祿二年甲斐に轉封し、其地を分ちて小濱、(六萬石)を木下勝俊に高濱、(二萬石)を、其弟利房に封じ、關原役後、德川氏二人の封を沒し、京極高次を小濱に封じ、寬永十一年之を出雲に徙じ、

其故地を酒井忠勝に賜ひ、（十萬石）世襲維新に至る、廢藩後、敦賀縣より兼治し、明治九年敦賀縣を廢し、本國を滋賀縣に合す、十四年再福井縣を置き、本國を滋賀縣より分轄し、福井縣に合す。

位置　福井縣は石川縣の西南にあり、東及び南は岐阜縣、滋賀、京都府に境し、西方は一帶日本海に臨む。其管轄は越前全國（福井市、足羽、吉田、坂井、大野、南條、今立、丹生、敦賀の一市八郡）若狹全國（三方、遠敷、大飯の三郡）とす。

地勢　縣の東部越前の東境には、白山火山脈蜿蜒し地勢高峻なり、南境は若狹と共に中國山脈によりて包まれ、岐阜縣、滋賀縣、京都府の何れの地より本縣に入るも山嶺を越えざる可らず、又丹後との堺に聳つ青葉山は白山火山脈に屬する火山なり。

北方の沿海は出入參差して港灣少からず、殊に西に小濱灣、東に敦賀灣あり、越前の海岸は出入多からず、唯々越前岬西に出でゝ、丹後の與謝半島と相對す、濱海漁業盛にして、殊に若狹鯛、鰤、鹽鯖等は多く京都に輸出せらる、又越前の海岸には雲丹を産す。

以上の如き地勢なるを以て大なる平野なく、唯々越前を濫流する日野川、足羽川、九頭龍川の流域は肥沃の農產地なり。

日野川は越前の南方より發し、北流足羽川を入れ、又九龍川を分れて坂井港に至り、海に入る。

港頭に三國町あり川によりて運輸の便あり。

鐵道　**北陸鐵道線**（官設）　石川縣より來り福井、武生、敦賀等を過ぎ滋賀縣に入る。

福井市　縣の北方足羽川の流に沿ひ、縣廳の在る所にして、人口約四萬二千に上る、此市は徳川幕府御家門の第一なる越前家松平（結城）氏の舊城下にして、俗と『北の庄』と稱し柴田勝家の據りし所なり、松平氏封を受けて福井と改む、廢藩後一時市況衰えんとせしかども、市人企業心に富み、近年羽二重の產出多く、又奉書紬を出すこと尠からず、商工活潑なり、市内足羽山に別格官幣社藤島神社あり。

此地に封ぜられたる、徳川秀康は家康の第二子秀忠の庶兄にして、天正二年八月を以て生る、天正十二年十月羽柴秀吉に養はる、後結城晴朝乞ふて養嗣とす、關ヶ原の役宇都宮にありて上杉景勝を控え功あり、亂平きて越前に封ぜらる。

藤島神社は新田義貞を祀る、元市北藤島村にありしを、貞は後醍醐天皇の皇子尊良親王を奉じて、北陸を鎭ぜしが故に藤島に移せり、是れ此山が南朝の當時足羽城ありしが故ならん、義貞は後醍醐天皇の皇子尊良親王を奉じて、北陸を鎭ぜしが故に藤島に移せり、是れ此山が南朝の當時足羽城ありしが故ならん、義貞の墓、自ら世間に異り、能登の總持寺と共に本宗の二大本山なり、總持寺に對して之を越本山と稱す。

福井市の東四里（志比谷村）に永平寺あり曹洞宗の本山とす、北陸道中有名の巨刹なり。

此寺は初めて曹洞宗を傳へたる、道元禪師の開きたる處、寬元二年の開基にして、永平寺山の麓、幽溪の錦處にあり、枯木寒岩の色、鳥聲風韻の首、

敦賀　敦賀灣頭にあり三面山峰を繞らし、港内波穩に大船巨舶を入るゝに宜し、實に良港の一にして、殊に露西亞及び韓國に對し、將來有望なる港なり、人口一萬八千餘なり、金崎神社は町の東

北におり氣比神社も赤附近にあり。[illegible]

[illegible]灣界は赤崎より[illegible]子崎に引きたる[illegible]線内とす、水深は二尋より七尋にして、底は泥なり、朔望高潮〇時三十五分、大潮昇一呎。

外國輸出品は野菜、醤油、菓實、木炭、刻昆布、輸入品は大豆、小豆、鹽魚、打物等なり、内國輸入品は生糸、縮緬、雜品、石油、輸出品は生糸、縮緬、米、鯖、砂糖、鰊〆粕等なり。

日本郵船會社の汽船は每週二回往返に寄港し、又若狹小濱を經て丹後の舞鶴及び宮津に定期船あり、大家七平氏の日本海定期船は本港を以て一寄點地とし、開戰前は浦鹽との航海殊に頻繁なりき。

敦賀は古の笥飯浦にして古代より著名なり、殊に崇神天皇の末年に任那の王子都怒我阿羅斯等なるものこゝに來着せり。

金崎神社は後醍醐天皇の皇太子恒良親王及び皇子尊良親王を祀れり、又氣比神社は官幣大社にして、仲哀應仁二帝及び神功皇后を合祀せり。

小濱 [illegible]は若狹國の中央小濱灣に瀕せり、元酒井氏の舊城址なり、若狹塗を產す、維新の志士梅田雲濱は此地の人なり。

雲濱は通稱源次郎別號湖南と云ひ、志氣慷慨、安政年中天下の志士と交りて攘夷の說を唱へ、幕府に捕縛せられ、安政六年九月江戶の獄舍に沒す年四十四、後從四位を贈らる。

[illegible]

若狹塗は其始は詳ならず、製法は支那の存星の遺風を模し、紅、緑、青、黃、黑の彩漆を以て塗り、其形狀恰も雲の如し、且金銀箔を以て錦繡文の如く花章を作り、甚だ妍美なり其塗質も亦堅牢なり。

若狹灣は元來陷落せるよりなるものにして、此處より大阪灣まで百二十五粁、中に琵琶湖及び余

吾湖又淀川の溪谷あり加ふるに山城には巨椋池あり以て日本海と太平洋との橫斷運河を開鑿せば、軍事上、商業上實に偉大なる利あるべし。[illegible]

敦賀と伊勢の間は八十粁にして、木曾川の上流を利用して、湖水を繫げば又開鑿することを得べし。[illegible]

研究上の注意

一、越前國は京都に近く、近江とは山嶺を以て隔てられ地勢險要の地となる、從て此地によりて覇を振はんとせる諸雄多く、故に古戰場少からざることに注意すべし。

二、敦賀灣の日本海に於ける位置と、對亞細亞(對韓)貿易との關係に注意すべし。

三、敦賀港と日本橫斷大運河との關係を研究すべし。

第四章 近畿地方

總說

區劃 近畿地方は本州中區の西南に連り、元畿內、即山城、大和、河內、和泉、攝津の五國と、其の附近の近江、伊賀、伊勢、志摩、紀伊、淡路、丹波、丹後、但馬、播磨の十五國を含む。[illegible]行政上之を分ちて二府五縣とす、京都府(山城及丹波の東北五郡、丹後)大阪府(河內、和泉[illegible]

攝津の東四郡)、奈良縣(大和)、和歌山縣(紀伊の西七郡)、兵庫縣(攝津の西三郡及び淡路、播磨、但馬の三國、丹波の西南三郡)滋賀縣(近江)、三重縣(伊賀、伊勢、志摩の三國及び紀伊の東三郡)是れなり、

舊來の畿內に他の諸國を合せて、近畿と稱したるものにして地勢、氣候、風俗、人情のみならず、政治、交通、商業上等全く聯關する所多きを以てなり。

境界　北の一部は日本海及び北國地方に連り、東の一部は中部地方(東山道)に接し、南は半島狀をなして太平洋に突出し、西は中國地方に連る。

沿岸　伊勢海　半島の東に灣入し、今は伊勢、尾張及び參河、志摩の內海を稱す(故に伊勢蝦と稱するも志摩の產なり、上古は志摩國も伊勢島と稱し、一境と見なしたり)、灣口は伊良湖崎と答志島と相對し、幅六海里、灣入約三十五海里、分れて二灣となる、西部は本灣にして、東部は三河灣なり、最深所二十尋を越えざれど、灣底泥土にして、靜穩の日は到所淀泊に好し、即ち桑名、四日市、津、鳥羽港あり。

熊野灘　伊勢海を西に出れば、即紀伊の南端潮岬の間は熊野灘と云ひ、波濤險惡を以て名あり、是れ全く潮流の進退によるとぞ、從て船舶の沈沒するもの多し、明治十九年土耳古軍艦エルトグル號の如き最も名あり、沿岸は斷崖多く良港少なし、潮岬は日本本州の最南角にして、岬邊岩礁多く、潮流甚だ急に黒潮も亦衝に當る、大風の時は大濤洶湧して、岬角を打ち實に壯觀なり、因て燈臺を設け航海に便す。

合す、濤頭起立入雲間、不見青山見雲山、(又云ふ此是蜻蜒洲盡處、漁舟一葉破天還、(望海)廣瀨旭莊)

紀州灘　潮岬より西北海上は紀州灘にして、其四國との間は、陷落により成りたる紀伊水道(紀淡海峽)にして、海岸は突出多く、日の御岬(比井崎)最も西に出て、阿波の蒲生田岬と相對す。

紀伊の東北端は淡路島と相對し、內に友ケ島あり、近年紀淡海峽の防備を此に修め、其西の由良と共に砲臺數個あり。

大阪灣　由良海峽を北に入れば、小判形をなす、大阪灣あり、小判の長き所三十五海里、沿岸は良港多し、殊に大阪、神戶の如き即是れなり。淡路島北に走りて、一狹水路をなすの處、明石海峽にして、岩屋の燈臺は航海に便に、舞子須磨の絕勝は航客を喜ばしむ。

播磨灘　明石海峽を西に出づれば、播磨灘にして、西、小豆島との間を云ふ、北岸には松を以て名ある尾上高砂曾根等あり、大石義士と鹽を以て名高き赤穗あり。

瀨戶內海　本州島の西南岸、四國九州の二島に包まれる內海を總稱す、通俗には大阪灣を含

紀伊山脈

大阪灣

地勢

鈴鹿山脈

瀨戶內海

まされど、海軍水路部にては之を入れて日本內海の稱を與へ、因て大阪灣までを包括して瀨戶內海と稱するを便とす。此の內海は東西に長く南北に短く、其長さ二百四十海里、其幅最狹三海里、最廣三十海里に過ぎずと雖も之を分ちて六區とす。和泉灘（大阪灣）播磨灘、備後灘（燧灘）安藝灘、伊豫灘（硫黃灘）周防灘、是れなり。海岸線の延長七百海里に亘り、沿岸出入參差して、良港灣多く、數百の島嶼、星羅散布し、波濤靜穩、風景清絕なり。本區に屬する瀨戶內海は大阪灣播磨灘の一部に過ぎざれば詳細は中國及び四國に說けり。

地勢　近畿の北に中國山脈、南に紀伊山脈の二大山脈蜿蜒し、從て地勢も北部と南部とは山岳重疊し、且此の兩大山脈を連る數多の支脈ありて、其の脈間に平野を存す。即北部中國山脈は丹波より來り、先づ丹、攝、播の間に一派を南出し、其尖端は所謂鐵枴岳となり、（一の谷は其の峽間にあり）本脈は東に於て丹波の山地を作り、又二派を南に出し西なる一派は愛宕山、嶽山、太王山となり、大和、河內の境に至りて生駒山脈となり紀伊山脈に連る。東なるは比叡山、東山、（ふとんがさで寢たる姿や東山）逢坂山、笠置山となり、伊賀、伊勢、大和との間を走り紀伊山脈に合す。

中國山脈の本派は近江と若狹、越前の間を東走し所謂木芽嶺（古に愛發關を置きたる地）となり、美濃、飛騨、高原に連る。美濃と近江の間に南北に亘るは鈴鹿山脈にして、伊賀、伊勢の間を沿

紀伊山脈

氣候

溫度

雨量

以て、紀伊山脈に合す。

南部、紀伊山脈は紀伊の大半、大和及び伊勢の南部迄亘り、山殆ど楔形をなし、近畿第一の山地にして、北には高野山、吉野山、龍ヶ岳には那智山等蟠まるあり。山脈の配置斯の如くなるを以て、河流も亦各方に排水す、即日本海に注ぐものには、東には淀川、大和川、西に加古川、市川あり、殊に淀川の灌域は廣く、瀨戶內海に注ぐものに由良川、朝來川あり、其の河域は有名なる伊勢米の產地なり、近江の諸水は總て琵琶湖に注ぐ。

日本有名なる大平野にして、土地肥沃農產饒に上流には京都の平野、下流には大阪の平野を作り、河口は出船千艘入船千艘の大阪なり。

太平洋に注ぐものは西に紀の川、有田川、南に熊野川あり、此等の河流は紀伊山脈間を流るゝを以て、紀の川を除くの外、兩岸に山聳ち水流も亦急なり、東伊勢海に注ぐものに宮川、櫛田川、雲出川あり、其の河域は有名なる伊勢米の產地なり、近江の諸水は總て琵琶湖に注ぐ。

氣候　溫度　氣候は元來山脈の方向又は山地と異れば、近畿各地は同一ならず、即冬は京都、近江、大和、大阪等寒く、紀州の各地及び神戶は溫かに、夏は大阪神戶和歌山等尤も熱く、紀州の南部及び日本海岸の宮津等最も冷凉なり。

雨量　雨量は、太平洋岸（紀州の南端）及び日本海岸最多に屬し、次は伊勢沿海、最少きは神戶より大和京都に至る中央各地とす。

風向　南風　生業產物

風向 大に山脈南北に蟠り、且大海水南北にあるを以て、同一なる能はず、要するに夏は南部、南風及び西南風多く、冬は北部北風及び西北風多く、中央は一定せず。

生業產物 生業及び產物は、各地の地勢、境遇の如何に依りて異なる。

即平原の人民は農業、礦山地方の人民は礦業、山地の人民は山林業、濱海の人民は漁業、製鹽、航海業、地域狹小人口稠多地方の人民は製造工業に從事するが如し。

即平野の地は土地肥へ、農產豐に、殊に大阪平野は米及び綿を產す山城大和は茶を產し、南部の山地よりは杉、檜、松等の良材を產し、殊に紀伊國とは木國と云ひしにても林產に富むを知るべし、都邑の地には製造工業盛に、殊に京都の西陣織、友禪染、縫箔、清水燒、大阪の紡績業、造船業又は神戸の摺附木、其他堺の緞通、紀州のフランネル、漆器、灘の酒等は何れも名あり、鑛產は但馬生野の銀、金、銅等最も名高し。

人情風俗

人情風俗 人情風俗も亦山地、平野、都會に於て各々同じからず、然れども近畿の人は概ね所謂上方氣風なり。

元來繁盛なる都會人民の性質は概ね浮華輕佻にして、金錢崇拜の傾あり。平原地方の人民は概して氣宇濶大、小節に拘束せず、灑落なり、山地の人情は質樸正直なれども、偏屈なるを免れず、山間を跋涉して猛獸を追ひ自ら勇敢なり。

京都の人情は千百年來帝都の地として、王朝柔弱の後を受け、山水秀麗の風に化せられ、風俗自然に貴紳優美にして、閑雅溫藉なり、大阪は古來商業殷賑の地として人情進取的にして、慧敏に、且商才に富む、要するに此地は歷史古く、人口繁く、又我國の中央交通の要衝たるを以て、風俗華奢に流れ、性質も亦柔弱たるを免れず、日清の役第四師團の名は臆名を以て聞えざりきされど最近南山の激戰には、大阪師團の爲に大に氣焰を揚げたり。

歷史　畿內の義

歷史 神武天皇此の地域大和に初めて奠都せられしより、明治維新東京遷都に至るまで、歷代の帝都は多く此地を出でず。

故に其附近の五國を稱して畿內と云へり、畿內とは王畿內の義、支那古代の封建の世、王畿千里の制あり、帝都の四方千里を天子の直轄領となし、他の諸侯の分領とする所となせり、因て此の稱より出しものか。

二千五百有餘年の間政治上の中心たるのみならず、又本邦の中央にして、東西交通の要衝たるを以て、古來幾多の治亂興廢を閱みし、英雄豪傑の爭鬪の巷となり、偉人の集合地となり、歷史の過半は此地に演ぜられぬ、因て甚だ史的遺蹟に富み、名刹、大社、勝地、古蹟多く、從つて土地よく開け、人口多く畿內五國の住民、一方里につき六千〇九十五人に上り、其の稠密なること本邦第一位とす。

交通

交通 交通の便否は土地の發達と、人文の開達と聯關し、之を導ぶ又必要なり、本區の京都平野、大和平野、大阪平野、或は伊勢播磨の平野、近江の平野等は交通至便にして、道路、鐵道縱橫に相通ず、今鐵道の主要なるものを擧ぐれば。

東海道鐵道(官設) 山陽鐵道と神戸に連聯し、大阪、京都を經て琵琶湖を廻り、美濃に至る。

(支線)敦賀線　東海道線の米原(マイバラ)より分岐し、北陸鐵道と聯る。

關西鐵道　尾張名古屋より起り、伊勢、伊賀、山城を經て奈良に至り、河内の中央を貫き大阪湊町に達す、是れ幹線にして支線多し。

(支線)加茂線　大阪網島より起り、奈良鐵道と漸く米津にて交叉し、幹線と加茂にて連絡す。

(支線)奈良線　京都より奈良を經て櫻井に達す。

(支線)城東線　官線大阪驛(梅田)より起り、大阪城の東を廻りて湊町、(天王寺驛にて幹線と連絡)に達す。

(支線)櫻井線　幹線の王子驛(大和)より分れ、櫻井(大和)に達す。

(支線)草津線　東海道線の草津驛より起り、幹線の柘植(ツゲ)驛に連絡す、(京都地方よりの伊勢大廟に詣でんとする人は之によるべし)。

(支線)津線　幹線の龜山驛より分れ、津市に至り參宮鐵道と連絡す。

參宮鐵道　關西鐵道津線と連聯して宇治山田町に通ず。

近江鐵道　官線の彦根驛と關西鐵道草津線の貴生川(キブカハ)驛と連絡す。

河南鐵道　關西鐵道柏原驛(河内)より起り、富田林に通ず、楠氏の古蹟、金剛山、赤坂城址等を探ぐるものは此の線によるべし。

南和鐵道　關西櫻井線の高田驛(大和)より分れ、五條(大和)に達す、吉野山に登らんとするものは本線の高驛(タカ)にて下車すべし。

紀和鐵道　關南和鐵道の後をうけて、五條より起り紀伊の和歌山に達す、高野山に上らんとするものは本線の名倉又は橋本に下車すべし。

南海鐵道　紀和鐵道と和歌山市に連絡して、和泉の海岸を沿ひ大阪難波驛に達す。

高野鐵道　汐見橋(大阪)より堺市を經て、河内の長野に至る(高野山下橋本に達する豫定なり)。

西成鐵道　官線大阪驛より起り、安治川口に達す。

山陽鐵道　官線の神戸驛より起り遠く下關に達す。

(支線)阪鶴線　官線神崎驛に交叉し、南尼ヶ崎まで、北は丹波の福知山を經て舞鶴に達せり。

播但鐵道　山陽鐵道姫路驛より起り、南は飾磨まで、北は但馬の新井に達す、生野銀山を見んとするの人は此線によるべし。

京都鐵道　官線京都驛より、丹波園部まで開通す、舞鶴に達せん豫定なり、嵐山の勝を探らんとする人は此線により嵯峨にて下車すべし。

[illegible]すべし。

研究上の注意

京[illegible] [illegible]

一、山脈の配置は、河流の排出と聯關し、從て此の山脈河流が、地勢の大體と聯關したるの狀態[illegible]注意せよ。[illegible]

二、此地方が早く歷史上の舞臺となりたる所以は、本邦地形上の主要部中心たることに注意して、[illegible]

三、[illegible]歷史科と聯關して研究すべし。[illegible]

四、京都の民風と大阪の民風とは何が故に異るかを自然的より推考して、人文と地文との關係[illegible]を悟るべし。

滋賀縣

沿革 近江國 成務天皇初めて高穴穗(滋賀郡)に都し、天智天皇大津(滋賀村大字錦織)に都[illegible]其後國府を栗太郡に置き、鎌倉時代より佐々木秀義等護となり、其孫信綱に到りて國守を兼ね、信綱の子泰綱[illegible]氏信等俱に將軍賴經に仕へ、泰綱は觀音寺城に居り六角と稱し、南境六郡(滋賀、栗太、甲賀、野洲、蒲生、神崎)を領し、嫡宗たるを以つて守護を[illegible]氏信は北境六郡(愛知、犬上、坂田、淺井、伊香、高島)を領して、京極と稱し、踏吹上平城に據り、愛知川を以て界とす。泰綱八世の孫、義賢に至り、織田信長に攻められ、其子義弼と共に出奔す。是時に當り、淺井長政小谷(東淺井郡)に據り、附近を領有し、信長に抗す。信長淺井朝倉二氏と姉川に戰ひ、之を破る。既にして朝倉氏坂本を陷る。信長叡山をして之を伐たしめんとすれども叡山之に應せず。秀吉又淺井氏を鎌羽に破る。信長次で叡山を攻めて之を燒く。[illegible]爲めに空し。信長淺井氏を亡して、後安土に築き之に居り、光秀を坂本に封じ、秀吉を長濱に居らしむ。信長弑せらるゝに及び、其長臣相謀り柴田勝豐を長濱に、丹羽長秀を佐和山に居らしむ。後石田三成、佐和山に封せらる。天正十三年秀吉秀次を八幡に封じ、同十七年京極高次を大津に封ず。文祿中秀次罪ありて國除かる。關ヶ原役德川氏石田三成を滅し、井伊直政を佐和山に封じ、後彥根に築かしむ。又高次を若狹に徙し、仁田一西を封じ膳所に居らしむ。後加藤嘉矩を水口に、本多俊次を膳所に、分部光信を大溝に、市橋長利を西大路に、小堀正一を小室に、稻垣重正を山上に、堀田正休を宮川に、遠藤胤親を三上に封じ、別に大津代官を置く。王政維新の初め、遠藤氏を和泉の吉見に徙し、羽前山形の水野氏を封じて朝日山藩を建つ。次で悉く之を廢し、更に大津、長濱二縣を置き、程なく長濱を廢じて犬上に改め、又合して滋賀一縣となす。[illegible]

位置 滋賀縣は岐阜縣の西南に連り、北は福井縣、南は三重縣、西は京都府と相接す。[illegible]

地勢及産物　北及び西は中國山脈の本派及び其支脈に依りて擁せられ、東及び南は鈴鹿山脈によりて包まれ、中央に凹然日本第一の大湖琵琶湖を湛ふ、従て四周の水流は悉く此の湖水に注ぎ、沿岸に小平野を作る。然れども湖西の平野は甚だ狭小にして湖東は南北に亘れる大平野なり。

重なる産物は米、麻、菜種等なり。殊に米は近江米として名高し。

米一ヶ年産額百十萬石内外、麻の産額六萬七千貫、日本第二は栃木四十一萬六千貫、第三廣島四十五萬四千貫、六萬八千貫、菜種は日本第三にして九萬三千石、第一福岡十二萬七千石、第二三重縣九萬三千石。

琵琶湖　湖の成因は所謂陥落によりて成れる陥落湖に屬し、其形琵琶に似たるを以て此名あり、北は胴にして南は轉手なり、一に、鳰ノ海(ニホノウミ)、淡海(アハウミ)、志賀ノ海(シガノウミ)の名あり、實に我國第一の湖なり。

國名を近江と稱するは、此の淡海の名より起り、之を近江と稱するは遠江の濱名湖あるに對して、近き淡海の國と云ふ義なり、後に淡海の文字を江に改め、「訓のチカツ」を略して、近江と稱してアフミと訓む事となれり。

東西五里、南北十五里、周圍五十九里三十一町、面積八十方里、海抜約百米の所にありて最深七八十米なり、湖中には奥の島、沖の島、竹生島、多景島等散在し、風景絶佳にして、世に近江八景の名高し。

近江八景　支那瀟湘八景に擬せしものにして、明應九年、近衛政家尚通の父子、佐々木高賴の招きにより、湖中に遊覧し八景の和歌を詠ぜしに始まると云ふ。八景とは北より數へて。

比良の暮雪
堅田落雁
唐崎夜雨
三井晩鐘
粟津晴嵐
瀬田の夕照
石山寺の秋月
矢橋の歸帆
日本横断大運河

比良の暮雪　湖西に於て四千尺の抜海に上り、山は花崗岩より成り、雪を以て名高し。

堅田の落雁　大津市の北三里湖中に突出せる處に浮見堂あり。

唐崎夜雨　大津の北一里、湖畔に巨松あり、偃然として蟠まり、枝葉繁茂翠蓋地を蔽ひ、數百の支柱を以て之を支ふ、幹の周五尋高さ三丈、(惜むらくは頂枝近時枯れたり) 若しそれ細雨朦朧として到らんか、幽靜佳絶にして、風色實に愛すべし。

三井の晩鐘　大津市の西、長等山腹に三井寺あり、一に園城寺と云ふ、琵琶湖を展望するに尤も可、試に登臨せんか、一大明鏡は地に横はり、風に孕むの帆影、烟を吐く小艇、一望に收め來り、何等の佳絶ぞや、若しそれ黄昏杵々撞き出す、鏘々たる鐘音は、琵琶湖面を渡りて何等の幽懐ぞ、到底其境に入らずんは其景は語る能はず。

粟津の晴嵐　膳所より勢田に到る跡境にして、右には長等山、波の如く其麓は木曾義仲の古戦場にして、左は琵琶湖の澄碧明鏡に臨み、一帶の街道には松樹鬱蒼路を狹む、唯々恨むらくは膳所の名城今や跡なし、されど、畦畔今井兼平の塚あり、坐ろに遊人をして、懐古の料たらしむ。

瀬田の夕嵐　勢田川に架し、一に唐橋又は青柳橋の名あり、河中一小島ありて大小二橋に分る、大橋は長さ九十六間、小橋は二十三間、橋頭に佇立せんか、斜陽西山に傾き殘斜紅影水に流して、漾々金を熔かし、銅を流して爛漫たり。

石山寺の秋月　勢田川の右岸石山の丘腹に巨刹あり、眺望佳絶、湖光は宛然鏡の如く、長橋は鐵橋(東海道線)と相並びて長蛇の道へるが如く、若しそれ山頭の觀月亭より登る山の端の月を觀んか、實に身は塵寰の人たるを忘るべし。

矢橋の歸帆　草津の西、一里の湖畔にあり、白帆點々晩霞を帶びて歸り來る、何等の幽境ぞや。

日本横断大運河　琵琶湖を人生に利用するには數多の利便あるべきも、將來最も必要なるは日本横断大運河にして、是れが交通上、軍事上偉大の効あるは論するを要せず、現に角國家的事業として、是非此が遂成を希望す、今佛國工兵少佐ムーセン氏の設計讓想を左に記せん。

日本を横断する一大運河　（三十一年）

右は琵琶湖を利用して大阪より敦賀に至る太平洋面と日本海とを接續せしめんとする一大運河にして、之が設計讓想したる